

はしがき

万水川のほとり

井口喜源治と研成義塾の資料年表の発刊にあたって

「水豊かなる万水よろづの

ほとりにわれは生れけり

河辺の柳うちけぶり

すみれの匂ふ春の朝

雲雀の声に夢さめて

水鶏の雛のあとを追ひ

世のさま知らで過しけり」

研成義塾の創立者井口喜源治がうたっている「次郎」という詩の一節である。

万水川は、東穂高村をうるおすように流れている清流で、井口喜源治は明治三年五月三日に生れた。彼は昭和十三年七月二十一日病のためこの世を去るまで、終生万水川のほとりに留まり、郷土の教育者として、幾多の苦難にもめげず、自由独立の気概を堅持して、人材の育成にあたった。

明治三十一年彼が東穂高村矢原の集会所を借りて始めた研成義塾は、小さな農村の私塾であって、生徒の数も多いときでも四〇名ばかり、家庭的な訓育の中に深い人格的な感化を塾生たちに与えた。

研成義塾については、すでに井口に感化を及ぼした内村鑑三をはじめとして、多くの人々が井口の業績を偲んで文章を寄せており、彼の遺稿と共に出版されている（研成義塾教友会編『井口喜源治』昭和二十八年）。

同志社大学人文科学研究所では、数年前から研成義塾の総合的な研究を計画し、その研究を進めていたが、昨年五月と八月の二回にわたって研究グループが穂高町を訪れ、研成義塾の教友・関係者の方々に親しくおめにかかり、本格的な調査研究に着手した。今回ここに収録するに至ったものは、そのときの現地調査によって判明した資料のうち、今後の研究に最も基礎的な資料と思われるものである。従来禁酒会の資料や井口喜源治の日記の存在はわかっていたが、その全貌を知ることが出来なかった。ここにそれらを収録することによって、今後の研究に役立てられることを切望するものである。また、研成義塾を素材とした小説「仮寓」は、当時の塾の雰囲気伝えるものとして貴重な資料価値をもつものである。その紹介を加えることにした。

なお、この『資料年表』に収録しえた文献資料は概ね財団法人井口喜源治記念館に収蔵されるものである。したがって、この記念館の設立にあたって、研成義塾の教友・関係の方々のなみなみならぬ努力によって、それらは収集され、保管せられるようになったといつてよい。『資料年表』の性格からすると、ここに収録した文献資料のほかに、前記『井口喜源治』

に収められている遺稿のうちで年記の明確なもの、そのほかそれぞれの人々によって行なわれている回顧録中の関連事項でその日時の明記されているもの、ならびに重要な来往書簡類で年記の明白なものなど収めたいものは限りがない。しかし収録する範囲をひろげてゆけば、この年表の基幹にした禁酒会幹事の手になる「禁酒会記録」（明治二十八年一月—大正十年一月）、井口喜源治の「備忘録第一、第二」（明治三十一年十一月—昭和八年四月）、井口喜源治の「日記」（昭和八年五月—昭和十三年六月）の記事自体の考証にまでおよばなければならない。われわれは、その作業はここに作られる土俵の上で、次の段階で行なうと考えた。

思えばわたしたちが穂高を訪れた昨年（一九七〇年）は井口喜源治の生誕一〇〇年、記念すべき年であった。アルプスのふもと清楚な蕎麦の花が咲き、麦畠とわさびの畠の間をぬうように今も万水川が淡々と流れている。この川のはとりに培かれた人脈は、近代日本の多くの分野に貴重な流れとなっている。今日キリスト教の土着化の要が説かれているとき、研成義塾はきわめて日本的キリスト教の土着化の具体的事例を提供していると思う。わたしたちは、これらの資料を吟味し、この顕著な私塾の実体と意義をあきらかにしてゆきたいと思うのである。

この資料の研究・調査のために、研成義塾教友・関係者の方々ならびに穂高町役場・穂高町教育委員会、さらに松本市立図書館の山田貞光氏に一方ならぬお世話になったことを記してお礼を申しあげたい。かつ、これらの資料を公開・上梓するに当って財団法人井口喜源治記念館の校閲をえたことを申しそえ、あわせて感謝の意を述べたい。

解説

禁酒会記録

東穂高禁酒会の記録は現在井口喜源治記念館に収蔵されるものと、松本市立図書館員山田貞光氏の所蔵されるものがある。

井口喜源治記念館に収蔵される記録は、和綴、一丁片面十行の縦野和紙（後半は無野和紙）に毛筆で書き継がれた記録で、表紙はまんなかに「禁酒会記録」と肉太に書かれ、右肩上に「明治二十四年十二月二十日創立」とあり、左下隅に「東穂高禁酒会」としてその末尾には東穂高禁酒会の印文を刻した印願がおされている。

本文は、一丁目冒頭に「本会記録」とあって、改行して二行目に「明治二十七年十二月二十日第四回記念会を開く云々」とあり、次は明治二十八年一月一日第一例会の記事に引きつがれる。したがって、東穂高禁酒会が設立されて、いわば草創の三年間の具体的な推移を知るべき記録は欠けているが、その後大正三年十二月六日の記事まで、その間時に精粗の差はあるけれども、連綿と書き継がれた貴重な記録である。

記録の記載は、毎年十二月二十日の記念会に二人の幹事が選挙でえらばれ、その幹事が当たったから、その年々、あるいはその時々によって、筆はことなる。しかしながら、その体裁はおおむね前例にならって記載されているから、二十余年の間、一貫した記録の趣きを保っている。もちろん、この記録のつやつやとした趣きはそこに

貫流する穂高の土の香りのするキリスト教信仰に帰因することはいうまでもない。しかして、この『資料年表』を編集した意図も、正しく土の香りのするキリスト教と社会とのかかわりに最も深い関心をもっているからである。

さて、禁酒会記録の体裁・内容について簡単にふれると、本記録は毎月の例会ならびに創立記念会記事が主であって、時おり催された臨時の催しがそれについている。例会は列席者の演説（五分間）ではじまり、会をとじるに当って余興（雷さま）などをして散会するのが常であり、その回数は頻繁に例会の持たれた年は十四・五回におよんでいる。記念会は明治二十八年度から満四周年記念会と称して、その後はそうした呼称を用いている。したがって、この記録は大正二年の創立満二十二周年記念会を終えて、まさに、満二十三周年の記念会を迎える直前でとぎれているわけである。記念会の次第は明治三十年十二月満六年の記念会のとぎから整えられており、それは、開会の辞、奏楽（君が代）、会務報告、禁酒会沿革説明、奏楽、会規朗読、演説（来賓・會員）、茶菓、余興、幹事選挙などである。記念会の次第は年によって繁簡の差があるけれども、その歴史を語り、会規を朗読し、各人その思うところを演説しあった形は、なかなか引き継がれていった次第であった。

なお、この禁酒会記録は、木杯辞退に関する禁酒会としての決議、ならびに研成義塾の原型に当ると思われる夜学会の開催に関する協議など、松本平、とくに穂高に推められていった「青少年の誓ひ」の下における動きが刻明に示るされており、しかもそれらがまさしく全会衆の合意の上に、堅く、しかも、厳肅にたしかめ合っ

なり立っていったことを知ることができる点できわめて大切なもの
というべきである。

記事中、この『資料年表』の編集にあつて、省略したものは、同
記録に貼付されている明治三十五年十月の湘南海嘯救済義団の「諸
兄弟の慈愛に訴ふ」という義捐金募集趣意書ならびに同十二月の同
義団による「義捐金品分配処置」に関する報告書の切抜記事のみ
で、その他はすべて収録した。

松本市立図書館員山田貞光氏所蔵の記録は、井口喜源治記念館に
収蔵されている記録に続くものである。記録は、和綴、一丁片面十
二行の縦野和紙に毛筆またはペンで書き継がれており、表紙の体裁
は記念館所蔵のものと同じく、まんなか「禁酒会記録」と肉太に
書かれ、右肩上に「明治式拾四年創立」とあり、左下隅に「東穂高
禁酒会」として、その末尾には同じ印類がおされている。

本文は、一丁目冒頭に「大正四年度紀事」とあつて、改行して二
行目に「一月三日夜八時ヨリ研成義塾ニ第一例会ヲ開ク」とある。
その後、大正十年一月二日まで六年間の記事が書き継がれている。

記録の体裁・内容は、ほとんど、井口喜源治記念館収蔵の記録と
同じであるが、この時期の東穂高禁酒会の活動は、下降線をたどつ
て、例会の出席者も少なく、記述も簡略になり、大正四年一月三日
から大正十年一月二日まで六年間の記録が、全部で僅か十丁に収め
られているに過ぎない。

大正四年度、大正五年度は毎月の例会が記されているが、大正六
年度は一月から六月までで終っている。大正七年度は、三月七日、
禁酒会主催で穂高劇場において一千名の聴衆をあつめ、救世軍山室

軍平大佐以下の講演会記事から始まり、四・五月の記事が欠落し、
六月二日の例会から「記事欠」と記して十二月創立記念会で終つて
いる。大正八年度は、一・二月の例会記事だけで、大正九年度は、
十二月十九日の創立満二十九年の記念会記事のみで、大正十年度
は、一月二日の例会記事で終っている。

『資料年表』の編集にあつて、記録は省略することなくすべて
を収載した。

さて、相馬黒光は『黙移後篇穂高高原』のなかで「種時く人」と
題して、相馬愛蔵を中心とする東穂高の若い人々を描写し、その若
い、東京遊学がえりの「青少年の誓ひ」をこの禁酒会の記録（井口
喜源治記念館収蔵）を紹介することによって説明している。黒光のこ
の著作は、昭和一九年三月三〇日に女性時代社から発行されている
が、禁酒会記録の紹介は、いま渉猟のおよぶ限りでは、この『黙移
後篇穂高高原』をもってはじめとしてよいであろう。黒光が、「と
ころどころ繰ってみよう」として、紹介する禁酒会記録には、相馬
家もしくはその周縁に伝誦されたと思われる記録が補綴されていて
興味深い。例えば、禁酒会記録の明治二十九年七月一日の項は、後
掲の通りであるが、黒光はハーリントンおよび金子豊吉の来穂に対
し、養蚕で多忙な農村の事情を無視した伝道に反対をした会田貫の
反対演説に言及しているのは興味深い。また、黒光はその末尾にお
いて次のようにまとめている。すなわち、「愛蔵は基督教の生活浄
化の方面だけをとりあげて禁酒会を創立し、宗教的に強ふるところ
は何もなかったが、年経るままに会の中心が頑固な基督教信奉に偏
し、大いに殉教の美を發揮すると共に逆に衰亡の運命をまぬがれな

かった」と(二七—二三三ページ)。禁酒会衰亡の一因は正しくここにもあることを思わなくてはなるまいが、はたして正鵠を射ているであろうか。禁酒会記録の解説に当って、黒光にここまでかかわるのは、近年になって白井吉見氏をはじめ多くの言及するひとつとがあらわれ、それにつけて議論の発端を史料解釈の始源にかえしてみることの必要を思うからであり、それを行なうにつけても、これをはじめて世に晋く紹介した人の名をあらわそうと思うからである。

請願書

明治二十七年三月から明治三十年十二月までの東穂高禁酒会を中心とする芸妓設置反対運動の請願書および陳情書は現在七通残されている。すべて松本市立図書館員の山田貞光氏所蔵のものであり、大正年間の禁酒会記録とともに同氏の好意によって年表に収載することができた。

いま年次順に各請願書の体裁を述べると次の如くである。

「非芸妓設置請願」

東穂高禁酒会は、会員以外の青年同志にも計り、青年同志会代表者小平総司、等々力弥次平、東穂高禁酒会代表者望月幸一、相馬愛蔵の共同で、明治二十七年三月二十四日、豊科警察署長宛に提出したもので、表丁縦十二行野紙(「福寿屋」製)一枚に毛筆で書かれ、「警収一六八七号」とある。同文の写しの日付は三月二十二日となっている。

「請願書」(写)

東穂高村生徒父兄井口喜十(井口喜源治の父親)外四六名連印で

明治二十七年三月二十七日、豊科警察署長宛に提出したもので、野紙半枚(三月二十四日のものと同じ野紙)に毛筆で書かれ、写しのため代表者以外の氏名は不明である。

「請願書」

右の写しを添えて、東穂高禁酒会、右代表者相馬愛蔵が、明治二十七年三月二十七日、長野県知事宛に提出したもので、半紙一枚に毛筆で書かれ、「警収四四三六ノ三」とあり、東穂高禁酒会ならびに相馬愛蔵の各印判がおされている。

「非芸妓設置請願」(写)

東穂高禁酒会四十名代表者相馬愛蔵、望月幸一が、明治二十九年七月十三日、豊科警察署長宛に提出したもので表丁縦十二行の野紙一枚に毛筆で書かれている。

「請願書」(写)

東穂高村年少者父兄九五名連印で、明治三十年四月四日、長野県知事宛に提出したもので表丁縦十二行の野紙一枚に毛筆で書かれ、写しのため請願者の氏名は省略されている。

「請願書」(写)

東穂高禁酒会会員五十四名代表者相馬愛蔵、丸山文市郎が、明治三十年七月十七日、長野県知事宛に提出したもので野紙一枚にわたって、格調ある筆致で書かれている。

「陳情書」(草稿)

草稿のため、日付、陳情者、陳情先など明記されていないが、本文中「本郡連合青年会ノ意向ヲ開陳ス」とあり、陳情者は南安曇郡連合青年会である。また「禁酒会記録」の明治三十年十二月十三日

に「南安各青年会連合して、彼の『豊科の妓楼設置之件に付き』其甚だ不可なる趣きを以て、陳情書を本県知事に宛て、出ず」と記してあるところから、南安曇郡連合青年会が、明治三十年十二月十三日、長野県知事宛に提出したものと推定される。野紙一枚に墨色も力強く書かれている。

なお、この間の芸妓設置反対運動については、山田貞光「東穂高禁酒会の成立と芸妓設置反対運動」(『木下尚江研究』第八号昭和三十一年十二月)の論策がある。

東穂高禁酒会会員名簿

一、東穂高禁酒会には、前述の「記録」とは別に、野紙を綴った「東穂高禁酒会会員名簿」があり、その巻頭には、同会の申合規約八カ条を綴り合わせてある。なおこの記録は大正九年で終わっている。

入会者総数は、禁酒会設立の明治二十四年から大正九年までに、二八〇名をかぞえる。ちなみに、これを年次別に示すと、第一表のようになる。なお、望月範三の名は、明治四十一年および明治四十二年の両年度に記載されているが、表中では、四十二年度入会者数から一名を引いておいた。

もっとも、会員数はそのまま累積されていったわけではない。退会者や除名されたものが多く、その時期は、名簿には明記していないものがほとんどであって、確認できないが、上記の期間をとおしてみると、その移動は第二表にみられるようにはげしい。抹消されなかった者は、二八〇名中七二名のみであった。

第一表

年度	入会者数	年度	入会者数
明治24	11	39	5
25	11	40	6
26	1	41	6
27	5	42	9
28	18	43	5
29	15	44	9
30	4	45	10
31	33	2	14
32	8	3	14
33	7	4	11
34	3	5	9
35	6	6	8
36	8	7	9
37	0	8	7
38	24	9	4

第二表

死亡	11	
退会	48	
除名	129	
移住	北米	15
	南洋	4
	北海道	1

二、入会者氏名の記載は、原則的には、年次別におこなわれているが、必ずしも徹底していない。たとえば、設立時の一名についても、九名が最初に記載され、他の二名は入会の日付は同日でありながら、一名(気賀沢玉童)は明治二十五年入会者中に、他の一名(丸山文一)は同二十八年入会者氏名の末尾にある。また、同様に年度内の月日が前後している例は多い。

『資料年表』に掲載するにあたっては、年度をこえたものは抽出

してまとめたが、同年度内で前後しているものについては、名簿に記載されているままの順序にしたがった。

井口喜源治の入会は、相馬愛蔵との関係から考えて、設立当初とみがちだが、名簿によれば、二年後の明治二十六年十二月二十日である。研成義塾創立は明治三十一年十一月である。相馬は明治三十四年九月離村、上京する。こうした経緯をおして、禁酒会・井口・研成義塾は不可分のものとなっている。以後、井口の影響下に入会するものももっとも多かったとみられる。研成義塾名簿や聖書研究会、祈禱会の参会者らとも、かなり重複する。

三、最後に、名簿巻頭に綴り合わされている同会申合規約を、ここに紹介しておきたい。

第一条 本会員は禁酒を主とし且品行を慎しみ職業に勉強し節儉を行ひ他人の為を計ることを誓ふべし

第二条 前条の誓言を破る者を除名す 但し医薬として医師より命ぜられたる時は此限りにあらず 若し後悔して再び入会を請ふときは会員一名の保証を要す

第三条 会費として毎年金十五銭を納むるものとす 但し一家内二人以上の入会者あるときは一人十五銭其他は十銭とす

第四条 禁酒主義を拡むるため各々尽力し或は金銭物品等を寄附すべし

第五条 幹事二名を選挙し庶務を托す

第六条 事情会員たるを得ざる者にして本会の趣意を賛成する人は賛成会員とす 但強酒の弊を矯めざる者は賛成会員たることを得

す

第七条 賛成会員は本会の運動を賛助するため毎年金二十銭を寄附すべし

第八条 本会は決して宗教及び政治に関係せず

明治二十四年十二月二十日

東穂高禁酒会員一同 印

なお、発足後に改正された条項は、左の二項である。その一は、明治三十五年十二月二十日、会費を二十銭（一家内二人以上の場合、一人は二〇銭、他は従前と同じ一〇銭）としたこと。その二は、明治三十九年一月三日、第八条の従前の条項を削除して、かわって、「本会規約の改正は記念会に於て出席会員三分の二以上の賛成あるを要す」である。

備 忘 録

一、井口喜源治の備忘録は、『備忘録第一』および『備忘録第二』（以下それぞれ『第一』『第二』と略称する）からなる。

その規模は、それぞれ数葉の挿入紙片を含めて、『第一』が二〇八ページ、『第二』が一八二ページであり、日並に辿りうる期間は、『第一』が明治三十一年一月七日から大正八年四月十二日まで、『第二』が大正八年四月十九日から昭和八年四月十五日までである。もっとも、実質的には、昭和七年十月十九日、農事休業に入ったことを記したのが最後である。その翌日、井口は脳溢血症で倒れ以後、研成義塾はついに再開されなかった。義塾を中心をおいたこの備忘録は、ここで終る。昭和八年については、やや乱れた字体

で、三月二十日および上記の四月十五日の項が記録されているのみである。

さて、研成義塾が、長野県南安曇郡東穂高村矢原の集会所をかりて、発足にこぎつけたのは、明治三十一年十一月七日である。正式に設立が県知事から認められたのは、二年半後の明治三十四年四月二十日である。十余年のあいだ青柳さく子、ついで宮沢ふさ子など家政裁縫を担当した協力者を得たけれども、ほとんど唯一の教師であった井口が、臥床するにいたって、義塾は閉された。形式上は、井口の病没直前の昭和十三年三月二十三日付の閉校届提出、同二十日九日廃校認可証入手まで維持された。

二、備忘録では、研成義塾発足の経緯について一言も触れておられない。しかも、明治三十一年十一月七日から明治四十四年十一月までの記録は、簡潔に整理されており、筆致からみても、明治四十四年から四十五年ごろに、まとめて記されたものであろう。したがって、この期間については、この備忘録のための、さらに『備忘録』の存在、ないしは日記などからの抽出記録とも考えられる。

記録記載の疎密は、ある程度、活動状況の反映を示しはするが、この記録のために一貫した原則が必ずしも確立しておらなかったとみられることにも、由来するのである。

三、次に、備忘録中、『資料年表』に収録しなかった事項についてのべる。

まず、明治三十四年から大正十年度にいたる各年度別の在籍者名

簿がある。生年月日、族籍、住所、保護者名などいっさい付されていないから、『研成義塾入学願書綴』などをもって、いわゆる学籍簿として整えなくてはならないが、この期間に関して、アラビア数字で一から五七五までの一連番号を付した台帳は、『第一』の三八ページにわたっており、塾生の動態把握に役立つ。同様に、塾生の個人別学費納入状況一覧が、明治四十年から昭和六年度にわたって、月毎に記録されているから、名簿とともに、財政状況をも含めて義塾の実態を知る手がかりとなる。『第一』には大正七年度まで八二ページ、『第二』には大正八年度以降六四ページにわたっている。

ちなみに、前記在籍者名簿において、明治三十四年度には、水口象雄を筆頭として二十七名が載っているが、一年以上在籍した者は十四名である。このなかには、水口のほか、斎藤茂、東条勝、望月秀一、平林利治、原田幸自由、望月正治らの名がみえる。翌年度新たに塾生となったのは三十二名で、望月五六、西沢永一、平林俊吾、平林破魔雄、堀内文一郎らがあり、三十六年度は十九名で、清沢冽、平林基宜、相馬綾雄らがいる。

ただし、創立の明治三十一年十一月から三十三年まで三年間の在籍者については、備忘録は完全に無視しているし、また、前記の『入学願書綴』も、明治三十九年十二月以降に限られるので、これらの範囲内のみでは捕捉しがたい。

次に、義塾で使用した教科書名と、年度によってはその注文数の一覧が、明治四十一年度から大正八年度までは『第一』に、大正九年度から昭和七年度までのものが『第二』に所載されている。教育

内容の水準の一端を知るために、そのなかから明治四十二年度のぶ
んをここで紹介しておきたい。

補習一年用書

興文社標註十八史略読本上、三省堂改訂小学英語読本一、スタン
ダードチョイスリーダー一、長谷川英習字帖一、光風館吉田国文教
科書一、山上中学校用最近統合外国地理上、同附図、開成館池田近
世化学教科書、藤沢算術小教科書下、寺尾吉田中学校用数学教科書
代数之部上、筑作峯岸新編西洋史綱、同附図、明治書院香川中等習
字教本一(男)、同大口高等女子習字教科書一(女)、図画教育会改
訂図画教科書一年用一、二

高等一年之部

小学読本、小学地理日本之部、算術高等、理科高等、習字高等、
三省堂改訂小学英語読本、スタンダードチョイスリーダー、長谷川
英習字帖

高等一年之部は、尋常小学校卒業生を受け入れるために用意され
た、義塾としては、いわば予科に相当する。

なお、教科内容に関連して、大正期の時間割にみられる「植」お
よび「殖」について一言しておく。たとえば、大正十四年度の時間
配当中に、「植」および「殖」に各一時間をあてている。これは、「
学科大体予定」の大正十一年度および同十二年度のところに、そ
れぞれ「植民一」と記しているから、右のいずれかを植民科とみ、
他を植物料としてよからう。当時在塾した卒業生たちも、「植民」
の時間がおかれていたことを記憶している。また、「道」は道徳で
はなくて「道話」であり、聖書を含むキリスト教的教育は、この時

間におこなわれた。

なお、成績証明などの事項は表題のみにとどめた。

最後に、多様なまったくの雑記に用いられたページが、『第一』
に十七ページ、『第二』に十六ページあることを付記しておく。

井口喜源治の日記

現在井口喜源治の日記で井口喜源治記念館に収蔵されているもの
は、明治二十八年、二十九年の日記、昭和八―十三年の日記である。

この「資料年表」に収載したのは、そのうち昭和八年から十三年
にわたる日記である。この日記は、一九三三年朝日新聞社版の「ア
サヒ日記」に書き綴られたものである。井口喜源治が脳溢血で斃れ
てから、ようやく筆が執れるようになって、随時に書き継いでいっ
たもので、その執筆の始期は次のように考えられる。すなわち、一
月一日の欄に「昭和七年十月二十日午後一時頃中気になった」と発
病の回顧をし、続いて「十二月五日朝七時頃東京にて和七郎自動車
にひかれ大髄骨を折り、直に下谷練辨町田代病院へ入院す」とあっ
て、その年の暮に引き続いて起った身辺の変異をしるしており、次
頁一月二日の欄から昭和八年五月九日以降の身辺記事を書いたが
ってしているから、まさしく半歳を経過して可能となったもの
であろう。昭和八年五月九日の日録の末尾に「仰臥半歳病未癒 慘
風悲雨相統到 人生万事多反意 纒頼天惠遺煩悶」としている
ことから窺うことができる。

記録の頻度はこの「アサヒ日記」の一月二十三日・二十四日の欄
で昭和九年の歳旦を迎えるという状態であるが、記事の中で看過す

ることのできないのは、井口喜源治の日本国家の現在、ならびに將來によせる憂憤の思いである。闘病一年を迎えて昭和八年十一月十日に、「仰臥一年病未癒 夢寐頻思国前途 頼劍起者又劍仆 求平和者可嗣地」と詠って、台頭する軍国主義に深い憂悶をひれぎしている。九年の元旦を迎えて、「曉闇庄四辺 寒風捲積雪 辛酸猶一時 已知東方白」というのは、単なる歳旦の思いばかりでなく、また自らの病患ばかりでもなく、国の前途にあったと考えられる。それは、この日記に書き続けられていった昭和九年の日録は、三月七・八日の欄で歳末を迎えるが、その年の暮の感想に「盛衰興亡幾變遷 攻城略地非吾事 可憫古來鬪爭跡 不如平和建設業」ときびしく時局批判の句を詠っていることからも明らかである。

昭和十年の日録は三月九・十日、十一日の見開きページからはじめられる。一ページ二分で、十一日の下半分には、「新しい国『満洲国』」と題して、国旗ならびに満洲全図をあげ、これに簡単な解説文を付しているが、この一ページにかれが詠いあげている詩はけだし、もっとも秀逸というべきであろう。それは下の地図と相映してきわめて象徴的でもある。

瑞氣靄々溢池辺 群鶴翔翔謳泰平
休説砲烟爆彈響 億兆齊望昭和春

波風はとく取りて四つの海静まらんことを待ちわたるかな

こうして、昭和十年の記事は三月二十四・二十五日の欄で終り、十一年は、二月二十日の総選挙という書き出しではじめられる。

「アサヒ日記」のページも少しずつ進んで三月末となり、見聞き左のページに四月一日を見るところに進むが、昭和十一年の日録は、そこが九月二十日に相当し、次の記事に遭遇する。

「義塾旧校舍に最後の集りをなす、出席者小沢寿作 白居佐登実
水口象雄 横内三直 平林義行 武井文雄 丸山治 西沢本衛の
八人」

研成義塾教友会編『井口喜源治』に収載されている井口喜源治先生年譜は、前掲の記事を昭和九年の項に誤って挿入し、その他おいくつかの誤りがあるが、旧校舍に最後の集りを行なった日付を昭和十一年九月二十日と確定しえたことは、晩年の井口喜源治の行動を見る上できわめて大切である。それはようやく病床の生活が続きついに昭和十三年三月二十三日「病氣に付き廢校屈を出す」という研成義塾の大団円を迎えるまでの井口喜源治ならびにかれをとりまく人々のうごきを刻明にすることができる上からも重大である。

さて、「アサヒ日記」の日付は五月二十一日を迎え、かれの日録は昭和十三年六月六日を迎える。すなわち、このページには六月六日と十二日の日録がしるされ、とくに十二日「礼子帰る満喜子も」で筆はとまっている。かれの死は七月二十一日であったから、病床に苦闘し、しかも、国家の前途を憂いてやまなかつた喜源治の壮大な凱旋は、昭和八年版「アサヒ日記」の過半をようやく迎えようとしてやってきたわけである。

なお、この日記には日並を逸し、また備忘のため随時に書き足し書き込んだところがあるが、年表に収載したのは正確な日並の確定し、あるいは校訂できるもののみにとどめた。

井口喜源治履歴書

現在井口喜源治記念館に収蔵されている井口喜源治の履歴書は、明治三十四年一月に「私立学校教員認可願」を長野県知事宛に提出したさい、それに添付されたものである。実は、かれの履歴書は、これよりもさらに詳細・綿密なものが他に求められるであろうが、これを典拠としたのは、研成義塾創設にからむ問題を史実の上で明らかにしようとしたためである。すなわち、この履歴書は後掲のように、小学校（矢原研成学校）、明治法律学校の在学年次に關する記載が省略されている。また、小学校訓導としての経歴も尽されていない。しかし、「私立学校教員認可願」には簡明・素朴なかれの志願が示されていて、それに添付された履歴の体裁も、まさに研成義塾と共にあろうとする決意がそこに表明されていると思うからである。なお、かれはみずからの簡単な履歴を「備忘録」にはしばしばしるしてあり、とくに、明治法律学校での修業のことは、大正八年九月二十三日もしくは、同十三年十二月二十六日の条などにふれているが、年表の該当年月のところには記載しなかった。

「私立学校教員認可願」ならびに「履歴書」は、縦の野紙一枚にそれぞれ、毛筆でしたためられ、記念館に収蔵されているものももちろんその写しである。

「私立学校教員認可願」

喜源治儀今般南安曇郡東穂高村字三枚橋浦ニ研成義塾ト称スル小学校類似ノ私立学校設立仕リ度候ニ付テハ喜源治ヲ以テ其校長兼教員ト御認可被成下度別紙履歴書相添ヘ此段及御願候也

明治三十四年一月二十三日

南安曇郡東穂高村

井口喜源治

長野県知事 殿

そこに添付されている「履歴書」の全文は、つぎの通りである。

「履歴書」

本籍 信濃国南安曇郡東穂高村三百四十七番地

族籍 平民 井口喜源治

明治三年五月生

学業

一明治二十二年六月 長野県尋常中学校卒業

一明治二十八年五月 小学校教育免許状下賜セラレ

一明治二十八年六月ヨリ三十一年十月マデ南安曇郡東穂高組合高等小学校正教員勤務

一明治三十一年十月 豊科組合高等小学校訓導拜命

一明治三十一年十一月十二日 依願退職

賞罰

無之

右ノ通りニ御座候

木杯辞退に関する一件書類

「陳情書」、「豊科村役場返牒」、「長野県知事宛願書」、「東穂高村役場通牒」、「木杯辞退書」

「陳情書」、「豊科村役場返牒」、「長野県知事宛願書」、「東穂高村役場通牒」、「木杯辞退書」

禁酒会の木杯辞退決定については、その経緯がくわしく「禁酒会記録」にしろされている。すなわち、禁酒会の例会において、井口喜源治の発議によって会員の合同討議にかけられ、したがって、「木杯辞退」が、禁酒会の決議としてきめられた。それは、「禁酒会記録」の明治三十二年一月一日の例会記録で知ることができる。

ここに解説する「木杯辞退」に関する一件書類は、現実の問題としておきた木杯辞退に関する井口喜源治の行動軌跡をたどれるものである。表題にかかげた五点の資料はすべて井口喜源治記念館に収蔵されているものである。

「陳情書」は縦野紙一枚に、毛筆で四角ばってしたためられている。明治三十三年五月十六日付で長野県知事押川則吉に宛てたものである。

「豊科村役場返牒」と称するのは、つぎのごときものである。それは右肩に「甲第一八〇号」としるされていて、井口喜源治の五月十六日付陳情書に対する村役場からの正式の通牒である。

「寄附金ニ対スル木杯本泉知事ヨリ下附相成居り候処今般返納ノ義御申出ニ依リ其筋へ伺候処^ニ底受納不相成向ニ有之候条右ニ御了知相成度依テ陳情書及木杯及返戻候也

明治三十三年五月二十三日

南安曇郡豊科村役場

東穂高村 井口喜源治殿

つぎの「長野県知事宛願書」というのは、このような事態にともなう、直接辞退を願ったものであって、縦野紙片面につぎのようにしるされている。

「私儀別紙陳情書相添へ南安曇郡豊科村役場ヲ経テ木杯返納願候処同役場ヨリ返戻有之候ニ付更ニ謹テ閣下ニ返納仕り候間徹表御了察下サレ御聴納被成下度奉懇禱候也

明治三十三年五月二十九日

南安曇郡東穂高村 井口喜源治

長野県知事押川則吉殿

つぎの資料は「東穂高村役場通牒」である。それは右肩に「甲第一一六号」とあって、いうまでもなく村役場からの正式の通知で、かれに出頭を求めるものである。

「兼テ豊科組合高等小学校へ金員寄附ノ故ヲ以テ木盃下附相成候処陳情書ヲ以テ該木盃返納ノ義申出デラレタル趣然ルニ今回重テ交付方本郡役所ヨリ照会^ニ越相成尚申越ノ次第モ候へバ来ル二十四日迄当役場へ出頭相成度此段及通知候也

明治三十三年六月二十一日

東穂高村役場

井口喜源治殿

つぎの資料は「木杯辞退書」である、事態の推移するなかで、井口喜源治は七月十七日付でかれがかさねてその堅い意志を県知事宛に表明しているものである。そこには「草莽ノ小民」の自由を訴えてやまないかれの姿勢をみることが出来る。なお、この『資料年表』には「陳情書」と「木杯辞退書」を収載した。

5・3 長野県南安曇郡東穂高村において井口喜十長男として誕生。(戸)

○明治三年

6 長野県尋常中学校卒業。(履)

○明治三二年

12・20

○明治三四年

等々力	望月 直弥	明治24年12月20日	大正7年死亡
〃	望月 五三	〃	明治27年9月退会
〃	望月喜恵作	〃	明治31年12月退会
穂高村	望月 幸一	〃	死亡
有明村	岡村 国忠	〃	退会
白金	林 盛次	〃	除名
〃	相馬 愛蔵	〃	
〃	水口 為一	〃	明治29年11月23日除名

明治三・二二・二四年(一八七〇・八九・九一)

明治二四・二五・二六年（一八九一・九二・九三）

等々力 望月八十八 明治24年12月20日 退会

下伊那河野 氣賀沢玉童 //

白金 丸山 文一 //

(名)

○明治二五年

等々力 望月 正次 25年1月2日 死亡

// 望月 守司 // 1月31日 退会

白金 相馬 俊一 // 2月28日 退会

等々力 小林 久一 // 除名

穗高町 高根佐久一郎 // 明治45年2月10日死亡

西穂高 岡野 若水 // 明治28年退会

白金 安田 栄 // 明治28年退会

// 相馬 智 // 渡米

// 望月 儀市 // 除名

等々力 望月 宗治 // 除名

穗高町 白沢留次郎 // 退会

(名)

○明治二六年

3・2 長野県北安曇郡会楽村内山定次二女きくの（明治7年3月10日生）と結婚する。（戸）
12・20 穂高町 井口喜源治 26年12月20日 （名）

○明治二十七年

2・20 父井口喜十退隠し跡相続をする。（戸）

3・16 長女貞生る。（戸）

3・24 ○非芸妓設置請願

保高駅ハ未ダ芸妓ヲ置クノ必要無之、稀ニ必要ナル場合アルモ僅カニ一里ヲ隔シ成相新田ニ既ニ設置シアレバ毫モ不便ヲ感ゼズ殊ニ芸妓ハ青年ヲ誘惑シ其ノ操行ヲ乱サシムルノ患アレバ、土地ノ情況万止ムヲ得ザル迄ハ設置セザルヲ可ナリト信ズ、幸ヒニ閣下ノ賢察ヲ以テ芸妓設置請願ヲ不許可ノ程奉願候也

明治二十七年三月廿四日

青年同志会代表者

小平 総司 印

等々力 弥次平 印

東穂高禁酒会代表者

望月 幸一 印

相馬 愛蔵 印

豊科警察署長

野々山 義忠 殿

（請）

3・27

○請願書

吾々小学校生徒父兄タル者四十七名、事情止ムヲ得ザルヲ見テ、コ、ニ謹テ請願奉リ候抑当部内ニ於テ閣下御赴任以来、盜火

明治二六・二七年（一八九三・九四）

明治二十七年（一八九四）

ノ患ナク人民其ノ業ニ安シ候ハ吾々ノ深く感謝仕ル所ニ御座候、然ルニ此頃当村内ニ芸妓ナル者ヲ置カント奔走致ス者有之由伝承仕リ驚愕ニ堪ヘズ候、然ナクトモ近来飲酒ニ耽リ猥リガハシキ事ヲナス者往々有之痛心仕リ居リ候得、万一右御許可相成ルニ於テハ益々以テ風教ヲ害スルコト可有之ト奉存候殊ニ子弟ヲ持テ居リ候吾々ニトリテハ学校ノ四隣ニ鼓絃ノ声ヲ聞クハ最モ寒心ス可キ事ト奉存候、右ノ事情ニ有之候得、バ何卒閣下ノ御賢察ヲ以テ芸妓設置御許可無之様此段奉懇願候

明治廿七年三月廿七日

東穂高村生徒父兄

井口喜十外四十六名

連印

（請）

豊科警察署長野々山義忠 殿

○請願書

謹テ書ヲ浅田知事公閣下ニ呈ス、今回我東穂高村ニ芸妓設置致シ度シトテ既ニ閣下ノ許ニ願書差出シ候由伝承仕リ驚愕ニ堪ヘズ、若シ万一右御許可相成ルニ於テハ為メニ地方質朴ノ風ヲ害シ併セテ青年ノ操行ヲ乱サシムルニ到ラント我々痛心ノ到リニ堪ヘズ殊ニ其ノ場所タル高等小学校ニ比隣セルヲ以テ村内ノ父兄等モ大ニ驚キ別紙写シノ如ク多数ノ連署ヲ以テ所轄警察署ニ請願ニ及ベリ然レバ何卒閣下ノ御賢察ヲ以テ芸妓設置御許可無之様此段東穂高禁酒会員四十名ヲ代表シ奉懇願候也

南安曇郡東穂高村

東穂高禁酒会 印

禁酒会々頭

右代表者 相馬 愛蔵 印

長野県知事

浅田 徳 則 殿

（請）

12・20 第四回記念会を開く。本年度幹事を撰挙す。望月直弥君・井口喜源治君当撰、望月正次君『武雷土氏の伝を讀みて』の壮快なる談あり。（禁）

穂高町 東条 東一 27年3月27日 退会 再入会

矢原 荻原 守衛 27年11月28日

死亡

白金 寺島 官一 〃 3月9日

明治31年3月退会

定重

大正3年10月死亡

〃 丸山 貞十 〃 12月20日

除名

(名)

○明治二八年

1・1 第一例会を東穂高尋常小学校階上に開く(会場概ね此処なり)。歴史すごろくを遊び懇談教刻。(禁)

1・28 第二例会開会、相馬愛蔵君『東遊感』、青年は一層の奮励を要す。従軍兵士に同情を寄す。林盛次君『日本軍の勝利は全く上古よりの蓄積力なり』、沢柳真植君『亡母嘆』、『望江戸城感』、『二宮先生家を見る』等の談あり。(禁)

2・3 会員新に晴れて従軍兵士の家族を訪ふ事十一戸、如何に喜びと満足を以て迎へられしか此愉快忘れ難たし。即夜兵士の許へ□を發す。(禁)

2・10 第三例会を開く。望月直弥君『日本人は公共心を欠くことなきか』、相馬愛蔵君『青年は進歩すること嫩芽の如くなれ老人は根幹の如くなれ』、『田口卯吉氏は今日世に尤も必要なことは独立の人なり、人世の幸福は孰れも殆んど同一なり』、丸山文一君『家との問答』、等々力智恵太君『一億五千万円の公債も戦争の長引くも恐るゝに足らず』、望月正次君『時間は正確に守らしめよ』、井口喜源治君『壮士談』等の談話ありき。(禁)

2・28 第四例会を開く。望月直弥君『前田正名氏之家庭』、望月正次君『金力はかくの如く強勢なる乎』、望月幸一君『余は貨殖をつとめん』、井口喜源治君『内地雑居恐るゝに足らず』等之談話あり、五分演説をなして散会せり。(禁)

3・10 第五例会を開く。入会者一名、それより五分演説をなす。

3・23 第六例会を開く。入会者一名、相馬愛蔵君『死』につきて演説せり。曰く、余は死につきて十余日間に四人の死を聞けり、人生常に期する所に違ふこと多し、而して『死』は必ず一回は誰の上をも見舞ふものなり、就中青年の死は最も惜しむべきなり、然れど

明治二七・二八年(一八九四・九五)

明治二八年（一八九五）

も長寿必ずしも祝すべきにあらず、短命必ずしも悲しむべきにあらず、職務を全ふして死し、正義の為に尽瘁して死す、死すといへども憾なし、若し徒食して為すなきの徒は短命といへども寧ろ賀すべきなり、概ね人は八十以上にいたれば沙婆葬行を以て目され其死するや御祭りといふ、然るに生野の臨厩翁の如き人之を悼み惜みてやまざるは何ぞや、これ其徳の然らしむる処なり、其素養の然らしむる所なり、諸君も亦一層の奮発を以て大に期する所なかる辺からず云々

それより黒岩信一、二木当太郎二氏の為に弔詞を述べべき事と、其遺族へ向って悔み金小許を送るべき事を議決し、其寄附を募りしに、壹円十五錢を得たり。依て折半して五十七錢五厘宛を送ることに決せり。次に雷さまを演し散会。（禁）

3・24

故陸軍工兵二等軍曹二木当太郎君の葬儀にあたりて、本会を代表し望月正次君祭文を朗誦す。（禁）

3・25

故陸軍歩兵一等卒黒岩信一君の葬儀にあたりて、本会を代表し相馬愛蔵君弔詞を述べ。（禁）

4・13

第七例会を開く。入会者三名、相馬愛蔵君・沢柳真楯君・望月直弥君・丸山文一君・井口喜源治君・望月正治君等の熱心なる演説ありて、次に山田益蔵君之家族へ悔金を送る事に決し、其寄付を求めしに金壹円を得たりしかば、内六十錢を送る事とし、他の四拾錢を以て慰問費用とさだめたり。それより茶菓を喫し散会。（禁）

4・23

故陸軍歩兵一等卒山田益蔵君の葬儀につき悔金を送り、水口為一君弔詞をのぶ。（禁）

4・26

第八例会を開く。入会者四名、相馬愛蔵君『吾人青年は撰拳競争等に関係すべからず』、牛越順一君『酒の禁すべき証を楡村の毆打事件に見たり』、望月直弥君『欧米諸州の禁酒に於ける法令』、望月守司君『盲啞病院入学の盲生は半数以上蠱毒の遺伝に在り』、萩原穂一君『出席を多くして時間を守れ』、沢柳真楯君『親鸞上人は愚禿と号して衆生を濟度したり諸子も亦此客観門よりなしては如何』等なり。散会せる時正に午後十二時。（禁）

5

小学校教員免許状下賜せらる。（履）

6

南安疊郡東穂高組合高等小学校正教員勤務（三十一年十月まで）。（履）

7・7

第九例会を開く。会する者僅に八名、談笑茶菓を喫して散会。養蚕の忙しさにてかく欠席多きなり。（禁）

9・22

第十例会を開く。井口喜源治君『鴉片戦争の原因結果』、望月直弥君『禁酒会は下戸会にあらず』、丸山文一君『雑感』。それより婦郷兵士を招待する事を議決し、茶菓を喫して散会。（禁）

9・29

軍人慰勞会を開く。出席者十六人、来客八名、望月亮二君の遠東談あり、太田増蔵君の澎湖島談あり、会員にては望月直弥君の歛

迎新体詩、相馬愛蔵君の日本体育論（日本人民の弱小なるは水分多き食物に帰因す）等あり、頗る盛会なりき。余興として福引ありて散会せり。（禁）

〔上欄外記事〕招待軍人

有賀儀三郎、矢口佐金次、太田鶴蔵、望月福三郎、臼井喜文治、北原留弥、望月亮二、望月五三、重野徳一郎、×高田太次郎、山田友吉、×荒川棧司

×印は出席なし、よりに菓子を贈呈せり。（禁）

10・5 第十一例会を開く。相馬愛蔵君の『禁酒会拡張運動』、井口喜源治君の『支倉六右衛門談』、望月直弥君の『雑感』、林盛次君の『會員の覚悟』等あり。余興として雷様の遊戯ありて散会。（禁）

11・9 第十二例会を開く。入会者一名、沢柳真楯君の『北白川宮の御生涯』、相馬愛蔵君の『會員望月正次君の遊学に付きて感あり』、井口喜源治君の『繁文縟礼を厭ふ』、望月直弥君の『本村戦死者の肖像を保存すべし』等ありて散会、茶菓あり、柿あり。（禁）

11・23 第十三例会を開く。入会者一名、演説あり、談論あり、次会の順序等を談して散会せり。（禁）

11・26 長男倫太郎生る。（戸）

12・7 第十四例会を開く。入会者一名、相馬愛蔵君『吾人の感化』、賛成員高橋斉次郎君の『希望』、同等々力知恵太君の『自負心』、望月直弥君の『吾人の覚悟』、林盛次君の『何如なる人を尊しといふか』等、其他會員の五分演説あり、茶菓ありて、散会。（禁）

12・14 本会拡張の幻灯会を明盛尋常小学校に開く。来観者無慮二百名、頗る盛会なりき。午後九時幾分散会、星光をふんで帰る。（禁）

12・20 満四週年紀念会を開く。上原角次郎君・久保田清次郎君・須藤滝太郎君等来会せられ、相馬愛蔵君の紀念会につきて本会の沿革、上原君の不達時同盟並金守、須郷君の本会に望む等ありて、余興には活人画、南洋台湾エムエヌ君の滑稽演説、福引ありて頗る盛なりき。幹事は相馬君・井口君に当撰す。（禁）

〔上欄外記事〕

廿八年本会の事業

会数 十四

従軍兵士家族訪問 一

明治二八年（一八九五）

明治二八年（一八九五）

軍人慰勞の手紙を發せしこと 二

凱旋軍人慰勞會 一

戦死者遺族に悔金を送る 三

拡張幻灯會 一

（禁）

白金	丸山 保	28年1月28日	渡米
〃	寺島 頼一	〃 3月10日	除名
〃	相馬 善一	〃 2月10日	除名
〃	相馬儀三郎	〃	除名
等々力	大倉 嘉策	〃 3月10日	明治31年7月退会
矢原	荻原 穂一	〃	明治30年11月22日退会
穂高村	青柳 順治	〃 3月23日	明治44年12月20日除名
〃	佐野 淳一	〃 4月13日	明治28年10月退会
〃	尾川 博一	〃	退会
〃	青柳 豊秋	〃	退会
〃	茅野 風平	〃 4月26日	明治28年10月退会
〃	島田 亀治	〃	明治31年1月19日退会す
矢原	矢口 豊一	〃	退会32年3月
下堀	牛越 順一	〃	除名
穂高町	島田 謙蔵	〃 11月9日	明治31年11月退会
〃	丸山 郷一	〃 12月7日	退会
穂高村	金森 安十	〃 11月23日	退会
貝梅	勝野 重衛	〃 12月20日	渡米

（名）

○明治二九年

1・25 第一例会を開く。会員の演説及中村今朝十君之青年の爲めに夜学を勧むへしてふ演説あり。禁酒会は之を入れて尽力することに決す。茶菓あり。(禁)

2・3 今夜会員相会して学科等を定む。沢柳真楯君日本外史・珠算、中村今朝十君論語、井口喜源治君英語を分担し、明夜より始むるの相談をなす。(禁)

会員 荻原国雄、同利茂、白井真寿、重野一、矢口豊一、荻原穂一、同守衛、水口栄一、相馬智、丸山禎重、丸山保、望月守司、同宗治、同義雄、古川眞、佐野淳一、重野一政、原田千栄、原田小藤太、相馬沖蔵、深沢要、塚田浦十、茅野士郎、上条元治、小川豊治、望月守弥、水口栄作、伊藤元作、等々力武保、小岩盛茂、丸山郷一、小川藤十郎、古幡武門、伊藤爲一、等々力十三二、小岩三明、西沢静雄、岡村今朝輝、中島亀一、牛流朝一、青柳長一、望月浪弥、平林一恵、平林恵喜弥、上条喜作、水口良一、尾川博一、二木島三郎、高山高次郎、二木森重、望月仙一、小林喜市、等々力亮一、大倉嘉策、中島今朝信の諸氏(禁)

2・22 木下尚江君夜学会に來りて演説せらる。

略に曰く、平重盛は京都優柔の世にありしかば涙もろき人なりしならむ、公の最も苦みしは其思想の一般よりも秀でし為也、一族は悉く一門の榮をのみ意となせる間にありて、独り国家を知れり、これその進退谷まる所以なり、清盛は決して暴悪の人にあらず、ドングリ目にダンゴツ鼻の人にあらずしなるべし、必ずや随分美男子なりしならむ、祇王仏の前との關係にても、その孫に教盛の如き優男ありにても知るべし、然し情けは知らざりし人なりしならむ、凡そ一代にして立身するが如き人は多くは慈悲の心なきか、あるも之を極めて抑損せざるべからず、中略 今日は一門と国家との軽重を愈るが如き者はなかるべし、然れども国家と世界とに至りては如何、是れ諸君にして往々苦む所也云々。(禁)

2・23 第二例会を開く。木下尚江君曰く、「天理は一なり、不品行は女子に悪きのみならずして男子にも悪し、博奕は人の品格を下すもの也、人は守る処ありて白刃頭上にひらめくも泰然なるの素養なかるべからず云々」。茶菓ありて散会。(禁)

3・7 第三例会を開く。相馬愛蔵君「酒の害」、望月直弥君「煙草の害」、丸山文一君「雜感」、井口喜源治君「青年は奮励すべし半白の人頼むに足らず」、雷さま茶菓ありて散会。(禁)

3・14 都合により夜学会を閉づ。講師慰勞会を開く。來賓上原角次郎君、久保田清次郎君の演説あり。相馬愛蔵君發起人物代として謝辞

明治二九年(一八九六)

明治二九年（一八九六）

3・28
を述べられ、望月守司君の會員物代として送辭を朗読せらるるあり、なほ記念の爲に茶器一組宛を講師に送れり。（禁）
第四例会を開き、本村内青年にして狂言を爲すとどめしめん事を議す。

望月直弥君の「遠東遺付を忘るべからず」、相馬愛蔵君の「青年にして狂言をなすか如きは是れ短見者流の後楯をなすと青年になすべき仕事なき事に原因するもの也、若し狂言を習ひつゝある青年にして之を停止せば吾人は彼等が今日迄それが爲めに費しぬる金額は払ひやるも可なり云々」。茶菓あり、談笑散会。試にその狂言青年の名をあぐれば、小川楠太郎・村山重作・岡村留吉・小平円治・三浦八十八、望月饒一・宇留賀嘉藤治・等々力喜多一等々の面々なりと伝へける。（禁）

4・25
第五例会開会。相馬愛蔵君「人々皆人各字書に載せらるゝ程の人物となるべし」、望月幸一君「濠州土人の話」、沢柳真楯君「時間を守るべし」、望月守司君「禁酒会は高山彦九郎となれ」等の五分演説ありて茶菓を喫し散会。（禁）

5・28
第六例会を開く。本日はあやにかしこき（改行しあり）我皇后陛下の御降誕しました善き日なればとて、開ける次第なり。討論題あり、曰く「再婚は人道に反するや如何」と、甲論乙駁の末、大多数を以て人道に反すとの説に決せり。（禁）

7・1
第七例会を開く。相馬愛蔵君「忙中却て書を読むを忘るべからず」、望月直弥君「喫烟を禁すべし」、横浜神学校宣教師英人ハーリントン氏・同校生徒金子豊吉氏来会あり。井口喜源治氏曰く、「国に凡三つの別あり、一は尊敬せらるゝもの、二は恐れらるゝもの、三は軽侮せらるゝもの」。それより三陸海嘯につきて義捐金を募り、金一円四十六銭を得て、之を信濃日報社に托せり。（禁）
当駅に芸妓設置方出願せるものあるを聞き、其認可せられざる様にとの請願書を豊科警察署へ差出す。（禁）

7・12
7・13
○非芸妓設置請願

回顧スレハ去明治廿七年ノコトナリキ吾穂高駅料理屋營業者ノ一兩輩ヨリ当駅ニ芸妓ヲ置カントラ出願セルコトアリシガ賢明ナル本県知事閣下並豊科警察署長閣下ハ英断ヲ以テ之ヲ却下シ給ヒキ然ルニ今般復亦芸妓設置方出願セルモノアリト真ニ驚愕ノ至リニ堪ヘズサナキダニ平和克復後稍モスレバ人心奢侈ニウツリ懦弱狼狽ニ傾クノ時ニアタリ万一芸妓ヲ置クカ如キコトアランカ地方純朴ノ氣風ハ必ス地ヲ弘ヒ少年少女ノ操行ヲ攪乱シ恐ルベキ結果ヲ来タスニ至ルベキハ他地方ノ实例ニ照シテ明白ナルコトナリト信ズ若シ又万止ムヲ得ザルノ場合アリトスルモ僅々一里ニシテ成相町ニアルアリ毫モ不便ヲ感スルコトナシ伏シテ乞フ幸ニ閣下ノ御賢察ヲ以テ右設置出願御許可アラザラントラ吾等地方ノ為メ青年ノタメ偏奉懇願候也

東穂高禁酒会四十名代表者

明治廿九年七月一三日

相馬愛蔵
望月幸一

豊科警察署野々山義忠殿

(請)

9・22

第八例会を開く。入会者二名、相馬愛蔵君曰く、「病氣にかゝりて親族家内の難有きを知る、青年の品格、月見に月を見るものなし」。望月直弥君「禁酒会は下戸会にあらず」、丸山文一君「雜感」、高橋斉治郎君「蔵書をしらべて社会思想の変遷を知る」、井口喜源治君「個人の道徳につきて日本の前途を思ふ」等なりき。(禁)

10・19

第九例会を開く。五分演説をなすに決し、相馬愛蔵君「西郷隆盛伝をよみて其謙遜なると友情に篤きとに感ず」、沢柳真植君「矢部駿河守放火犯の獄を断ず」、荻原守衛君「ウィラード女史の決心」、井口喜源治君「武士道の発達と其将来」、林盛次君「石工の空想」、望月守司君「地球の衝突」、水口永作君「大蛇の話」、寺島頼一君「ワットの話」、島田謙蔵君「馬鹿な遠慮」、小川豊治君「石鹼であらへば節儉」、荻原穂一君「養兎談」、丸山文一君「神道の祭りに見て感あり」、望月幸一君「歌ほど感化力のつよきはなし」等ありき。(禁)

11・14

第十例会を開く。相馬愛蔵君「開化之輸入」、沢柳真植君「国料と洋風」、井口喜源治君「歳出増加と殖産興業」等あり、それより雷さまを演じて珍説を語る。中島幸一君「あすは明日九日の日」、島田謙蔵君「この板面め」、大倉嘉策君「水戸天下とった」等あり。(禁)

12・1

第十一例会を開く。相馬愛蔵君「人は自ら乱れずんば飲酒可なりといふ、然れとも下等社会之者は他に楽なし、されば才芸あり、酒之他に快樂を得べきものは却て禁酒すべし、交際を円滑にする等は勿論吾等のとらざる処なり云々」、小穴憲吾君「社会教育と書籍館」、高橋斉次郎君「今の世は暮しくし」、井口喜源治君「北白川宮成久王殿下の聡明」等にして、尚幻灯画を買入れて本会の拡張をはかることに決し、寄附金をつのれり。(禁)

12・20

満五週年紀念会を開く。

風雨はげしきに拘らず出席者凡そ三十名、井口喜源治君本年度之報告をなし、相馬愛蔵本会之歴史をのべ、沢柳真植君の祝辞、同安田栄君等あり。それより福引之余興は矢原と両町より出で、みかんは白金より飛び、雷さまはなりてめん類にはこりく(島田謙蔵君)、近江之人と諏訪之人(寺島頼一君)、たのきの頭へ烏が巢をかく(望月喜恵作君)峯ぱり沢ぱりいぢぱり(安田栄君)、

明治二九年(一八九六)

明治二九年（一八九六）

死人病人気がひ（望月五三君）、足袋はみちづれ（望月宗治君）等ありき。幹事は望月直弥君、丸山文一君当撰せらる。

〔上欄外記事〕

廿九年度事業

会数 十二

夜学 二月三日 三月十四日 凡四十日

俳優反対 一

芸妓反対 一

海嘯義捐 一

穂高町 古川 貢 明治29年3月28日 退会

等々力 望月 盛弥 〃 〃 退会

穂高町 二木島三郎 〃 〃 退会

〃 等々力武保 〃 〃 退会

白金 望月 仙市 〃 〃 退会

矢原 萩原 利茂 〃 〃 除名

〃 重野 一政 〃 〃 退会

等々力 上条 喜作 〃 〃 除名

穂高町 小川 豊治 〃 〃 除名

白金 水口 永作 〃 〃 退会

柏原 中島 幸一 〃 〃 退会

〃 中島 初吉 〃 〃 退会

北安陸郷村 有川 有司 〃 〃 退会

田中 伊藤 元作 〃 〃 退会

12月1日

矢原 重野 鶴一 明治29年12月1日 明治31年11月退会(名)

○明治三〇年

1・3 第一例会を開く。望月直弥君・丸山文一君之演説あり。それより五分演説、雷さま等あり、尚本年も夜学を開くことに決す。入会者二名あり。(禁)

1・23 第二例会を開く。井口喜源治君(巖本善治君・津田仙君を訪問せる談話)、相馬愛蔵君之(科学的食養生論をよむ)、丸山文一君之(吾人の覚悟)等あり、尚夜学を二月一日より始むることを決せり。(禁)

2・2 第三例会を開く。今夕夜学発会式をかねてなり。

望月幸一君「一休法師之はなし」、望月穂一君「昨年夜学会之報告」、望月宗司君「腹内旅行」、丸山保君「雲居和尚」、水口永作君「実を尊ぶべし」、望月守司君「三欲界」、丸山文一君「昔と今」、井口喜源治君「東洋諸国と公共心の頹敗」等ありき。(禁)

3・12 夜学今夜を以て結了とす。会員凡三十名、外史沢柳真楠君、実業談相馬愛蔵君、作文小穴憲吾君、英語井口喜源治君。右の講師へ謝意を表する為め茶筒を贈れり。それより本年は十二月一日より開くことに決せり。(禁)

3・28 第四例会を開く。望月直弥君恰も今日帰郷せられたり。林盛次君今回池田田学校へ転任せらるゝよしに付、送別会へのぞむため高等学校へ来たられし次手を以て臨席せられたり。望月直弥君(高島平三郎先生との対話)、林盛次君(軍備拡張は國家の衰頹を来たすなからんか倫理學の研究は道德の頹敗を来たすなからんか、千古の卓見は國家の方針をあやまるなからんか)、井口喜源治君(芸妓設置説を評す)、丸山文一君(雜感)、西沢築君(事業には快楽なかるべからず)、望月穂一君(競梨會の状況)、宮島連三君(予

は三ヶ年禁酒せり、本會は東穂高の人のみなりと思ひて入會せざりき云々)。右おはりて茶菓ありき。(禁)

4・4 芸妓非設置請願書を豊科警察書に差出す。東穂高村年少者父兄九十五名より宛名は本県知事なり。然して料理屋輩の請願は去月二十四日不認可となりしも、再挙の謀計おさくゝ怠りなしと云ふ。(禁)

幻灯會費用は義捐金四円五十四錢あり。映画運賃其他にて四円二十錢。二月二十七日に東穂高尋常に開き、三月四日望月宗治君の宅に開き、四月四日西沢築君の宅に開きたり。石油樟腦あはせて三十錢なり。その他白金及矢原にて開けり。(禁)

○請願書

東穂高村年少者父兄九十五名謹テ請願奉リ候去明治二十七年以来当地料理屋輩ヨリ芸妓設置方出願セルコト再三ナリシガ當時

明治二九・三〇年(一八九六・九七)

明治三〇年（一八九七）

ノ本県知事閣下並豊科警察署長閣下ハ英断ヲ以テ之ヲ却下セラレ候然ルニ彼等ハ今日ニ至リテモ尚其望ミヲ遂ゲント欲シ只管芸妓設置ヲ以テ当地繁栄ノ策ナリトトナヘ豊科池田等ニ在リテ穂高ニ無キハ当地ノ恥辱ナリト語り或ハ威嚇シ或ハ阿諛シ地方人民ノ調印ヲ強請シテ以テ輿論ニカナヘリト曲言シアクマデ其目的ヲ達セント奔走スル由伝承仕り候申スマデモナク吾々ハ決シテ芸妓設置ヲ以テ地方繁栄ノ策ナド、信ズルモノニアラズ却テ当地衰微ノ源泉ナリ一大恥辱ナリト信シ殊ニ其結果ニ至リテハ地方純朴ノ美風ヲ頽敗シ人情懦弱猥褻ニ傾キ少年少女ノ操行ヲ乱ス等其弊害夥シキコトハ他地方ノ実例ニ照シテ必ズ誤ラザル所ト確信仕り候右ノ事情ニヨリ年少子弟ヲ有スル吾々ハ止ムコトヲ得ズコ、ニ請願奉リ候次第ニ候ヘバ何卒閣下ノ御賢察ヲ以テ右設置御許可無之様備ニ奉懇願候也

明治三十年四月四日

東穂高村年少者父兄

九十五名 連印

（請）

長野県知事高崎親章 殿

4・10

相馬愛蔵君結婚之大礼を挙行せられたるに就き、会員一同より謹で祝辞を呈せり。
第五例会を開く。今夕刻より珍らしくも雪降り出で道悪しきにもかゝはらず、多数之来会者ありき。午後八時開会す。

望月直弥君（東穂高組合高等小学校同窓会（四月三日開会）之景況を述べ並に所感を陳ぶ）、井口喜源治君（相馬君に祝辞を贈呈せし事、芸妓非設置運動にて先づ勝利を得し事の報告）、丸山文一君（予は寧ろ彼等に（芸妓設置運動に熱心なる青年旧友等）同情を寄す、故に又之に忠告せんと欲す）、相馬愛蔵君（予の結婚につき諸君よりの祝辞を謝す、東北地方旅行中美術彫刻家藤田文蔵氏他二氏を訪ふ）、望月幸一君（社会至之改造を任とせんものは逆境に立つを辞すべからず）、井口喜源治君（今宵之降雪につき往昔の桜田門外之姿を想起し爾来之変遷を述べ今後之社会を思ふ）等ありき。相馬愛蔵君より茶菓の饗ありたり。尚近日開会すべき南安連合青年会へは我会員一同奮て参会すべき事を議し、午後十一時頃散会せり。（禁）

4・18

4・24

第六例会を開く。丸山文一君（政事家は教育技量あるべく、教育家は政事技量なかるべからず）、井口喜源治君（彼等をして我が忙隙に乗ぜしむるなかれ、遊女桜木の書置と其氣概）、相馬愛蔵君（浅間の蚕業家藤岡喜代造氏との対話「氏は蚕業上の経験により自ら信すること厚き敢然たる一箇の定説を持せり、予の考にては当時日本一の蚕種業家と云ふも過言にあらずと思ふ、氏は目に

一丁字なきの人、然るに今は斯の如し、諸君それ之を思へ云々」大倉嘉策君（大石良雄の話）、寺島官一君（芸娼妓の存在は売買奴隷制の存在なり、宜しく此の野蛮的の制度を廢する事に尽力すべし）、望月盛弥（妖怪の話）、望月幸一君（大事業を成すには心意の大鍛錬を要す）、望月直弥君（氷川伯の談話を紹介す）等ありき。（禁）

第七例会を開く。午後九時半開會。

相馬愛蔵君（人は居によりて心をうつす、心は須く活大に有つべし）、井口喜源治君（クリミヤ戦争に於けるフロレンス、ナイチンゲール嬢）、寺島官一君（女子教育を盛にすべし）等の演説あり。それより随意談話に移り、相馬君の發議により「各自第一の樂とする」を云はんとの事となり、各々種々思々に之を述ぶ。後茶菓の饗あり。喫食中「會員一同にて一度旅行を試みん」との議出で、何れ好期を見て実行せんことに決し、尚種々談笑絶へざりき。追々農事も繁忙となりしに付き、当分休會する事に決す。但し緊急の事ある時は、幾時にも臨時會を開くべき事として、十二時散會せり。（禁）

7・1 第八例会開會。午後九時半頃。一昨年東北学院に入學、修業の爲め仙台に遊べし本會員望月正次君參會せらる。尚會員外にて東穂高郵便電信局員金森昇氏來會。

相馬愛蔵君（中萱嘉助之墓に詣でて所感を述ぶ）、望月正次君（東北学院に遊ぶの感。青年の奮起を熱望す）、井口喜源治君（大國民）等の演説あり、次に喫茶菓之中、随意談笑十分之歡を尽して十二時過散會したりき。（禁）

7・9 東穂高組合高等小学校同窓會幹事より復々彼芸妓設置連より請願書差出せし模様之由報來。（禁）

7・17 前記之理由に因り本會員一同（但し代表者二名捺印にて）より本県知事へ宛親展にて意見書一封を差出せり。（禁）

○請願書

謹テ書ヲ本県知事閣下ニ奉ズ吾等同志ノ者竊ニ謂ラク帝國今日ノ形勢ハ決シテ高枕沈睡スベキノ時ニアラズト何ヲ以テ然ルカ即チ東方ノ風雲ハ漠々トシテ益々急ニ西人ノ雜居亦近キニ在リ如何ニシテカ我邦ノ光榮面目品格ヲ維持スベキ上ニ輔翼ノ良相アリト雖モ國民タルモノ亦當ニ奮勵一番以テ之ガ準備ヲナササルベカラズ豈既往ノ勝利ニ眩惑シテ此大事ヲ雲煙過眼視スベクンヤ然ルニ平和克復以來世人多クハ其喜ブベキヲ見テ其愛フベキヲ見ズ生活ノ度非常ニ暴進シテ産業ノ之ニ伴フナク人情輕薄ニ走り淫猥奢侈ニ陥リ尚武勤儉ノ風漸ク地ヲ掃ハントス実ニ懼ルベクシテ而シテ又悲ムベシ上ニ熱誠ノ当局者アリト雖モ人民タル者亦當ニ相警醒シテ以テ之カ矯正ヲハカラザルベカラズ豈其職ニアラズトシテ之ヲ等閑ニ附スベケンヤ

明治三〇年（一八九七）

明治三〇年（一八九七）

而シテ当地目下ノ急之ヲ芸妓問題トス抑モ吾東穂高村附近ノ村落ハ南安曇郡中稍富メル部分ナルカ故ニ一二ノ短見者流ハ芸妓ヲ設置シ附近ノ青年ヲシテ其財ヲ蕩尽セシメバ当穂高駅ノ一大繁昌ヲ来タスコト易々タルノミト是ニ於テ屢々地方庁ニ迫リ村民中之ニ反対スル者アルニ拘ラズ或ハ商業組合ヲ除クベシト脅迫シ或ハ邪教ノ徒ナリト強ヒ以テ其目的ヲ達セントハカルコト再三ナリ吾等同志ノ之ニ反対スル決シテ此一小僻地ノ為ノミナラズ竊ニ思フニ芸妓ノ如キモノハ務メテ其數ヲ減ジナルベク其公許地ヲ狭クシ以テ漸次ニ此恥ヅベキ業ヲナスモノヲシテ正業ニ復セシメ一日モ早く帝國ノ面上ヨリ此厭フベキ汚点ヲ去ラザルベカラズ今ハ既ニ決シテ決シテ濫リニ公許地ヲ増スベキ時ニアラズ若シ然ラズンバ仮令一方ニ於テ如何ニ教育ヲ盛ニシ如何ニ風教ヲ維持セントスルモ他方ニ於テ之カ侵乱ヲナスモノ益増加スルニ於テハ蓋シ徒勞ノ業ノミト

幸ニシテ当局諸公ノ賢明ナル夙ニ想ヒラ此ニ勞ン屢々其請願ヲ却下セラレ常識アル人民ヲシテ纔ニ意ヲ安スルコトヲ得シメキ然ルニ彼短見者流ハ未ダ其志ヲ翻サズ苟モ隙ノ乘ズベキアレバ百万奔走以テ其目的ヲ遂ゲント欲ス之ヲ以テ吾等ヲ初メ多クノ人民ハ当局諸公ノ交迭アル毎ニ戦々兢々トシテ或ハ万一認可ノ命アルヲ恐懼ス蓋シ渠等ハ好機最モ乘ズベシトナシ吾等亦其隙アラズヤト疑フ是レ國家ノ為決シテ慶事ニアラザル也翼クハ地方庁固ク其議ヲ定メ其方針ヲ確立シ以テ隙ノ乘ズベキナク疑ノ入ルベキナク人民ヲシテ堵ニ安ンズルコトヲ得セシメラレコトヲ吾等ノ此言ヲナス一小地方ノ為ノミニアラサルナリ幸ニ其不文ヲ咎ムルコトナク微志ノ存スル所ヲ憐マレンコトヲ懇禱ノ至リニ堪ヘズ恐惶再拜

南安曇郡東穂高禁酒會員五十四名代表者

明治三十年七月十七日

相馬 愛 蔵 印

丸山 文市 郎 印

(請)

長野県知事権藤貫一殿

9・18

第九例会を開く。會員外米窪喜雄氏來会せらる。相馬君の建議により五分演説をなす。

相馬愛蔵君（十ヶ堰掘立につき発起経営者の苦辛を思ひ嘗て此土地に此の事業家ありしを喜ぶと共に吾人が決心を要するを思ふ）、望月直弥君（登山の氣風を養成すべし）、望月幸一君（健康策）、米窪喜雄君（日本の開化は貴族的なり）、井口喜源治君（運命は常に吾人の頭上に來りつゝあらん、然るを人は之を知らずして過ること多し、大事業も一瞬の時に於て発芽することあり）、丸山文市郎君（夢に托して「内地雜居後は何よりも吾同胞の徳義を盛にせんとの覺悟を要す）、小川豊治君（本會員中には会の主義

10・8

を破りしものはあらざるか、若しあらば決断の処置を望む、且つ毎会「學術上、文字上等の疑をたゞすの儀」を設けられたし、水口永作君、重野一政君、等々力武保君（以上挨拶）、丸山保君（機を失すべからず）萩原利茂君（物を侮るべからず、権助之話）、矢口豊一君（飲酒漢を見たる感）、島田謙藏君（旧弊親父と生意氣雇男の話）、大倉嘉策君（神崎与五郎之忍耐）、寺島頼一君（角倉了以之話）、相馬智君（氣象を堅にして大るべし）、相馬沖藏君（狐の恩に感じて小児を救ひし話）等なりき、右終りて、茶菓之饗あり。其間各自談笑、午後十二時散会す。会する者十八名、当夜会員島田謙藏君より菓子一袋を寄附せらる。（禁）

第十例会を開く。午後七時開会。

○相馬愛蔵君（藤尾山に遊ぶの感）、丸山文市君（飯田に遊び過般細民騒動の実況をさぐる）、岡村千馬太君（越後妙高山登山談）、井口喜源治君（福島大佐の旅行中健康を保らしは、天性酒きらひなるに起因すとの大佐自身之談あり。群馬県知事阿部弘氏を訪ひ其女郎屋連中との対談。將に來らんとする全国教育大会に出題せられんとする議題「全国小学生徒に禁煙令を發布するの議」につきて）、森山助左衛門君（入会之辭）等々演説ありき。夫より茶菓を喫し、間に各自談笑後「雷さま」之遊戲あり。尤も快なりき。

○会員外来会者岡村千馬太君、米窪喜雄君、滝沢実蔵君等。

○会員青柳順次君より菓子三袋寄附せられたり。○九州日向之人森山助左衛門氏入会す。午後十二時散会せり。（禁）

11・6

第十一例会を開く。午前七時開会を開く。○望月直弥君（禁酒会員としての社会員）、森山助左衛門君（予は將に東北学院に遊ぶんとす、予は禁酒会員となりしを喜ぶ、予之郷国酒を暴飲するの悪風あり、一日も早く禁酒之美風を吾郷に殖えんと欲す、予は以後東北之地に到るも此主義を確守せん）、井口喜源治君（頼春水奮発之原因……此につきても人世艱難の珠玉を生む真理たるを思ふ、諸君奮起せむ）、相馬愛蔵君（雜感、希くは禁酒会員を一千人とせん、而して学校之二階をかりて開会する如き小規模にあらず、此に倶楽部を設け、時に或は談じ、或は論議、或は笑ひ、時に名士を招じて高説を聞かんとす……彼の飲酒家之建築の（酒家、貸席、料理屋等）美なるもの多かるを見む、○狐ワナの恐るべきを知りて遂にワナにかゝりたる話……人間亦之と相去る遠からず……戒むべし慎むべし、○嘗て大西郷弟従道を訪ふ……従道味噌汁の塩からきを以て下婢を叱す、大西郷之を聞き、「此の事を以て人を化するは何ぞや」と、此事小なりと雖も大西郷之度を見るべし、此れ我々の学ぶべき所）、丸山文一君（所感）等あり。茶菓之饗あり。

望月直弥君（高等科一学年生徒三十六人中酒の好否に關し調査せし所を報告す、

明治三〇年（一八九七）

明治三〇年（二八九七）

総計 三十六人 内 男 二十一人、女 十五人

好むもの 十一人 内 常に用ゐつゝあるもの 五人

好まざれども飲みしことあるもの 十九人

絶て此迄飲まざりし者 六人（皆女子）

好むもの多き皆驚くべからずや、世の風教に志あるもの寒心せざるべからず、

此後雷様之遊戯あり。十分の飲を尽して十一時半散会。

今夜会するもの二十余名、会員外者両三名出席近来になき盛会なりき。（禁）

11・22 望月穂一氏（荻原氏改姓）晚會届を出せり。（禁）

11・24 第十二例会を兼ね、会員望月守司君徴兵当籤入營に付き、送別の会を開たり。会するもの約二十名、望月直弥君開会之趣意を述べ、

つづきて相馬愛蔵・井口喜源治・望月直弥之諸氏熱心誠意なる送辭あり。次に望月守司君之答辭あり。夫より茶菓之饗あり。此中

各自談笑又夜学会開会に付、来廿八日之夜相談会を開くべきこと、十二月之紀念会迄に各尽力して会員増加を謀ること、明新年に

会員之遠足運動会を開くべきこと、来る十二月第一日曜日に開くべき南安連合青年会には可成出席いたす事、等を議決す。十一時

半頃散会す。（禁）

11・28 夜学相談会を開く。（禁）

12・1 本晩より夜学を開くにつき今晚発会式を行ふ。学科及び講師左の如し。

外史珠算 沢柳真楯先生、論語 一柳志豆米先生、教育談 小穴憲吾先生、英語 井口喜源治先生、歴史地理談 岡村千馬太先生、

実業談 相馬愛蔵先生、

会員 荻原守衛、戦平重、蓮井菊一、水口永作、等々力春一、青柳順治、深沢要、荻原利茂、西沢築、平林一恵、平林善治、寺島

頼一、望月仙一、小岩盛茂、望月守司、丸山保、林茂、上条元治、岡村今朝輝、太田茂一、茅野士朗、二木久吉、中島幸一、等々

力武保、西沢敬一、矢口豊一、中島要一、青柳長一、杏半牛 等々之諸氏。（禁）

12・5 南安連合青年会開会に付き、本会員数名出席「豊科へ娼楼を設置するの可否に付、勿論否説を唱へて大氣絨を吐く。放蕩青年と料

理屋連等来り騒然たりき。（禁）

南安各青年会連合して、彼の「豊科に妓楼設置之件に付き」其甚だ不可なる趣きを以て、陳情書を本県知事に宛てゝ出す。(禁)

○陳情書

謹テ本県知事閣下ニ白ス道路相伝フ近來本郡豊科村ニ貸座敷ヲ設置センコトヲ出願セルモノアリト不肖等之ヲ聞テ実ニ深憂大息ニ堪ヘザル也不肖等竊ニ信ズ其出願セル理由多々之レアルベシト雖モ畢竟スルニ唯々利ノ一字ニ在リト然リ而シテ此貸座敷ヨリ生ズル弊害ニツキテ各地ノ実例ヲ觀察スルニ其紅灯ヲ望ム所絃歌鄭声ノ達スル辺人心ハ日ニ淫靡猥褻ニ赴キ惇朴ノ氣風全ク地ヲ払ヒ教育ノ実功ハ之カ為ニ破壊セラレ少年少女ハ操行ヲ紊リ家庭ニハ風波ヲ起シ人道日ニスタレ精氣月ニ枯槁スベシ若シ之ヲ民力培養ノ上ヨリ考フルモ着実ニ生業ヲ勉メスルノ良俗ヲ減シテ投機ノ惡風ヲ助長シ祖先伝來ノ財ヲ蕩尽スルモノ漸ク多ク商工萎靡シテ振ハス田園亦荒蕪スルニ至ランココニ於テカ曩キニ利ヲ希ヒシモノモ源泉涸レテ下流絶ヘ千悔万恨スルモ甲斐ナキニ至ランコト火ヲ見ルヨリモ明ナリトス噫之ヲシモ忍ブベクンバ何ヲカ忍ブベカラザラン不肖等之ヲ以テ実ニ本郡興廃ノ一大事件ト認メ徒ニ拱手傍觀スルニ忍ビズココニ本郡連合青年会ノ意向ヲ開陳ス冀クハ人道ノ為ニモ速ニカカル請願ヲ排斥セラレテ此汚辱ヲシテ本郡四万余人ノ頭上ニ冠セシメザランコトヲ熱禱シテ已マザル所ナリ恐懼再拜 (請)

滿六年之紀念会を開く。順序左之如し。

一、開会之辭。(望月直弥君)

一、奏楽。(君が代)一同、合唱二回(楽器使用米窪喜雄君)

一、会務之報告。(丸山文市郎君)

一、本会之沿革談。(相馬愛蔵君)

一、奏楽。(菊の歌)(米窪君独唱独弾)

一、会規朗読。(望月直弥君)

一、來賓演説「当今土風之廢頹、社会(殊に青年)の墮落其極を極む、予等抑其矯正を期す、今本会と其主義を全然一つにする能はざれど目的を一つにするを以て協力之期あらむことを断言す」(岡村千馬太君)「祝辭」(太田茂一君)、「我々教育者は社会の教育もなさざるべからず然るに此れ迄は力是に及ばざる如く甚だ遺憾なりき、是れ協同提携者なき為めなるか、本禁酒会は実に吾人の協力同伴者なりと信ず、然り而して如何なるものも欠点なき能はず、本会員諸君宜しく一層自省ありて彼等をして其隙

明治三〇年(一八九七)

明治三〇年（一八九七）

に乗せしむる勿れ」（白沢銀司君）、「大酒癖家遂に自ら身を亡ぼせし話」（有川有司君）、「我邦に始めて西洋音楽を輸入し是を小学校に納るゝ迄は其困難容易ならざりし、本会が社会の爲め種々の困難を排し今日に至りしは彼と其途を一つにせしならん、予は音楽之慷慨家なり、当今音楽につき世人の誤解して之を重んじざるもの多し、遺憾之至り、何卒正しき音楽を起して矯風に資せんことを希望す、予は音楽を以て諸君と同じく風教之事に尽力せんと欲す」（米窪喜雄君）等。

一、會員演説「予は廿九年に本会、たり以来一滴の酒も口にせず、世の中利害半ばするは多くの事、然り然るに酒は利甚だしく害甚だ多し、殊更少年たるもの之を禁せずして可ならんや、酒を嫌ひになる法「麵包を酒に浸し一週間程食せば必ず功あり」を飲酒家諸君に示す（小川豊治君）、「白沢先生之辭に答ふ本会を教育家の好伴侶たりとは謝言に絶へず、然し元來時に然るべきを此地方多数の教育家は世々短見者之批評をほどかり、本会を排するのたむきありき、然るに今此言を得たり、喜んで本会も協力せん、次に本会に猛省を促されしを深く領承す、以後層一層本會員一同互に相警め以て先生之好意にむくひん」（相馬愛蔵君）、「南洲翁は厚情の人なり、薩海に月照師と身を投ぜしを世或は翁之一代之きざと言ふものあれど、予は実に此の厚情ありしこそ翁の翁たる所以なれと思ふ、又翁が国事に尽瘁せしは敢て功名富貴をねがひしにあらず、実にやむにやまれぬ心より出でし獻身の事業、此迄なせし予輩之事業は少なりも雖も、抱負は聊か是に違はざらんを期す」（井口喜源治君）、「本会に對して世の誤解者を戒む」（西沢築君）、「會員望月守司君之書面」「在兵營」、會員丸山貞重君之祝文「在尼利」之披露（望月直弥君）等。

一、茶菓（一同談笑）矢原区會員より寄附（福引）、「白金区會員より寄附の「密柑」分配あり」。

一、余興 望月五三君（会外員）之劍舞等ありき。

來賓會員併せて参会者八十余名なりき。会場は常盤木、竹葉にて裝飾し大に景氣を添へたり。

是れより先き開会以前幹事の改撰をなす。丸山文市郎、西沢築之兩名当籤す。次に幹事より各部長を指令す「矢原区」萩原守衛君、「白金区」寺島頼一君、「等々力区」望月宗司君、「八軒町区」大倉嘉策君、「両町区」島田謹蔵君、「穂高村区」青柳順治君、「西穂高区」中島幸一君等。

尚明年一月二日を期し、會員一同にて諏訪へ二日旅行を為さんことを議す。多数意に賛成せしが、尚廿六日迄に幹事へ確答すべき事を約して散会す。時に午後十二時なりき。尚当夜入会者七名ありき。（禁）

矢原 西沢 築 30年3月28日

等々力 浅野 元一 //

除名

// 望月 義雄 //

明治44年11月20日退会

(名)

○明治三十一年

1・2 第一例会を午後第七時開會す。

先づ丸山文一郎君の挨拶ありて相馬愛蔵君(芸妓運動失敗に付本会は今後十倍の覚悟を要す云々)、井口喜源治君(公娼可滅てふ書冊を後員中へ配与せられ且其大意を演説す)、望月直弥君(本会申合規則を読み且説明し、宗教の件に付き本会を攻撃する妄者を戒む、本会は下戸会にあらず、只禁酒するのみにては会員たるの資格なきものなりと痛論せられ、津田仙氏著酒の害なるものを朗読せらる)。夫れより茶菓の饗応ありて、雷様の遊戯をなし、來賓等々力治郎君の演説あり。了に及で荻原守衛君より会員たるものは花合はなさざる定めなるに、会員中往々是を見る、戒むべきことなりとて注意を与へたるに、某氏は是に反対せるを、各自是が引証を挙げて其非なるを論ぜり。次回は旧正月二日を以て開くに定め、且つ柏原会員の要求を納れて、旧正月中日を定めて禁酒幻灯会を開くことに決して、拾一時頃散會す。出席者は來賓数名を合せて五十余名、且つ新入會者一名ありて中々の盛會なりし。(禁)

1・23 第二例会を開く。午後七時開會。

丸山幹事の開会の辞あり。望月直弥君(福沢先生浮世談、日本の一夫多妻矯めざるべからず、芸妓妓廢すべし、日本人は飲酒の片手間に仕事等凡て本会の主義と大同小異以て学ぶべきものの、朗読。殆んど時余にして満場掩憶の色なし)、丸山文一郎君(福沢先生浮世談を聞て感あり)、望月幸一君(罪を惡むべし)等にて茶菓の饗あり。此間各自快談、夫れより雷様の余興あり、了りて次会を紀元節に開き、又前回の決議なる柏原に開くべき幻灯は、来る旧正月十五日を以て柏原大堂に開くことに決して散會す。因に記す、当夜降雪甚だしきにも係わらず出席者三十余名にして、新入會も七名あり。中々の盛會なりしも、惜むらくは井口喜源治君・相馬愛蔵君の兩君病氣の爲め欠席せられ、其高説を聞くを得ざりしを。(禁)

2・5 前回の決議により、禁酒幻灯会を柏原大堂に開く。出席弁士は井口喜源治君・望月直弥君・宮嶋連三君等にして、來觀者二百名、中々の盛會なりし。殊に当夜は本会を賛して入会申込者三名あり。(禁)

明治三〇・三一年(一八九七・九八)

兩幹事欠席せる為、前幹事望月直弥君開意を述べ、演説には同君の「某前村長は利口なり」とも云うべき題にて演説すらく。某前村長は言えり、教育者なるものは色々社会の事に豚を入るゝは不可なり、だま、つて校内に小供さえ教育して居ればよい云々と、中々村長様とも云はるゝ人はえらいものなり、利口なものなり、斯る暴論を吐いて得然たるものの如く、而かも亦教育者なるも此言を聞いて有り難い、謹聴せるにや、将また反駁するの勇氣なきか、右は余の列席せる某校事務所室に於ての事実なり、而して是を反論せる只余一人のみとは如何に今日教育者の勢力を失せるよ、嗚呼教育者にして既に斯の如し、是れが教養を受くるの児童其結果の不良何ぞ怪むに足らんや。井口喜源治君「光陰は流水の如し」とて「小女落葉の感」とも云ふべき詩を吟ぜらる。相馬愛蔵君「伊達正宗の伝を読んで感あり」、正宗廿五の歳、奥州百万石を修め且つ羅馬を略せんとするの大志あり、然るに世の青年は然らず、曰く余は廿五歳になりたらば何々をせん、卅歳になりたらんには何々と是れ大なる間違なり、青年は重ねて来らずで、青年時代（廿歳より廿五歳頃をさす）に於てせざれば悔ゆべし、現に余等の時代にならば既に諸君時代が再びありつらんにはと思ふ、實に事は諸君の時代であり、諸君奮起せよ。重野一政君「自己の希望」、中島幸一君「禁酒会は楠正成の如し」と簡にして尽せり。丸山文一郎君「名譽よりは義を重んぜよ」、正成の戦死も名譽の爲にあらざ、名譽を得んが爲めに死せるにあらざ、死して名譽なるものゝ生せるのみ、名譽は自分より作り出せるものにあらずして義より生ずと。夫れより尻とり及けんまのほいなる遊戯ありて散會、出席者四十名。（禁）

午後第八時開會。夜学会閉會式を兼ね例會を開く。

先づ夜学閉會式を挙ぐ。西沢築氏立て開意を演べ、且つ併せて謝辭を述べ、望月宗司君夜学会惣代として謝辭を述べ、次で中島幸一君・太田茂一君・丸山保君及父兄惣代として丸山文一郎君の謝詞ありて、茶一本宛を謝禮として講師に贈り、井口喜源治君講師惣代として答辭を述べられ、又講師相馬愛蔵君の答詞ありて茶菓の饗応あり。臨席せられたる講師は井口喜源治君、相馬愛蔵君。夫れより禁酒會に移りしも、既に時間も後れたれば雷様及けんまのほいなる遊戯をなし、又来賓会田貫君の劍舞及本會反對の説を唱ふと雖も三文の価値なければ録せず。出席者は夜学会員を併せて五十余名。（禁）

午後八時開會。望月守司君之送別會を主として例會開く。津令成りしも望月君來會せず。よつて第五例会り丸山文市君開會。望月直弥君七年以前に成立せし時より之実れきを以て禁酒之利益を演説す。丸山文市君文明は平和はし平和之をもなるは禁酒に有り。

望月直弥君ニド酒之書説（ト）べ、相馬愛三君フルベツキ神学博士之来歴及び万国禁會（ト）會長ウイラード氏之伝に付演説有り。本月二氏供に死去せしをしみ、四月三日小倉山に行に定む。出席者四十三名有り。（禁）

4・1 第六例会を開く。丸山文一郎君の開会の辞あり。夫れより招待せる小平宗司君の支那遊歴談あり、井口喜源治君の小平氏支那遊歴談に就て青年の将来を戒むるの演説、望月直弥君、相馬愛蔵君の談話あり、愉々快々の裡に茶菓を喫して散会す。出席者卅五名。

（禁）

5・1 第七回例会を開く。（禁）

5・14 第八例会開会、出席者貳拾名。兩幹事共欠席せるを以て望月直弥君代つて開会の辞を述べ、井口喜源治君の『社会の弊風』、『改革』なる演説、相馬愛蔵君の『雜感』（健忘性の國民、台湾事情）、望月幸一君の『日曜日に就て』等の演説ありて後茶菓の饗応あり。會員且つ飲み、且つ語り、菓を尽くして散会せしは夜十一時過ぐる頃なりし。（禁）

6・25 養祖母井口とよ（文政十年十月十三日生）死亡す。（戸）

7・3 第九例会を開く。出席者十六名（相馬愛蔵、丸山文一郎、井口喜源治の三名事故ありて欠席）。

西沢樂の開意、望月直弥君の『所感』、今年も最早既に其半を過ぎたり、而かも何のなすなきを恥ず、某氏の歌に曰く、何事もこころにはたと思ひつる三十路の年のはてぞ悲しきと真に然り……日本の人は年寄り易し（心の上）世界の偉人くらつとすとんの如きは若時は保守主義……中年漸進主義……老年に至りて急進主義となる、日本の人とは正反對なり……吾人は当にぐらつとすとんの真似をすべし……曆の上の年はとるとも心の年をとる勿れ云々。丸山貞十君『経歴談』、荻原守衛君子は大に會員諸君に向て謝ざるべからずとて曰く、予は病氣の爲め医師の勧告により吾が主義を破つて飲酒せり、然れども飲酒の爲め別に快方に向かへるとも思はれず、故に今は全く是を止めたり、諸君請ふ是を諒せよと。望月直弥君は直に立て曰く、荻原君の飲酒たるや医師の勧めにより病氣の爲め薬として用ゐしと、是れ本会の規則に於ても亦許せる処なり、されば是れ敢て謝罪する迄もなきと、然るに君は飲用せるも其効なげば断然是を廢せりと云ふ、実に君の如きは、過を改むるに勇なるもの、大に吾等會員の模範とするに足ると。夫れより茶菓の間、各自快談時の移るを知らず、散会せるは十一時過也し。（禁）

8・15 第十例会を開く。丸山文一郎君の開会の辞ありて、望月直弥君の「東京遊歴談」、井口喜源治君の「青年の墮落に就て」の慷慨演説等あり。出席者廿余名にして中々の盛会なりし。（禁）

明治三十一年（一八九八）

明治三十一年（一八九八）

- 9・12 第十一例会を開く。丸山文一郎君の開会の辞、望月直弥君、望月良一君の長野よりの手紙を朗読せられ、尚禁酒会の拡張策として、
 (一)無邪気の青年を教導する、(二)全家族を禁酒せしむる、即ち禁酒の家風を作る事。井口君の竹取物語を述べて青年を戒しむ。
 夫れより茶菓雷様等ありて十一時散会。出席者卅名、当夜相馬愛蔵君より金一円寄附せらる。(禁)
- 9・30 午後八時第十二例会を開く、井口君の開会の辞、丸山君の国の光の禁酒論朗読、望月幸一君の(社会の腐敗を如何せん)題既に慷慨、氏は上流社会より下流即ち平民に至る迄徳地に落ち、行日に非なりと慨し、茲に至りて只我禁酒禁なるのみ。本会の責任亦実に大ならずやと謂ひ、婦人集会場を立て、之れに道徳を教ゆるを望むと結び、望月直弥君の不平談あり。尚当夜は旧八月十五日夜に付き、思ひ起す昨年今夜、井口君と洲沙土に上りて観月せられし談話あり。夫れより観月の建議となり、満場一致出でて万水仙三角薦に明月を賞し、樂しを尽して十一時過各々帰途に附く。出席三十余名。(禁)
- 10・7 第十三例会を開く。丸山君の開会の辞、相馬君十月、日東京に開かれたる全国禁酒大会へ本会代表出席せられ、同会はパリッシュエ女史の送別会を兼ねたる者にして、其模様及び全国禁酒同盟会なる者組織成りたりとて、是れに加入を求むとの演説あり、本会は同盟を可決す。後茶菓ありて散会。(禁)
- 10・27 丸山君開会の辞、井口君の『外部の感化』以前の悪感化を破りて大に聖人となれ、望月直弥君の『不怒の国民、義憤なき国民なり』との慷慨演説等あり。後雷様等ありて、充分の樂を尽して散会。(禁)
- 10 豊科組合高等小学校訓導拜命(履)
- 11・7 研成義塾開校式をなす。相馬愛蔵君・荻原守衛君・寺島官一君來たる。(備)
- 11・12 依願退職(履)
- 11・19 第十五例会を開く。丸山幹事の開意、今回は望月直弥君北安北城尋常高等小学校へ転任に付ての送別会。相馬君・井口君・望月幸一君・寺島官一君(会員外)の送辞と希望、直弥君之答辞あり。夫れより茶菓の饗応あり。『ケンマノホイ』ありて散会せしは十一時半なりし。(禁)
- 11・20 望月直弥君の送別会を尋常小学校内に開く(禁酒会として)。北城学校へ赴任せらる。(備)
- 11・21 運動会を栗尾に。(備)
- 12・5 豊科へゆきて俸給の計算をなす。全部十八円九拾錢五厘を寄付す。(備)

荻原君、上田へ急行す。八日夜帰る。(備)

満七週年之紀念会を開く。

順序 一、開会之辞、一、会務報告、一、本会の歴史、一、会規朗読、一、來賓演説、一、研成義塾生徒祝辞演説、一、會員演説、一、茶菓、一、余興

会場には竹、松を飾り、国旗を掲げ、來会者無慮六十余名、

丸山文一郎君「開会の辞」を述べ、荻原守衛君幹事に代りて「会務の報告」をなし、井口喜源治君『本会の歴史』を述べ、本会の此世に生れたる目的、其後の事業多くは失敗に終りしと雖も、本会の目的決して世の賞賛を求むるが為にあらず、外患なき国は亡ぶてふ如く、本会は有力なる攻撃をも甘受すべし云々。

望月幸一君『会規を朗読し、來賓須郷滝太郎君は『貴会は禁酒を第一着歩としてあらゆる世の弊風を矯正せんとす、其勇や嘆賞措く能はず、単に禁酒といはんか、小児の玩具を弄するに當り、其具を強奪せんとせば、必ず啼泣すべし、之れに代ふるに他の有益無実なる玩具を与ふれば、小児は喜びて之を離すべし、酒は世上凡人の玩具なり、之を奪はんとせば之に代ふるに精神的決樂を以てせざるべからず云々。

研成義塾生徒総代重野一政氏祝辞を朗読し、同相馬欽治氏亦祝辞を朗読す。西沢永一氏佐藤信淵の話、相馬欽治氏赤穂義士の話をなす。これより白金区より福引を寄附し、矢原区よりは茶碗六十箇、等々力区よりも福引を寄附せられたり。

これよりさき相馬愛蔵君『エソップ物語中の樵夫が斧を水中に落したるに、水神金の斧銀の斧をとり来りて、汝の物かと尋ねたるに、然らずと答え、鉄の錆びたるを持ち来るに及んで始めて然りと答へければ、水神その正直なるに愛でて金銀の斧を与へたるに、其の近隣の一樵夫之を開き、特更に斧を水中に落し、水神に祈りしに、水神亦金の斧を持ち来り汝の物かと問ふ、然るよし答へければ、大に怒りて汝の如き不正直者には落したる斧も取り上げ、呉れずとて水中に入りければ、樵夫は自分の斧を失ひたるまでにて得る所なかりき云々と語られ、茶菓あり、密柑あり、福引の趣向には皆々頤を解きたり。

入会者八名、本年の幹事には荻原守衛君・井口喜源治君当籤し、部長として矢原 西沢弥平君、荻原利茂君、三枚橋 深沢初治郎君、白金 丸山保君、等々力 望月宗司君、柏原 宮沢連三君、田中 伊藤元作君、穂高村 青柳順治君、穂高町 等々力武保君、八軒町 上条喜作君に指命せり。時に既に十二時に垂んとしければ、相馬愛蔵君音頭をとりて天皇陛下万歳、東穂高禁酒会万

明治三十一年(一八九八)

明治三二年（一八九八）

歳を唱へて散会せり。（禁）

日向国	森山助左衛門	31年10月8日	明治44年11月20日退会
白金	相馬 冲蔵	〃	〃
矢原	深沢 要	〃	12月20日退会
〃	矢口 豊	〃	退会
〃	新村 理納	〃	死亡
〃	西沢 弥平	〃	〃
等々力	等々力亮一	〃	退会
〃	青柳 長一	〃	退会死亡
白金	望月 甚一	〃	退会
矢原	矢口 常作	〃	1月2日退会
〃	西沢 本衛	〃	1月22日退会
〃	白居佐登実	〃	〃
〃	白意 豊春	〃	退会
〃	臼井 政衛	〃	除名
〃	北野 節雄	〃	除名
等々力	望月 艶蔵	〃	除名
〃	望月 正司	〃	除名
西穂高村	中島 巖	〃	1月15日除名
〃	等々力伝次	〃	1月20日除名
〃	等々力久平	〃	2月6日除名
〃	中島 重吾	〃	除名

鳥川村下堀 黒岩 作一 31年2月6日 除名
 東穂高矢原 白井 汲 〃 〃 除名
 〃 原田 千栄 〃 〃 除名

矢原 深沢初次郎 〃 12月20日 除名

〃 小岩 三朋 〃 〃 除名

〃 重野 良一 〃 〃 除名

〃 竹岡 丈作 〃 〃 退会

白金 寺島 昇 〃 〃 除名

〃 相馬 敏治 〃 〃 除名

〃 遠藤 澄雄 〃 〃 除名

貝梅 伊藤 尹 〃 〃 除名

鳥川 田口 平作 〃 〃 除名

(名)

12・27 夜相馬君方にクリスマスとして招かる。望月幸一君丸山文一郎君と共に。(備)

○明治三二年

1・1 研成義塾に新年式を挙す。白井喜代君、人は氣象を貴ぶへし、まけぬ氣にて勉強すべし。相馬愛蔵君、最も嫌ひなる業に出精すべし。望月直弥君、松下塾の如くなれ等の演説あり。(備)

第一例会を開く。井口喜源治君開会の辞を述べ、望月直弥君「諸君は利口の人となる勿れ、賢明の人となれ、天下利口の徒多し、実に多し、而して賢明の人少なし実に少なし云々」、丸山文一郎君「勤儉なれ、奢侈に陥る勿れ、清盛は高平太より起りて栄華に亡びたり云々」、萩原守衛君「四足の子犬と狼」、西沢永一君「馬を馱して蕪菁を得たる話」等あり。

それより井口君の發議にて、「禁酒會員が、県庁等より木杯を下附せられたる時は、貰ふべきや否や」につきて討議する事に決し、甲論乙駁遂に大多数を以て受けざる事に決しぬ。

次に茶菓を喫し、次会を八日夜開く事に定めて散会せり。入会者一名、重野良一君是れなり。望月直弥君より菓子を寄附せらる。

明治三一・三二年(一八九八・九九)

明治三二年（一八九九）

望月宗司・矢口豊・矢口常作の三氏より退会を届出でたり。（禁）

1・8 豊科三原屋に交友倶楽部の発会式ありて行く。会するもの三十余名。（備）

第二例会を開く。井口喜源治君開会の辞、望月幸一君「尾崎学堂氏の説を聞く」と題し、開明座に於て同氏が演説ありたるに、第一には聴衆無慮三千、悪気填咽して皆頭痛岑々たるに、猶喫烟のけむり充塞して四辺朦朧たり。かゝることに甚だ注意すべき事也。其次は、台湾は我軍の赤血を賂して得たる処なるに關せず、官吏は多く姦嬖事を用ひ、或は老朽事に堪えず、之が統御に苦しむが如きは何たる不面目ぞ云々。望月直弥君（人を訪問する心得）等の演説あり。それより雷さまの遊戯をなして散会せり。（禁）

1・21 勝伯薨去。（備）

1・30 第三の例会を開く。井口君開会の辞、相馬愛蔵君「今までは一つの山をめぐれり、これより北に向てすすめ」と題し、吾人は毎日毎月毎年同じ事をくり返すのみなり。今日より新たな方面に向ひ、新たな希望を以て奮進せざるべからず。来る七月よりは内地雑居となるにあらずや。而して二三年を経ずして社会は一大改革を起すべし。見よ如何に此三十年間に變化せし事よ。単に家々の生活の程度に於ても甚しき變化を來たせり。教育に於ても亦然り、女子も亦尋常科のみにては満足し難きに至りしにあらずや。之を思ひ是を想へば、一日といはず、一刻といはず、決して優遊無為にしてやむべきにあらず云々。井口喜源治君、「勝海舟翁」につきて語り、それより茶菓あり。十二支遊びといふをなして散会せり。（禁）

2・11 上京、同行者丸山文一郎君・荻原守衛君。十七日岩本先生にあふ。女子学院をとひ、又松村介石君に逢ふ。フェーリス女学校を見、帝國議會を見る。二十四日帰る。（備）

2・28 第四例会を開く。井口君開会の辞、丸山文一郎君、東京に至る道路の農業及東京風俗談。荻原守衛君の見物談あり、井口喜源治君の岩本善治先生の談話を紹介せり。それより雷さまをなし、望月幸一君の詩吟等あり、茶菓を喫して散会。（禁）

3・8 白井喜代君、偽証罪によりて拘引せられたり。（備）

3・12 第五例会を開く。相馬愛蔵君勝海舟先生は其為したる事をかくせるよしを語り、丸山文一郎君は芸妓を一區画をかざりて置くべき議、寺島官一君の金力をすすむべし、丸山貞十君の人生は一反の布の如くまづ物なりとして最後に排斥せられざるやうにすべし云々。それより幹事より、此校長より会をなるべく早くきり上げるやうせられたし」との注意ありたる旨をつげ、国の光九冊を會員にかせり。此夜興未だつきずして散ず、午後十一時。（禁）

3・29

望月正次君の（拳々たるを知らず）、望月直弥君の（信濃に吾会より先輩あり）及禁酒唱哥、林盛次君の教育新説、井口喜源治氏の松平信綱の話等あり、望月正次君の詩吟等ありて散会す。（禁）

4・18

第七例会を開く。相馬愛蔵君排崇金論として、ある富豪が石の下に手形を置し話し、金持の千両の義捐よりも貧夫一銭のまさる事あるをいふ。丸山文一郎氏慈善問題、井口喜源治氏大に婚をなすに門閥金閥を廃すべし等あり。ジャンケンをなして散会す。

（禁）

6・2

今日、同盟会派遣員美山貫一君及び松本より相原英賢君来るあり、とふしやに宿す。午後三時頃懇話会を開く。相馬愛蔵君・井口喜源治君・望月直弥君・萩原守衛君等相会せり。夜に至り矢原集会所に演説会を開く。来客として須郷灌太郎氏外一名・金子豊吉氏・白井又一郎氏等なり、午後九時開会、井口喜源治君開会の辞あり。

相原英賢君すすみて曰く、人は正直ならざるべからず、かけ引きをなすべからず。世には諂諛ことを用ひ、以て巧みて世を渡らんと欲するものあり、賄賂を行ひて代議士たらんと欲するものあり、大なる誤りなり。政治家となるも、又代議士となるも、ウソつきにては駄目なり。人は正直なるうへに、猶一とつはキチウメンならざるべからず。この位はよしといふべからず。これだけどもわるしといはざるべからず云々。

美山貫一君曰く、風俗改良といふ内に必要の改良あり、不必要の改良あり、チヨンマゲを切る、切らざるが如き事は何れにてもよき事なり。又子が布哇にありし時、出稼人中独逸・ポルトガル・日本・支那の国人あり、布哇の土人あり、同一の砂糖畑に耕作す。此五ヶ国の人民が与へられたる小屋に住むを見るに、其壁を毎年ぬりかへて皓白に、まどには白紗をかけ、労働の器具は洗ひて之を整理し、夕刻よりヴァイオリン手風琴等を玩びて吟咏するあり之れ独逸人なり。次には稍これにおとれども、猶清楚な事はポルチュガル人なり。次に壁などはマツクロとなり、入口には巨額長髯、手に青竜長刀を掲げ、隻手に長髯を撫するものをかゝげ、之れに線香を点し、蠟燭をともし、山もりの飯には大根うめぼし種々雑多のものを供し、厨房は厠となり、豚は台所になき、汚穢乱雑の内に桶などに腰打ちかけ、黄色の声をあげて月琴などをひくものは、問はずして支那人なり。小屋破るゝも繕はず、壁おつるもぬる事なく、処々に釘を打ちてかさ養等をかけ、草鞋をちらし、農具もなげやり、枕はこゝにあり、ふとんは丸めてあちらにあり、食事も共同してなせば、不公平なりとして相ののしり、相争ひ、遂に各自小なるコンロを擁し、各自めしを炊ぎてくらふあり、是れ吾等四千万の同胞なり。つぎに同じくかべ破るゝも屋根くづるゝも無頓着に、外部より何ふも聞として声なく、内

明治三二年（一八九九）

部をのぞき見れば、腹部肥大なる大女が呆然としてなす事もなく柱により、餓うれば芭蕉椰子等の実を食し、小供は蠢々然として床板の下にあそぶ、これ布哇の土人なり。此五種を比較すれば、以て其生活の程度習慣の状況を察する事を得べし。何れかまさり何れか劣るや、しかし吾人はそれはそれによしとするなり。必ずしもかくかくの如くなさざるべからずといふにあらず。只注意すべきは、此日本人の体力をして大に強壯となさざるべからざる也。日本人兵役に合格するもの五尺二寸とす。英国人の如きは五尺七寸を通例とし、婦人にて五尺二寸を普通とす。体力競争に於てかくの如くんば、到底勝利を得難きなり。体力を強壯ならしむるに二ヶの要件あり。一は煙草を禁ずるにあり、近來小兒にして煙草を吸ふものあるは甚だしき悪弊なり。此のニコチ子は極めて恐るべきものなり。脳を鈍らしめ、胸廓を狭くし、肺をよわくし、骨をほそくす、最も恐るべき害物なり。此所に集まれる少年は、よく注意して煙草を決して吸はざるやう為さざるべからず。米國に於て士官生募集をなしたるに、不合格となりし九割は、紙巻煙草の害なりき。英國に於て喫煙の生徒にて、曾て大学に優等の成績を得たる者一人もなしといふ驚くべき事ならずや。日本を亡ぼすものは紙巻煙草なり。自ら煙草をすひ、酒をのみ自ら生徒の模範となる事をなさざる教育者は不用なり。少年は決して喫煙すべからざるなり。若し諸子の母上にして喫煙せば家に歸りていふべし、世界のうちに女が喫煙するは、まことに下等の人民か野蠻種属にあらざればならず、乞ふ國の爲めにやめ給へと。世を憂へず國を愛せざる奸商等は、偏に自己の利益の爲めに少年をも購着し、害物を強ひ売せんとす。惡むべきなり。諸子團結して、此村には決して巻煙草本も入れざるやう務めざるべからず。かへすくも、自ら喫煙し、飲酒し、醜業婦に戯れ、以て國に忠孝を説く如き教師は駄目なり。忠孝をいふも何の爲をなさん。遂に必要なは家庭より酒をのぞくにあり。主人酒をのめば狂気の如くなり、妻の頭をなぐるです。小供は蹴飛ばさるゝです。此後三十年皆々禁酒をなせば、此辺は何れの家も皆土蔵を一つつづ建てて居るです。若し酒をやめざれば、家はだんだんに衰へ、今ある土蔵もなくし、必ず何等かの間違ひを生じ、或は一家病氣となりて死にたゆるか如き事あるべし。尤も注意すべき事なりとす云々。

午後十一時閉会、時恰も農業繁忙に際し、昼の疲れによりて会する者少なかりしは、最も遺憾なりき。（禁）

午前四時床にあり、俄然として自得し、自ら三十年來の非をさとり、此に自然の大法に意志あるを感じ、自ら新たなる生涯に入りしことを知る。希くは、此清き心をして永遠に保たしめたまへ。愛する神よ、アーメン。起きて田畔を歩す。天地其景象を改ため、星光赫奕として神意を語るが如し。（備）

第八例会を開き、望月直弥君の大欲望と題し内村先生の説を紹介し、丸山文一郎君は松村介石氏の至誠論を伝へ、井口喜源治君の

近世の二大愚論等をのべ、茶菓を喫し、相馬愛蔵君歲月不待人等ありき。(禁)

9・8 第九例会を開く。大雨にして出席者四名、相語りて散す。(禁)

9・26 第十例会を開く。望月幸一君・丸山文一郎君等の演説あり。荻原守衛君の伊能忠敬を評す。井口喜源治君の仏國漫遊談等あり。雷さまをなして散会。(禁)

10・9 第十一例会を開く。荻原守衛氏の送別会をかねてなり。井口喜源治君の送辞あり、望月直弥君の希望あり、丸山文一郎君の送辞あり。荻原守衛君謝辞を述べて曰く、余は今百万言を以て送らるゝよりも、諸君が吾会の為めにつくし、吾会の盛大を致さるゝを聞き、余は甚だ満足すべし云々。

雷さまの遊戯をなし和氣揚々として散す。(禁)

10・11 運動会。丸山文一郎君・荻原守衛君等同行者二十一名洲沙土に行く。(備)

10・20 荻原守衛君の上京を送り、生徒と共に行く。雨蕭々として別離を悲むものゝ如し。穂高川の渡頭に別る。(備)

10・29 会員新村理納君の葬儀也。香奠五十錢を贈り、西沢築君会を代表して悼詞を呈す。

悼詞に曰く、

謹で吾同志の会員新村理納君の靈に告ぐ。君や年齢未だわか、吾等大に望みを将来に属せり。然るに今や溢焉として逝く、嗚呼悲哉。然りと雖も、君人世に在ること日浅く、心は未だ六塵の巷にはせず、意は未だ四慾の辻に迷はず、行清くして靈汚るゝことなし。彼の白雲に乗じ、帝郷に到らんこと必せり。尚くは瞑せよ。

明治三十二年十月廿九日

東穂高禁酒会員総代 (禁)

11・3 第十二例会を開く。井口喜源治氏会員の動静につきて報告し、丸山文一郎君大に勉強すべし、林盛次君一人に大切なるもの二つあり、身体と心也。「自分の事業に失望する勿れ」「髻を蓄ふべきや否や」等あり。寺島頼一君「一害一利はまぬがれざる所、然るに禁酒会のみ利ありて害なし」井口喜源治君「台湾土人芸妓を召すを恥づ」等の演説あり。雷さまの遊戯をなして散す。丸山文一郎君より柿の寄附あり、西沢永作君入会す。(禁)

天長節、白井喜代氏・丸山文一郎氏・西沢築氏・寺島頼一氏・荻原利茂氏集まる。(備)

明治三三年(一八九九)

明治三二年（一八九九）

11・18

第十三例会を開く。望月直弥君吾が禁酒に対する思想の変遷、井口喜源治君仏蘭西の風俗、丸山文一郎君或学校に於て誠実を以て悪少年を感化せるはなしあり。それより十二支あそび、かみなりさま等ありて散ぜり。（禁）

11・20

穂高公友会等其他南安の青年団体より、中学校を穂高に設置すべき意見書を本県に差出すにつき、賛成を求め来りたるを以て、井口喜源治氏本会を代表して調印せり。（禁）

12・2

第十四例会を開く。井口喜源治氏開会の辞、相馬愛蔵君よりの来書を披露し、中学問題につきて報告をなす。望月直弥君「ワシントン伝をよみて、大事を為さんとせば先づ小事をつとむべし」井口氏「青年吾人は縁の下の力持となるべし」。茶菓あり、雷様其他遊戯あり、詩吟あり、唱歌あり、はなしあり。次会は記念会までまつ事となし、其相談をなして散ぜり。（禁）

12・13

二男源次郎生る。（戸）

12・20

満八週年紀念式次第

一、開会の辞（井口喜源治君）一、君が代 一、会務報告（同人）一、本会の歴史（望月直弥君）一、会規朗読（寺島頼一君）

一、禁酒の歌 一、来賓演説（等々力政市君）一、会員演説（林盛治君、丸山文一郎君等）一、茶菓 一、余興 一、軍歌 以上

明治三十二年十二月二十日の夜の事なり。此日夕刻より、会員は相会して、今宵の記念会を盛に楽しくなさばやとて、準備を整へける。望月直弥君は遠く北安常盤学校より来りて、条約国の旗章をかゝげ、丸山文一郎・寺島頼一の二君は竹、杉、サルオガセ等を山より負ひ来りて、大に趣をこそ添へられけれ。七時頃にもなりければ、会する者既に六七十名の多きに達しければ、井口幹事は先つて役員の撰挙を行はん事を望み、望月直弥君之を集め、開札の結果丸山文一郎・井口喜源治二氏当選せり。それより井口幹事開会の辞。君が代を奏し、会務報告には

会を開くこと 十四回、決議、禁酒会員にして木杯銀杯等を下賜せられたる時は辞退すること、公開演説 一回、美山貫一君来

送別会 一回 荻原守衛君行、会員死亡 一人、新村理納君去、意見書を出す 一回 中学問題につきて、

望月直弥君本会の歴史を説て、吾会は禁酒を以て標儀となすといへども、独り禁酒のみにあらず、よろしくリンコルンの「飲む勿れ、すぶ勿れ、いつはる勿れ、友を愛せよ、真理を愛せよ云々」の語の如くなるべしと望み、寺島頼一君会規を朗読し、研成義塾生徒禁酒の歌を奏し、等々力政市君は吾会の益々盛ならんことを祝し、丸山文一郎君の祝辞あり、在京の相馬愛蔵君の来書、荻原守衛君の来書、西沢築君の披露をなし、茶菓をいただきます。

此時、望月直弥君「津田仙君著酒の書を朗読し、吾人は大に真面目たらざるべからず」と述べ、林盛治君は、「わけのぼる籠の道は多けれど、同じ高根の月を見るかな」とて吾人の目的は他に存し禁酒は其目的を達する方便なれば、吾等はひとり禁酒のみに満足すべからず。又飲酒家なりとも、吾等の真目的にかなへる人ならば互に相提携すべしとのべける。井口喜源治君・西沢元衛君の太郎冠者あり、矢原会員より福引の寄附あり、白金よりみかんの寄附等あり。次に雷さまの遊戯をなし、愉弥快弥。新入会者水口象雄・臼井保喜代・臼井栄の三氏あり。散会は○時をすぎる半時。部長は、矢原北村 荻原利茂君、東村 西沢築君、西村西沢弥平君、三枚橋 北野節雄君、等々力 望月宗治君、穂高村 青柳順治君、貝梅 勝野重衛君、有明 林盛治君。天皇陛下万歳、皇后陛下万歳、皇太子殿下万歳、東穂高禁酒会万歳を唱ふ。(禁)

矢原 臼井 潔 32年1月 除名

西沢 永一 渡米

荻原 義雄 除名

西沢 静雄 明治45年2月5日死亡

田中 守衛 除名

臼井 栄 12月20日 除名

臼井保喜代 除名

白金 水口 象雄 (名)

○明治三十三年

1・1 相馬愛蔵君・望月直弥君・西沢築君等参列。(備)

第一例会を開く。相馬愛蔵君関西地方漫遊談、望月直弥君真面目となれ、丸山文一郎君此腐敗を如何せん等あり。ジャンケン、雷さまをなして散す。(禁)

1・20 第二例会を開く。丸山文一郎君開会の辞、相馬愛蔵君「千載の一遇とはこれ此時」、望月直弥君「吾を亡ぼす者は吾也」、丸山文一郎君「二宮尊徳翁に就て」、井口喜源治君「木曾義仲を評す」等あり。雷さまの遊戯をなして散す。入会者 木村源吾君一人あり。

(禁)

明治三二・三三年(一八九九・一九〇〇)

明治三十年（一九〇〇）

- 1・26 會員林盛次君の結婚を祝して書を送る。（禁）
- 1・31 第三例会を開く。恰も旧曆元旦に当りけれども、出席者少なかりき。
- 丸山文一郎君（二宮尊徳先生）、井口喜源治君（天狗の話）、相馬愛蔵君（ムーデー君の死去）等あり。雷さまをなして散ず。茶菓あり。（禁）
- 2・11 紀元節、相馬・丸山・荻原十重十・西沢・寺島頼一の諸氏列席。丸山君より国旗の寄付あり。（備）
- 2・17 第四例会を開く。望月直弥君（リンコンンの話）、丸山文一郎君（廢娼問題に付て）、井口喜源治君（新旧思想の話）、相馬智君（水川清話につきて）等の演説あり。雷さまの遊戯をなして散ず。（禁）
- 3・3 第五例会を開く。丸山文一郎君（觀察の一斑）、望月直弥君（そゝかしくすべからず）、井口喜源治君（仏国ジョンダークの話）、相馬智君（水川清話）、寺島頼一君（実行）等の演説あり。雷さまをなして散ず。茅野士郎君來たる。（禁）
- 3・17 第六例会を開く。会田貢君（入会の辭及懺悔談）、望月直弥君（近來の三感—千載の一週、氣の鬱するは善を思ふこと少なければなり、妙齡の婦人ジョンダーク）、丸山文一郎君（吉原の娼妓津田君と毎日新聞社）、井口喜源治君（禁烟法案につきて）、水口永一君（梵物語）、西沢永一君（人の樂み）等あり。それより雷さまをなして散会す。会田貢君入会。（禁）
- 3・28 証書授与式。（備）
- 3・30 第七例会を開く。望月音三郎君來たる。望月幸一君紹介し、米国の風俗談及航海談等あり。望月直弥君、ウイラード嬢と廢娼につき痛快なる演説あり、井口喜源治君、人類の分布につきて語る。茶菓あり。雷さま等の遊戯をなして散ず。正に十二時、入会者二名。（禁）
- 4・14 第八例会を開く。望月直弥君の「トランスバール戦争とヒッピン戦争につきて」、井口喜源治君の「人の臨終の感、大名と馬鹿」、相馬愛蔵君「大につとむべし」、丸山文一郎君「雜感」等あり。雷さまの遊戯をなして散ず。（禁）
- 5・5 第九例会を開く。相馬愛蔵君「兎と猿と蟻の話」、望月直弥君「中学生と語る」、井口喜源治「樹上の雜感—高閣をつくるべし商店としての東側と西側—巡查となるべし」、丸山文一郎君「積極的にすべし」等の演説あり。茶菓を喫して散ず。（禁）
- 5・8 運動會。押野の白崖へ行く。（備）
- 5・16 ○陳情書

私儀明治三十二年五月中南安曇郡豊科村外四ヶ村組合高等小学校教育費トシテ微細ノ金員寄附仕候ニ付今回木杯亭御下賜下サレ辱ク奉拝謝候然ル処私儀ハ酒ナルモノガ不品行ノ誘惑トナリ人格ヲ墮落セシメ世道人心ヲ害スルコトノ多大ナルヲ感シ禁酒仕居候コト多年ニ有之将来トイヘドモ亦此恩賜ノ品ヲ用フルノ時無之ト確信仕リ候随テ子孫ヘ相伝ヘ候モ好マザル処ニ候ヘバ自然粗末ニ取扱ヒ候ヤモ計リ難ク左候ヘバ却テ失礼ノ至リト奉存候マ、謹テ此ニ御返納仕リ候間何卒御聰納被成下度奉懇禱候也

明治三十三年五月十六日

南安曇郡東穂高村 井口喜源治

長野県知事押川則吉殿

(木)

6・2

第十例会を開く。相馬愛蔵君「人生の半を過ぐ」、望月直弥君「北条泰時論」と題して、泰時が民人の幸福をはかりし処、平重盛以上の人物也」と、井口喜源治君「余は泰時よりも平重盛を好む」と弁じ、曾山理一君「修養論」丸山文一郎君「吾地方の学校に修養をつとむる教師あるを喜ぶ」、林盛次「マッチとヤウジ」「大義名分より論じての泰時」、相馬愛蔵君「泰時論を評すとて、人を評す其時代如何を察せざるべからずとし、罪は罪なりといへども、大に酌量すべきを説けり」。井口喜源治君、修養論は己の弱点に向つて利刀を下さざるべからざるをいひ、曾山君之に答へ、望月直弥君、修養と地方の教師と題し、修養せんとせば、先づ芸者かひと暴飲をやむべしと絶叫せり。会田貢君禁酒は真理と論じ、十二時頃散会せり。(禁)

7・17

○木杯辞退書

私儀明治三十二年五月南安曇郡豊科村外四ヶ村組合高等小学校教育費中へ些額ノ寄附仕候ニ付此度木杯亭御下賜セラレ有難ク拝謝素ト速ニ拝受仕ルベク候元來酒ハ人ノ精神ヲ錯乱シテ知ラズ識ラズ不徳ノ邪路ニ迷ハシメ或ハ身体ノ健康ヲ害シテ悲惨ノ境ニ陥ラシメ家庭ニ入りテハ一家団欒ノ快樂ヲ破リ社会ニ入りテハ或ハ犯罪ノ徒ヲ増殖シ或ハ瘋癲ノ系伝ヲ遺シ貧者ハ之アルガ為メニ益貧窶ノ巷ニ苦シミ富者ハ之アルガ為メニ愈放逸ノ域ニ赴ク等小ニシテハ一身ヲ傷ヒ大ニシテハ一國ヲ毒スルノ源泉ナリト確信仕リ候コト多年ニ有之候而シテ杯ハ此酒ヲ盛ルノ器ニシテ木杯ノ下賜ハ暗ニ酒ヲ賜ルノ意ヲ寓スルモノト覺エ候本來太早ノ聖恩ニ浴スルスラ無上ノ光榮ナルニ今些少願ルニ足ラザル微功ヲ賞シテ特ニ木杯ヲ賜ハラントスルニ際シテハ天恩洪大感激無此上候得共但只別ニ那家ニ尽シ社会ニ力メントスルノ微志ヲ以テ久シク禁酒事業ニ賛助シ居リ候ニ付テハ速ニ飲酒ノ弊風ヲ掃除センコトヲ希願仕リ今回ノ恩賜ニ対シテモ之ヲ拝受センカ良心ノ安ゼザルヲ如何セン拝受セザランカ彰功ノ御趣意ニ背クニ似テ殆ト其進退ニ苦シミ申候伏テ惟ルニ 皇上登極大政一新シテ切ニ臣民ノ自由ヲ伸張シ言路ヲ洞開シ給ヒ上ニ庄抑ノ弊ナク下ニ枉屈ノ悲ナキヲ期シ給

明治三十三年(一九〇〇)

明治三十三年（一九〇〇）

フ宸衷ノ隆瀝誰カ感泣セザル者候ベキ普天ノ下王土ニアラザルナク率土ノ浜王臣ニアラザルナシ草莽ノ小民トイヘドモ亦其自由ヲ認メ其微衷ヲ惠顧セラル、コトヲ疑ハズ仄ニ聞ク神奈川縣曩ニ既ニ木杯返上ノ事アリト依テ先例ナキニアラザルヲ知り希願只管ニ切ナリ則チ謹テ恩賜ノ木杯御辭退仕リ候閣下希クハ其迂愚ヲ憐ミ微衷御聖納アランコトヲ尊嚴ヲ冒瀆スルノ罪免ル、所ナシ頓首再拜

明治三十三年七月十七日

井口喜源治

長野県知事押川則吉殿

（木）

7・22

上京す。二十三日深山軒に入る。三疊半の大夏高樓也。二十五日内村先生に始めて面会す。三日講談会を^ててる。十日岩本先生・荻原君と王子に行く。富士へ登山す。（備）

8・25

第十一例会を開く。井口喜源治氏、岩本先生の国民皆兵説、日本将来の二大事業殖林と水産につきて紹介し、荻原守衛君、岩本先生の宗教的方面を説き、其他同君の登山談あり、茶菓を喫して散せり。（禁）

9・8

第十二例会を開く。恰も陰曆十五夜に当れり、井口喜源治氏（雜感）、相馬愛蔵氏（蟬につきて）、望月幸一氏（北京籠城婦人の恥辱）、望月直弥氏（娼妓自由廢業問題に就きて）、丸山文一郎氏（幸福なる吾国）等の演説あり。菓子を喫し、井口氏宗教上の説あり、相馬氏より娼妓自由廢業問題につきて、救世軍の運動をたすくる為め、義捐金を贈りてはとの建議あり。夫れより遊戯にうつりて、散会せり。（禁）

9・10

本会規約と會員姓名を、柏矢町駐在伊藤氏の囑によりて記し、送れり。（禁）

9・22

第十三例会を開く。丸山文一郎氏（馬と猫と犬につきて面白きはなしあり。会田貢氏（日本魂の外形的を去りて精神的となれ）、

井口喜源治氏（人は万物の靈也）等の演説あり。山室軍平氏よりの謝状を紹介す。茶菓あり、雷さまの遊戯ありき。（禁）

10・8

第十四例会を開く。相馬愛蔵氏、日本人体格改良策其の他の演説あり。雷さまをなして散会す。（禁）

11・3

第十五例会を開く。相馬愛蔵君「精神の蓄積と放散」、望月直弥君「救世軍の廢娼始末」、井口喜源治君「神は何故に善人と悪人を作りしや」等の談ありき。（禁）

11・17

第十六例会。此日風雪烈しかりしに、望月直弥君松本村より来たらる。其熱心は全會員を驚かしめき。同君「困難と希望」、丸山文一郎「隣りの植木鉢を破りたる子供の犠牲的行為」、井口喜源治君「義侠なる米搗男と処女の純潔」等のはなしありき。雷さま

例の如し。(禁)

12・1

第十七例会。望月直弥君「常盤学校に於ける吾生徒」、井口喜源治君「木杯返上始末」、相馬愛蔵君「天理教信者と語る」等あり。雷さまをなし、且来る記念会につきて、相談をなす。(禁)

12・15

松代広小路須郷滝太郎氏より、同地に今回禁酒会の設立なりしことを通知ありければ、祝辞を送る。

敬愛なる松代禁酒会員諸兄諸姉

本日貴会の発会式を執行せらるゝよし、何の喜びか是に如かん(二十三年十二月十七日)。従来、御地方とは、余りに関係なかりしも、今は何となくゆかしく、なつかしく相感じ申候。申上ぐるまでも無之ゆへ共、益御奮発にて、同主義の為に御尽瘁の程奉希望す。

此に謹で貴会の盛大なる前途を祝し、会員諸兄諸姉の幸福を祈り申候。吾東穂高禁酒会も、本月二十日を以て満九ケ年に相達し
い間、乍憚御喜び下され度ゆ。

敬具

会員 井口喜源治氏、木杯返納始末を禁酒同盟会本部へ報告す。(禁)

12・20

創立満九週年記念会を開く。

開会の辞 丸山文一郎君、本会の歴史 相馬愛蔵君、会規朗読 望月幸一君、会務報告 井口喜源治君、禁酒の歌、来賓演説、
会員演説、茶菓余興、来賓松本より真牧重遠君来たられ、虚言を恥ぢざる国民の名題の下に痛快なる演説あり。研成義塾生徒原口
要・竹岡喜嗣・寺島昇・西沢永一諸氏のはなしあり。望月直弥君は、酒の書を言文一致に記せしものを朗読せられき。それより茶
菓あり。井口幹事は在京相馬智君よりの来書を、望月直弥君は在長野等々力亮一君の来書を披露せられ、白金の会員諸君より例の
通り密柑一箱、矢原の会員諸君より福引を寄附せられたり。

次に遊戯として雷さまをなし、丸山文一郎君の二人の朋友、山遊びをなして一人の危難を救ふといふ快活なる演説を掉尾となし
て閉会せり。

幹事として西沢築君・望月宗治君当選し、新年には一月十日頃開会の筈なり。(禁)

矢原 木村 源吾 33年1月20日 除名

富田 会田 貢 3月17日 除名

明治三十三年(一九〇〇)

明治三三・三四年（一九〇〇・〇一）

白金 平林 邦治 33年3月30日 除名
〃 相馬 鑑司 〃 除名
〃 城取 亘 〃 除名
〃 原口 要 〃 9月8日 除名
矢原 西沢 福治 〃 12月20日 除名 (名)

○明治三四年

1・1 第廿世紀第一年 明治卅四年（禁）

新校舍に新年式を挙ぐ。来賓相馬愛蔵君・望月直弥君・丸山文一郎君・西沢築君・荻原十重十君。（備）

1・10

第一例会を開く。望月宗治君開会の辞、丸山文一郎君「茶代は賄路の一種なれば廃止すべし」、望月直弥君「酒を用ゐざる結婚式の考案」、相馬愛蔵君「日曜日を守りて休業すべし」等の演説あり。それより茶菓あり。井口喜源治君三九郎につきて汽船発明家米人フルトンの伝などの話あり。それより禁酒教育矯風幻灯会を、来る十九日の夜等々力に開くことを決し、次会は二十六日頃開会の筈なり。（禁）

1・17

荻原君東京よりかへる。二十四日荻原君渡米の目的を以て上京す。西沢築君・寺島頼一君同行。（備）

1・21

荻原守衛君米國遊学送別会

開会、幹事の開会の辞。望月幸一君、日本人は常に彼地にて冷遇せらるゝの傾あり、君是をすくへと演べ、望月直弥君は渡米後決して信州吾神州男児の本分を失ふ勿れ、米化したる日本人となるなかれと戒め、丸山文一郎君は喜と希望と感謝とを以て君を送らん、例の快活なる演説あり。井口喜源治君は予は不思議なる事を述べて送辭に代へんとて、前夕荻原君等と誰方辺の天雲日没後將に点灯時なるにも係はず、一種の靈雲變びきて光を有するは、彼のクリストが産れ玉ひし時、星の光を望んで多くの博士等たづね来たりしと云ふと類似せる所あらずや、予思ふに、彼靈雲はたしかに横浜の天にして、荻原君の遊学の行程を照らすものなりと説き、尚君を送るの歌なりとて、新体詩（自作）を朗吟せらるゝ等の盛なる諸君の送辭あり。荻原君の謝辭（尚君は前に予を送るには、クリストが其弟子をつかはし玉へる其時、其心を以て送られたしと希望されたり）。夫れよ茶菓あり。井口喜源治君は再び起つて、米國より新聞着したれば報導せんとて、荻原君正に業なり帰郷せられたる時の預想談あり。（禁）

1・23 私立学校教員認可願を長野県知事宛に提出。(履)

4・20 設立認可。(備)

4 壁ぬりの普請をなす。同窓会員諸氏よく働く。(備)

5・25 望月宗治君開会の辞。相馬愛蔵君社会民主党の綱領を評す。望月直弥君吾松本村生徒よりの来書、等々力亮一氏よりの私書、丸山

文一郎君麦飯を食すべし、井口喜源治君吾会の演説を会員外へ聞かしむべし云々。屋外月は隴ろにして、風ゆるし。此良夜を奈何せん。趣ありき。(禁)

6・28 英人ハリントン・金子豊吉氏来たる。(備)

8・27 記事五六回休み

今宵は旧暦ウラ盆の十四日に当りければ、出席者廿余名なりき。望月宗治君開会。井口喜源治君「東京人と宗教」「目的と手段」、西沢静雄君「今日の青年の務」、西沢弥平君「人の悪事を語る勿れ」等の談話あり。会員外塚田浦重氏の「禁酒の必要」「尚武的精神」等のはなしあり。雷さまの遊戯をなして散会す。次会は九月十四日頃の都合なり。(禁)

9・14 望月宗治君開会。望月直弥君岡山孤兒院幻灯会を見たる話をなし、院長石井十次氏の熱心なる事業を紹介せられ、丸山文一郎君「内村先生を迎ふ」、井口喜源治君「趣味のはなし」等あり。次会を十月五日夜と定めて散会す。今宵は白金の宵祭りにて、出席者余り多くあらず。(禁)

9・21 内村先生を西条に迎ふ。二十二日、三日、四日先生の講演を義塾に開く。二十五日先生の松本行を送る。(備)

10・5 望月宗治君開会の辞。丸山文一郎君「元田肇の演説をきく」、井口喜源治君「甚しい哉官尊氏卑」「信州人の天職」等あり。雷さまの遊を演じ、奇談百出、次会を二十六日と定めて散会す。(禁)

10・19 望月宗治君開会の辞。望月直弥君「四月以来の境遇」、井口喜源治氏「マクベスの話」などあり。雷様の遊戯をなして散せり。(禁)

11・23 寺嶋頼一君送別会を開く。望月宗治君開会の辞。井口喜源治君、山中の賊を封ずるは易し、心中の敵を封ずるは難し。丸山文一郎君、入営する人は必ず留守を人に頼みて行くべし、料理屋に送別会を開き、芸妓をあげて酒をのむが如き者がよく此請托に応ずるを得るかと思ひ、望月宗治君は従来入営せる人が多く禁酒主義を捨てたり、されば寺嶋君は必此主義を確守せられよと希望し、寺嶋頼一君は勉めて此主義を貫徹せんと誓ひ、且会員に向て諸君は大に富を致すべしと述べられたり。それより茶菓あり、相楽みて

明治三四年(一九〇一)

明治三四・三五年（一九〇一・〇二）

散会せり。(禁)

12・6 三男喜三郎生る。(戸)

12・20 満十週年紀念会記事順序

開会之辭、唱歌君が代、本会之歴史 望月直弥君、規約朗読 望月幸一君、来賓演説祝辭、唱歌みなし児、會員演説祝辭、余興
福引遊戯、唱歌禁酒之歌、

来賓常盤村より太田喜代松君・横山亮恵君あり、荻原十重十君あり、東京より相馬愛蔵君の祝辭、相馬智君の祝辭あり。十五歳
以下を少年隊として、幹事に西沢本衛君・相馬欽治君当選。一般の幹事として丸山文一郎君・井口喜源治君当選。甚だ愉快に且有
益に会を終りたり。(禁)

矢原 竹岡 喜男 34年12月20日 除名

// 竹岡 喜嗣 // 渡米

// 原田 亮一 // 除名 (名)

12・25 二十五日の夜学より聖書の研究を始む。(備)

○明治三五年

1・9 内村先生より写真を頂く。(備)

1・10 手塚縫蔵君塾へ来たる。(備)

1・11 岡さよの家火災にかゝる。(備)

2・9 妻と喜三郎を伴ひて上京す。(備)

2・22 木村熊二氏にあふ(西沢静雄氏と伴ふ)。(備)

3・30 父井口喜十本籍地において死亡する。(戸)

父死す。妻東京よりかへる。丸山文一郎君・西沢築君、四月一日西条まで迎へに行きてくれる。(備)

8・18 明治三十五年

第一例会を開く。望月直弥君は東京角筈講演会の状況、相馬愛蔵君が東京へ出たる事情、井口喜源治君夏期休業の廿日間等の演

説あり。雷様の遊戯をなし、望月君の愛吟、「光り輝く鶯美の里」「ダンバーの戦争」などありて散会す。相馬君より菓子の寄贈ありけり。(禁)

8・24 独立苦楽部員の会合を義塾になす。西沢築・西沢静雄・相馬愛蔵・望月幸一・丸山文一郎氏等。(備)

9・10 相馬君上京す。(備)

9・13 第一例会を開く。丸山文一郎君(皆々奮て演説すべし)、水口象雄君(一青年煙草を吸ひつゝゆきて其煙草を落したるを見ば、如何にすべきや)、西沢永一君(此頃よりの苦痛)、西沢本衛君(人を議することなく人の罪をゆるす此二者を自ら実行せんとす)、西沢静雄君(予の疑問)、臼井佐登美君(悔悟)、井口喜源治君(矢野文雄の新社会を評す)等の演説あり。次回を十月四日に定め、雷様の遊戯をなして散せり。新入会者 山田豊君、山地耕平君の二人なり。(禁)

10・4 第三例会を開く。丸山文一郎君(本年の農作につきて)、井口喜源治君(人を待むべからず只神にのみ頼れ)等の演説あり。それより相州海嘯義捐金をつのりて、三円六十銭の申込みあり。それより雷様の遊戯あり。望月義美君の或家の者は皆おれが悪かつたといふ悪者はかり、故によく和合し一軒の家はお前がわるいといふ、自分は善い者ばかりなりければ、よく喧嘩ばかり絶えざりしなどのはなしありき。次会は十月十八日に開くことに決して散会せり。常盤村篠崎万亀江君出席。(禁)

10・16 金四円三拾銭(内十銭為替書留料)の義捐金を、小田原禁酒会内湘南海嘯救済義団へあてゝ送致す。(禁)

10・18 第四例会を開く。西沢本衛君開会の辞。井口喜源治君(内村先生の国家禁酒論を紹介す)等の演説あり。雷様の遊戯には山地耕平君の熊を打って、いわなを取って、雉子をとって、兎をとって、鰻をとったなどの話あり。次会を十日夜に開くことに決して散会せり。平林善弥、荻原利重君なども出席せられき。(禁)

11・3 丸山文一郎・望月宗治・西沢築・渋谷豊・望月秀一の諸氏来たる。(備)

12・13 谷川平右衛門氏来塾す(救世軍少尉)。(備)

12・20 第十一年紀念会を研究義塾に開く。

井口幹事開会の辞、丸山文一郎君本会の歴史、西沢築君会規朗読、望月直弥君吾感謝、井口喜源治君吾悲観等の演説あり。島内禁酒禁煙会員廿一名の総代望月青年の祝辞あり。禁酒の歌、讚美歌百一番あり、白金会員及矢原会員の一部分より密柑、矢原会員より福引の寄附あり。終て雷さまの遊戯をなす。時に在京会員相馬愛蔵君・望月幸一君よりの祝電あり。茶菓あり、入会者 原田幸

明治三五年(一九〇二)

明治三五・三六年（一九〇二・〇三）

自由君、望月滋治君の両氏なりき。（禁）

穂高村 平林 善弥 35年1月1日 除名

白金 望月 義美 // 除名

西穂高 山田 豊 // 9月13日 除名

矢原 山地 耕平 // 除名

白金 望月 融 // 渡米

等々力 望月 滋治 // 12月20日 除名

○明治三六年

来賓 丸山文一郎君・荻原十重十君・望月宗治君・同滋治君・同輝司君。（備）

1・1 明治三十六年

禁酒会を開く。出席者十二三名雑談。（禁）

5・1 明治三十五年未調査 在学生徒男三〇女三 三三三 学級数一 授業料一一五円 経費総額二五〇 卒業生三十四年度〇 三十五年

度男一（備）

5・30 藤森桂谷翁、新牧師仁木喜九市氏を伴ひ来たる。（備）

6・26 四男平四郎生る。（戸）

9 内村先生来らる。二日義塾に於て講演せらる。（備）

10・14 出席者 西沢本衛・永一・弥平・臼井佐登美・丸山文一郎・井口喜源治の六氏なり。雨降りければ出席者少なく、十一時頃散会。

12・20 日露開戦、非開戦の問題が主要なる話柄なりき。（禁）

夜本会満十二週年紀念祝会を研成義塾に開く。

此夜非常の寒風降雪なるにも拘らず、会する者四十余名、井口幹事先づ開会の辞を述べ、次で君が代の唱歌、丸山幹事の本会の歴史、我々七八名東穂高尋常小学校楼上去る二十四年の今夕相会して禁酒の誓を立て、以来、社会に向て飲酒の弊害を説き、あらゆる迫害を受けて今日に至り、今では世人の多くは皆な其害毒を認め、飲酒家其人に在ても、最ら酒と云ふものは悪い者である

と云ふ様になつたから、極く是からは平和的に説く様になつた故、戦争に疲れし我々老将は英氣を養ふ間、是からは諸君若き方が大にやるべしと述べ、次に望月宗治氏例に依て会規の朗読をなし、続いて會員西沢築君の懺悔談、人と云ふ者は自分より先輩の力にも頼らなければならぬけれども、其れよりも人は自己の力に依て己に打ち勝ち、罪より脱すると云ふことが一番必要である。我は一時非常に罪に沈み、殆んど失望せしが予は近頃懺悔に依て人は罪より救はれると云ふことを悟つて非常に嬉しく思ひます。私は今まで本会に入会して居つても、自分だけは主義を實行して居つたが、極く不熱心でありましたが、前述べし如き光明に接して、斯様に潔き楽しき会合に出ることが非常に楽しくなりました。予は是より誓つて自分の動ける限りは、毎会出席して本会のために尽す考でありますと述べ、次で丸山文一郎君・井口喜源治君の痛快なる演説あり。稲葉豊太郎君の入会の辞、外に二名の入会者あり。() 終て唱歌信州男児を歌ひ、幹事撰挙をなし、西沢本衛君・望月宗司君二氏当撰す。余興として矢原より福引の寄附あり、白金より密柑を寄附せられ、茶菓の饗応ありて後、宝さがし亦一興を催せり。終りに唱歌禁酒の歌を歌ひ、禁酒会万歳を唱へて散会せしは十二時半頃なりき。(禁)

稲葉豊太郎 36年12月20日 明治44年12月除名

矢原	原田幸自由	〃
穂高町	東条 轉	〃
等々力	望月 等	〃
白金	相馬 国治	〃
穂高村	平林破魔雄	〃
北穂高	清沢 冽	〃
〃	清沢巳末衛	〃
	渡米	(名)

○明治三十七年

1・3 明治卅七年

1・19 第一例会を研成義塾に開く。会する者八人、雑談、次会は来る二十三日に開く可く定めて散会す。十一時半。(禁)
妹井口一よ東穂高村の嶋田謙蔵と姉養子縁組をする。(戸)

明治三六・三十七年(一九〇三・〇四)

明治三十七年（一九〇四）

1・23 第二例会を開く。会する者十二人、社会主義に関する色々の物語りあり。茶飲み菓子を食べ、次会を二月十七日に決して散会す。
(禁)

2・17 第三例会を開く。会するもの井口喜源治君・丸山文一郎君・西沢弥平君・臼井佐登実君・西沢永一君・西沢本衛君の六人。雑談、

井口君戯れて曰く、角筈には十二人会と云ふがあるが、禁酒会も一層六人会としたらどうかと。散会せしは十二時頃なりき。(禁)

3・12 関根義正（望月正次）君死す。(備)

5 三十六年度末調査

8・23 在学生徒 男二二 女一 二三 学級数 二 授業料 九四円 経費総額 二一〇 卒業生 三十六年度 男一(備)
第四例会を開く。会するもの約三十名、近来に比なき盛会なりき。先づ其演説の大略を左に。

望月直弥君「誠に吾國を救ふには基督教にある。如何に政治が改良せられても社会制度が改められても、此人心に精神に靈魂が改良せられない内は駄目である。といふ事から其救霊に力を尽して居る救世軍の事」など話された。次に相馬愛蔵君「ウィラード嬢が亜米利加のある一村に婦人矯風会を少しばかりの人数で開ひてから、幾何もなくして斯くの如く世界に伝はった。又英国に於てブース將軍が救世軍を起してから、彼れ一生に於て既にかくの如く成功した。然るに本会は十年以前に生れたものなるにもかゝらず、依然斯くの如き状態にあるは、何ぞや。是れ必竟地が肥えて居ないからである。即ち禁酒会と云ふ植物を繁殖せしむるに、あまりに地がやせて居るからである。然り、吾々は此地を肥やさざる可からず。其方法として救世軍の『ときのこと』など売り、広めるなど、大ひに益ある事と信ずる云々」。

茶菓あり、井口喜源治君の健議により出役軍人家族を慰問して、軍人に慰問状を送る事に決議す。其費用の寄附を募のり、立所三円許出来る。北穂高清沢已末衛君入会。(禁)

9・1 望月みすよ子の為に時間後に算術をなす。(備)

9・5 軍人家族を慰問して、出役軍人に慰問状を出だす。(禁)

10・1 丸山君・望月宗治君と共に安戸元平氏を明科に迎ふ。(備)

10・2 義塾に晩餐会を開く。出席者二十名、食物一切を荻原君に頼む。(備)

○明治三十八年

第一例会を研成義塾に開く。丸山文一郎君「現今の教育界に就て」、井口喜源治君東京土産として所感歌則、即ち「基督教を於て他に救ひなき事、救世軍の集り、山室少佐の説教、四人の悔改者、内村先生の聖書研究会に列す、新井奥^ニ先生を訪ふ」等、望月直弥君「教育界に基督教伝道の必要なる事」等の演説あり。西沢弥平君・白居佐登実君外数名立て讚美歌を歌ふ。後井口君の健議により、以後今戦役に於ける村内の戦死者には香奠一円宛を贈る事に決し、次会を来月第二土曜日に開く事に定め散会す。(禁)

矢原区の戦死者太田宗治君の葬儀也。香奠一円を贈り、望月宗治君会を代表して弔詞を呈す。

弔詞に曰く

凍雲四辺を圧し、白雲群山を蓋ひ、風悲み日曠し。此時此日吾太田宗治君の遺骨を葬る。嗚呼悲哉。古来悲惨の事蓋し尠なからず。而して未だ曾て戦鬪の如きはあらず。古人曰く、一将功成つて万骨枯ると。日露霧をひらくや、或は鋒鏑に倒れ、或は銃砲に傷き、或は被寒朔風の侵す所となり、或は熱砂瘴烟の毒する所となるもの、彼我実に十数万を以て算ふべし。悲絶惨絶の極みならずや。

若し夫れ天暗く雨蕭々たる、荒涼たる満州の野、鬼火明かに悲鳴啾々として其魂と其鬼と、或は雙親を想ひ、或は妻孥を慕ひ、彷徨して帰する所なきもの真に少きにあらざる可し。噫嗚む可き哉。然りと雖も人誰か死せざるものあらん。志士は身を殺して以て仁爲すと。吾太田君の如きは夫れ此人乎。吾等今君を祭るに方て、君の義と烈とに感ずること殊に深し。希くは夙夜其主義の爲めに戦ひ、其道の爲めに殉し、以て君の英風に恥じざらんことを期すべし。情切にして辞足らず、君の精靈其卑を咎むることなく、遠く天の一方より来て吾人の衷誠を饗けよ。

明治三十八年二月二十八日

東穂高禁酒会一同 (禁)

第三例会を開く。西沢本衛氏第二回の軍人家族慰問及び慰問状送附始末報告、井口喜源治君第二故里だより(慰問状)朗読、米窪米窪義雄者「イエスキリストに向て進め、せまき門より入れ、広きは亡びに入るの門也」、井口喜源治君「桃太郎の如く其心の鬼を退治せよ」、西沢本衛君「米窪先生に逢ひし感」、西沢弥平君「基督教は最もよき教へなり」等の演説あり。讚美歌「たへなる恵」を歌ひ、茶菓あり。等々力久平君、中島重吉君の滑稽妙をつくす。米窪君の讚美歌を聴き閉会を告ぐ。会するもの二十余名。(禁)

明治三十八年(一九〇五)

明治三八年（一九〇五）

4・2

等々力区出身の戦死者等々力貞君の葬儀。香奠壹円を贈り、西沢本衛会を代表して弔詞を朗読す。

弔詞に曰く、

旭日東天に上れば天地朗らかに、月、東山を出ずれば万象明か也。吾国暴露膺懲の師、海に陸に戦ひて勝たざるなく、攻めて取らざるなき所以のものは、上叡聖文武なる天皇陛下の御稜威によると雖も、亦吾陸海軍兵士の勇敢無比になると、国民後援翼賛の力とによらずんばならず。

噫吾等々力貞君は出征以來到る処に奮戦し、遂に命を清国水師營南方の高地に隕せり。哀悼の意に堪へずと雖も、人誰か万世の肉体あらんや。死して祖国の爲めに殉ず、又以て瞑す可き也。

吾等君が忠勇壮烈なる行動を追慕し、茲に恭しく弔詞を呈す。英靈高くは来り餐けよ。

明治三十八年四月二日

（禁）

4・8

第四例会を開く。白居佐登実君「話をする事に就て」、平林善弥君「どこまでも」、平林破魔雄君「らしくせよ」、来賓胡桃綱一君「黒岩涙香氏の「向上の一路」に序せる文を紹介して曰く、一室に二人の人あり、共に勉強す、偶々外を衆隊の過ぐるあり、其一人は立ち出でて之を見、他の一人は室内にありて之れを聞く、立ち出でて見し人も、衆隊最早過ぎ去りしかば、其坐に着く、而して其二人の貞を見るに、室内にありてききしもの貞は、尚喜び残るが如くにして、立ち出でてきし人の貞は最早残る喜びもなく、淋かるべし云々」と。井口喜源治君「余は視察談をなさんとて、昨日の柏矢館に於ける立川雲平君の滿韓視察談の中、乃木將軍の逸事が最も感ぜられた事、尚ほ同君に対する柏矢町信濃屋に於ける慰勞会の不平、次に同君今日東穂高尋常小学校に於ける青年会の爲めにせられし演説の柏矢館にせられのよりよかりし事、及び同君の慰勞会席上などに於て俗人どもにこびざるを得ざる境遇にあるを氣の毒に思ふ事、次に今夜胡桃君の語られし黒岩氏の説に反対して曰く、其の立ち出でて見し人の方が必ずや歡喜に満たされて居て、其室にありし人は必ずや苦虫をかみつぶしたるが如き、貞つきにてあるや必せり、之れ必竟黒岩氏のさとりは、一室に閉ぢ籠り居て考へしものなるによるか、大ひに外へ出でて外界の有様を見る可しだ」等の演説ありて、茶菓をきつし、じゃんけんの遊戯をなして散会せしは、既に十二時頃なりき。会する者二十名。（禁）

5・4

三十七年度学事報告

学科 普通学 修業年限 一定年限無し 学級数 一 教員 男一 生徒 男二七 女一 二八 卒業生 創立より前年度迄

男二 本年度男一 女一 二 授業料総額二二〇円 経費総額二二〇円(備)

5・31 五男治五郎生る。(戸)

7・8 第六例会を開く。相馬愛蔵君在郷中なるを以て出席せらる。「生相近く習ひ相遠し」と題して演説せられて曰く、如何なる大臣大將も生るゝに於て大臣たり大將たるの格ありしものにあらず。あまり吾人と大差なかりしものなり。然れども其勉強其境遇によりて、しかく高位高官に上りしのみ。さすれば、吾人も生に於ては彼のドウドウたる大臣大將とひとしきものであるのに、其境遇宜しきを得ざるとは云へ、平々凡々眠つて終らんは誠にいはれなき事である。吾人は大臣や大將にはならんでもよい。彼の百姓の二の宮尊徳翁が後世へよい教へを遺した様に、大にして大工の子として生れ給ひしイエスキリストが目下全世界の人を救ひに導きつゝある様に、しかく大なるは得べからざる所なれども、吾人の出来得るかぎり勉めざる可からず、と。次に井口喜源治君ニ雜感數則ニ其接する人、其読む新聞雜誌によりて、非常に感化せられるものである。失礼かも知らんが如何にも相馬君は小大隈伯である。人はすべからく一芸に通ずるを可とす、一道の達人の又他に通ずるあるは、其一道に達せし奥義によりてさとりしものなり。我國の外形上に於ける即政事などの方面勢力は長にあれども、精神界に於ける勢力は幕府側にあり。吾人はすべからく幕府側たるべし。等の演説あり。茶菓をきつし、談話教刻。午前一時に到て散会す。相馬君お菓子を寄附せらる。来会者十數名。(禁)

8・14 第七例会を開く。(禁)

10・2 戦死者看護長等々力十三君の葬儀なり。香奠壹円を贈り、白居佐登実君代表して弔詞を朗読す。(禁)

12・2 第八例会を開く。会する十數名。望月直弥君の「感謝と祈禱」と題する熱心なる演説あり。其れに続いて平林破魔雄君・水口象雄君・清沢冽君・西沢永一君等の真心よりの信仰談あり。後井口喜源治君の「事実上本会員の信仰斯くの如し。来る紀念会を期して本会規約中の宗教に關係せずてふ条項を除去せられん事を望む」と語られ、丸山君の 等の演説あり。後望月君の健議により、一同天父の前にひざまづきて各々祈禱をさしむ。

本会の集りに於て祈禱をなす、之れを以て嚆矢となす。今夜只今より神様あなた従はんとちかひし者一人あり、茶菓を喫して散会す。(禁)

12・16 第九例会を開く。会する者拾數名。井口喜源治君の「祈禱に就て」其他二、三子の感話ありて来る紀念会に就ての相談あり。当夜

は開会前に柏矢町より穂高へ灯提行列を行ふ事、及び禁酒の歌を印刷して行列の道すがら配付する事(此印刷物には後に國家禁酒

明治三八年(一九〇五)

明治三八年（一九〇五）

論の一節をも合せ刷りぬ）等を決議したり。平林破魔雄君よりお菓子（禁）の寄附あり。前会の如く、今夜も祈禱しぬ。満拾四週年紀念会を開く。前例会の決議により灯提行列を行ふ。定刻塾庭に集まる者約百名。各々棒の先に結へる灯提を携ふ。東穂高禁酒会満拾四年紀念会と大書せる大角灯籠を先に立て、其れと共に穂高村の少年楽隊禁酒の歌を奏しつゝ塾庭を出発し、先づ柏矢町に向ひ、進み進みて同町南端に至り、折り返して同じ道を穂高に至る。兼而とのへ置きたる印刷物を道すがら配付す。町家皆出でて行列を見る。穂高北端より同じ道を研成義塾に帰る。午後八時。

其れより一同着席。西沢幹事の開会の辞及び会務の報告ありて、丸山文市郎君の本会の歴史、来賓白井仲一君「東京の或牧師大放蕩者を銭を与えて自分の説教をきかしめ、遂に熱心なる信者にしたる話」、同、仁木喜九市君の「自分も或る禁酒会の一員であつて、禁酒運動には骨を折つて見た」信仰ある者に非れば禁酒主義を持ちつゞける事能はず、而し禁酒を以て伝道の手段とするは己れをあざむき人をあざむく者である」、同、勝家市太郎君「禁酒は事をなす第一歩である。其れにて足れりとすべからず」等の演説あり次に、同島内宮下喜門君、島内禁酒禁煙会を代表して同会の模様を報告せられ、尚同会を起こすの困難及び同君着用禁酒禁煙表白の羽織の紋を示されて、熱心なる演説をせられた。

会員には望月直弥君経歴談（始には江らしい人（即ち千載青史に列せんもの）にならん為禁酒して倒^た抵一代禁酒主義を貫徹せんつもりなりし事）其内に基督に救はれてクリスチャンになつた事）以前は教場に生徒を教ゆるに誠にお役目でやつて居つて、時間のつぎるのを待つて居つた。教師が斯くの如くで生徒も亦そうである如にして完全なる教授が出来やう）今は全く變はつて熱心に嬉しく喜んで教場に出て居る。神様から之れだけの児童を自分が預つて教ゆるのであると思へば、大ひなる責任を感じると共に又感謝に堪へない。井口喜源治君の禁酒のすすめ、「酒は身体各部に少なからざる害を及ぼす事。酒を飲んで身体が温まつたと云ふのは、一時神経のだまされるのであつて、実は大ひに其熱度を減じて居る事。酒を飲んでも一つも利益なき事。若し諸君の父及祖父及び知人に酒飲があつて、何か其家内及び他人及び自身に益ありし事あらばきゞ度き事」等の演説ありて、柑柑お菓子の饗応あり。余興として福引妙を尽す。終つて井口君在京の会員相馬愛蔵君・望月幸一君の祝賀状を朗読し、十四名の新入会員を紹介す。

一同立つて禁酒の歌をうたひ、閉会せしは午後十二時過ぎなりき。来会者約百二十名、柑柑は白金の会員諸君より、福引は矢原の会員諸君より寄附せられたるなり。来賓として東穂高尋常小学校長白沢銀司君も出席せられき。尚北穂高禁酒会よりランプ一個を寄附せられたり。（禁）

穂高村	平林 利治	38年1月1日	渡米
穂高町	片瀬 与市	8月14日	渡米
有明村耳塚	林 茂平	〃	除名
西穂高村柏原	宮嶋与曾一	〃	除名
〃	木藤 貢	7月8日	除名
有明村橋爪	山岸 三郎	〃	退会
北穂高村青木花見	胡桃 網一	12月2日	退会
白金	清沢 庄市	12月16日	除名
北安押野	相馬 勇	〃	除名
〃	高田 格司	〃	渡米
〃	須沢佐門次	12月20日	除名
〃	小林 三好	〃	除名
穂高町	等々力久賀次	〃	退会
〃	東条 智躰	〃	除名
等々力	須沢 源	〃	死亡
北安押野	望月 積善	〃	渡米
〃	渡辺 三七	〃	〃
北安萩栄	矢口 重治	〃	除名
〃	小林 忠夫	〃	〃
鳥川村扇町	斎藤 茂	〃	〃
等々力	望月 治作	〃	〃
矢原	西沢今朝勝	〃	〃

明治三十八年（一九〇五）

明治44年12月20日除名す

明治三八・三九年（一九〇五・〇六）

耳塚

林 繁樹 38年12月20日 除名

牧

降旗 重美 //

除名 (名)

○明治三九年

1・3 第一例会を開く。久しく戦地にありてお骨折りになりし本会員寺島頼一君帰郷、今夜始めて出席せらる。井口喜源治君立て「寺島君を送る時に、自分は寺島君を兵士として送るは即ち本会を代表して君を遣はずも同然である。依て吾々会員は一ヶ月に一回位の音信は必ず通ぜざるべからずと云ふて置き乍ら、甚だ御無沙汰で有りし事を深く謝する次第である。又君が行くに際して弟君の事をとくと依頼せられたるにかばらず、吾々の不注意の為此れをも全ふするを得ず、誠に申訳なき次第である。何卒此約束を守らざりし罪を許し給はん事を」、次に丸山文市郎君「矢張自分も然りし事其他自分の他人の事に冷淡なりし事を深く謝され」、寺島頼一君「自分は郷里出発之際は色々に心配し、又今迄禁酒会から出身した兵士も、多くは兵営中に於て其（飲酒）端緒を開き、其後は再び本会へつらなる者なかりし事とて、然らば兵営中に本会の主義を貫徹するは不可能事ならんかなど非常に心配せしに、自分今迄の実験上（君は現役まさに終らんとする時日露戦争起りたるなれば、都合五ヶ年間兵隊生活をいと生まれしなり）、確に本会の主義を貫く事が出来る」と、今迄大くの会員之れに於て随落の道に向ひたるにかゝはらず、続いて兵営生活をいとまざる可からざる少壮会員の爲めに、此先鞭をつけ給ひしを大ひに君に謝する次第なり。其他水口象雄君・平林破魔雄君・清沢冽君・久保田栄吉君・西沢永一君・白居佐登美君等の熱心なる信仰談あり。

茶菓を契しつゝ幹事の選挙を行ふ（前記念会に行ふ可きをあまりにせはしかりし故今回にしたるなり）。寺島頼一君・白居佐登美君・西沢本衛君三人同点にして最高点なりしが、寺島君は帰郷早々の事とて様子もわからざればとの事にて、総ての事務は今迄通り二人にて行ふ事に決す。尚今会には、規則第八条を削つて、同条を「本会規約改正は記念会に於て出席会員三分の二以上の賛成するを要す」と改めんとの健議ありしが、満場一致を以て可決す。散会せしは午後十二時過なりき。

出席者参拾余名、寺島頼一君金吾円とお菓子を寄附せられたり。（禁）

2・17

第二例会く、午後八時開会。井口喜源治君「某氏の話をきくに、いと高き吾天皇陛下より盃を戴いた時は、禁酒会員は如何にす可きやと。然り吾人は吾人の主義を告白してじたひ申す可し。然らば陛下はきゝ入れ給はんと信ず。斯くの如きは反対者の吾人を困めん為の言にして取るに足らず、又然るを尚、どこまでも吾人に酒を強いて止め給はざらんなど、無慈悲の方の如くに想像するは、

かへつて不敬の事に非ずや。宇宙の大勢は神之れを司り給ひ、人間の如何ともなし得可き事に非ず」と。

平林利治君の「今自己の受けつゝある神の恵に就て」、其他西沢永一君・平林破魔雄君等の信仰談ありて、茶菓を契し、雷様の遊戯久しぶりにて最も面白かりき。十二時過閉会。来る者約三十名。(禁)

○東穂高教友会と同盟して東北凶作地のために義捐金を募集し、金拾円を得、内拾円を宮城県庁に拾円を岩手県花巻教友会に、拾円を福島県栗野教友会に托す。(禁)

5 三十八年度報告

生徒総数 男三三 女八 創立より前年度まで卒業 前年度まで 男三 女一 四 本年度 男二

三十八年度授業料総額一四四円 経費総額二五六円

生徒の学級別 一 三十八年度卒業生 男二 (備)

8・3 望月直弥君と共に明科一番にて越後に向ふ。牟礼柏原間凡一里半汽車通せず(洪水にて道路崩壊)、崎驅たる坂路を徒歩す。夕刻

柏崎に着す。柏崎ホテルに懇親会をひらく。(備)

8・4 日本石油会社を見る。(備)

10・26 出発木曾に伝道す。(備)

12・12 第三例会を開く。会する者十三名。禁酒会振興策に付き談ず。新に事業を起す可しとは衆議一つなれども、何をなす可きかは、會員各自考へる事にする。

12・20 次に紀念会に付きて、今年何もハデな事はやらず、チャク実に行ふ事に決し、茶菓を喫して散会。(禁)
第十五週年紀念会を開く。

望月直弥君の勇氣に満てる信仰談。滑稽の内に実を持てる会田貢君の従軍談。井口喜源治君の面白き禁酒禁煙貧乏神の話等ありて茶菓を喫す。渡米の途にある清沢列・高田格司両君より祝電来る。在韓軍中の荻原利茂君よりの書翰を朗読す。後平林利治君の信仰談、及び讚美歌禁酒の歌の合唱ありて閉会・時正に十二時、来会者五十三名。(禁)

穂高村 小平 源一 39年1月3日 除名

北穂高村島新田 久保田栄吉 //

明治三十九年(一九〇六)

明治三九・四〇年（一九〇六・〇七）

西穂高村柏原 杉山 茂登 39年1月3日 大正7年死亡

等々力 望月喜代美 // 除名

穂高町 平林 義行 // (名)

○明治四〇年

2・19 二女操子生る。(戸)

4・3 牛山雪鞋、荒川君と伴ひ来る。氏は諏訪の人、日露戦争に大小廿廿戦せりといふ。西沢寒曹・望月野蔵松本へ行く。(備)

4・14 日曜、浅間千代の湯に安筑連合教友会を開く。出席者二十名。午前望月直弥君の実験談あり、余は復活の希望につきて語る。汽車

にのりてかへる。(備)

4・15 午前八時明科発上京す。同伴者曰井佐登実・望月田鶴野・同千江野の諸氏也。中央東線によりて、午後七時二十八分着の汽車はお

くれて、八時半にいたれり。望月幸一君方に宿る。相馬愛蔵君良子君に面会す。(備)

4・16 雑誌の原稿を西沢本衛君に送り、午前九時半望月君と同伴向島にいたり、大学艇庫前より「やまと新聞」の廻遊船にのりて、吾妻

橋に着す。此日明治大学のボート競争あり。又旧佐竹侯の屋敷(サッポロビル)を見る。浅草花屋敷に入り、上野に行き、天幕

伝道を見てかへる。救世軍に対する俗物の歓迎は少しく心ある人々をして頰感せしむ。救世軍が強て恵みの座と云ふ所に人を引き

出し、その時の説教の結果を直ちに現実に表示せんとするが如きは、その組織上必要あらんかなれども、余りに人を圧迫して五月

蠅かなの感あらしむ。畢竟救世軍の運命は未定也。ブラス大将に対しては余はむしろ失望せり。(備)

5・1 三十九年度末四十年五月一日報告

生徒総数 男三五 女一一 四六 学級数 一

創立より三十八年度まで卒業生総数 男五 女一六 三十九年度卒業生 男二

三十九年度経費総額三二二 授業料総額一九二

生徒学年別生徒数 一年 一四(九、五) 二年 一二(八、四) 三年 一〇(八、二) 四年 五、五年 三、六年二、(備)

8・2 千葉鳴浜の海岸に海保氏の宅に集まる。(備)

12・20 第十六週年紀念会を研成義塾に開く。

西沢幹事の開会の辞、望月直弥君の本会の歴史、寺嶋頼一君の会則の朗読、来賓豊科美以教会青木牧師の面白い禁酒演説等ありて、茶菓を喫し、兼て調製し置きたる擬慰問袋配ツケ附す。

幹事の選挙を行ひたる処、白居佐登実君・西沢本衛君再選。讚美歌教番合唱、散ぜしは十一時過なりき。入会者六名。(禁)

等々力 望月 左門 明治40年12月20日 除名

柏矢町 白井 純雄 除名

越後大鹿 本田 作平 北海道行

西穂高村相原 中嶋 清一 除名

等々力嶺良 除名

西山 義実 除名 (名)

12 明治四十年 此年は例会は一回も開かざりき。従って何の事業をもなざざりき。(禁)

○明治四十一年

2・2 望月秀一君金百〇一円也、明治四十一年二月二日為替金受取。内金四十円也望月直弥君に渡す。五十七銭イナヅマ 十銭ペンキ

3 金貳拾円也屋根板 六円四十銭屋根工針金、釘 一円二十銭小板 八銭五厘くぎ。(備)

4 五円七拾四銭四厘寺島 四十八銭五厘同 二十五銭雇人 一円六十七銭五厘島田屋 二円三月四日直弥君へ。(備)

4・7 二円 四月七日 八十八銭九厘屋根板四把 八十五銭七厘檜皮六本 八十五銭戸 七銭蝶つがひ及ねぢくぎ 二円望月君へわたす。

四円五十銭? 八十九円十九銭。(備)

4・10 五円 四月十日 五円六十九銭四厘 八銭九厘口 メ百円三十六銭四厘(備)

5・9 談話四十一年五月九日、石狩の昔話。(備)

6・25 相馬愛蔵君来る。(備)

9・6 第一例会を開く。望月直弥君の信仰に導いた二人の婦人の話あり。茶菓を喫し、数名の祈禱ありて、散会せしは正に十二時なりき。

10・4 来会者十六名。以後毎月第一日曜日之夜必ず開く事に定む。(禁)

第二例会を開く。望月直弥君、胡桃沢氏の雑誌「校友」に書かれた「三川先生」を朗読紹介せられ、井口喜源治君「信仰か強けれ

明治四〇・四一年(一九〇七・〇八)

明治四一年（一九〇八）

ば強いだけ、それだけ重い十字架があるものであると云ふを冒頭に、内村先生其他二三教友の今現に負ひつゝある十字架に就て」語られ、実にきく者をしてむねの迫るを覚へしめた。来会者九名。（禁）

11・3

第三例会を研成義塾同窓会と共に開く。井口喜源治君の「今上天皇陛下の御聖徳は、今の凡新聞記者、凡教育者輩のたゞゆるもの以外に、伺い知るを得ざる大いなるものがある事を感じる。而して其れは今より後、必ず其明ある歴史家が現れて後世に伝へる可く書き記るるゝであらう」と、大略右の如き大演説ありき。来会者八名。（禁）

11・26

12・6

昼の休みに町へ遊びにゆきて、提灯屋の辺に徘徊せるもの内山良次、高橋藤重、武居哲雄、武居美代一、栗林。（備）
第四例会を開く。井口喜源治君の建議より「吾會員が葬儀をいとなむ場合には酒を用ゆるや否」と云ふに就て議す。

親等にて特別の遺言場合或は何と云ふ如き色々の議起りたりしが、これは重大なる問題なれば宿題として研究する事にし、茶菓を喫しつゝ紀念会の相談なし、散会せしは十二時、来会者十一名。（禁）

12・20

第十七週年紀念会を開く。

西沢幹事の開会の辞、丸山文一郎君の本会の歴史、水口象雄君の会則の朗読、望月七八君の足を取って来た兵士の話、望月直弥君の昔話、桃太郎・浦島太郎等より受くる新教訓、井口喜源治君の臆附国巡回禁酒談等あり。此間讚美歌歌番合唱、茶茶を喫し、矢原の會員よりの寄附にかゝる福引を開き、会衆の願をはげし、臍をよらしむ。

後禁酒の歌をうたひて散会せしは、十一時半。白金の會員及び在京の會員より檜柑の寄附あり。来会者七十余名、入会者五名。（禁）

四十年末調査

生徒総数 男三一 女一〇 四一、学級数 一

創立より三十九年度まで卒業生総数 男七 女一 八 四十年末卒業生 男三、女三

四十年末経費総額三六二 〃 授業料総額一八四

生徒学年別生徒数 一年二一、（一七、四） 二年一〇、（七、三） 三年八、（五、三） 四年一、（一） 五年一、（一） 六年七年

学科目区別、修身、国語、漢文、英語、作文、理科、歴史、地理、習字、図画、数学、体操、唱歌。（備）

望月美亀藏 明治41年12月20日 除名

会染村十日市 内山 良次 除名

南穂高村重柳 川井 梅三 除名

等々力 望月捨一郎 除名

北穂高村島新田 武居 哲雄 除名

等々力 望月 範三 除名 (名)

12・28 三女礼子生る。(戸)

○明治四二年

1 例会を開き、会長改選の結果、平林義行・水口象雄両氏当選す。(禁)

2 例会を開く。会する者六名。会長平林義行君の司会、望月直弥、井口喜源治両氏の感話あり。

井口氏の發義に係る祝弔儀式改革案左の如し。

旧来我地方に行なはるゝ冠婚葬祭の儀式は、吾等の採れる禁酒主義と勢衝突を免れず、故に吾等は此に我等の主義に戻らざる考案を定め、漸次是れを実行せんを期す。

第一 葬儀

一、葬りの儀式は死者の宗教的信仰に従ふ事。

二、キリスト教信者にありては教友其葬儀を助くる事(従来の庚申仲間の如し)。

三、出棺の時間を正確にする事(午後三時を適當とす)。

四、町内区内の会葬者は出棺前九一時間に集る事。

五、同上の会葬者へは茶菓を供するに止むる事(香奠と引かへに菓子をわたすも可なり)。

六、祭主親戚他村の会葬者へは時飯を供すること(但し一汁一菜位)。

七、同上に対しては菓子煎茶等を贈る事。

八、香奠の一部を公益の為に寄付するも可なり。

明治四一・四二年(一九〇八・〇九)

明治四二年（一九〇九）

九、手伝は近隣（向三軒両隣位）及教友に限る事。

十、一般に酒を使用せざる事、但し死者が父母長上にして特に遺言ありたる時は此の限りに在らず。

十一、前条は大綱を誤らざる限り臨機取捨加減する事を得。

散会せるは午後十二時なりき。（禁）

3・2 昼の休みに□を見にゆきしもの、内山、栗林、等々力、有賀、大島。（備）

3・28 証書授与式。（備）

3 例会を開く。会する者拾二名。水口君の開会の辞、望月直弥君・丸山文一郎君の感話あり。井口喜源治君のロイドガリソンの話は

最も会員をして感ぜしめたりき。茶菓後散会せしは午後拾二時なりき。（禁）

4・21 夜、星八重子来る。（備）

（明治四二年度）

月道 英 画 植 幾

火読 英 東 唱 物 裁

水算 漢 習 英 本 作

木道 英 作 幾 植

金読 算 物 唱 本 裁

土 漢 東 英

5・2

夜例により禁酒会を開く。来会者拾名。平林幹事の開会の辞あり、後望月直弥氏演台に向はれ、熱心（みあしの跡）なる小説より得られたる感話あり。原田幸自由君・横山君（松本和合薬店店員）の演説あり。終はって茶菓を食し、十二時頃散会せり。（禁）

5・12

橋爪平林勇吉氏より石を運送一台買ふ。代金五十銭（穂高町ならば四十銭）、二十四個ありき。一坪凡六十（運送三台とすれば少し余るべし）、一坪二百貫、此積貨凡四五十銭。（備）

6・1

四十一年度末調査 四十二年六月一日回答
○教科目 修身、国語、漢文、英語、作文、理科、歴史、地理、習字、図画、数学、体操、唱歌、裁縫

○創立より四十年度まで卒業生総数男女別 男一〇 女四 一四

○四十二年三月一日現在各学年男女別 一年男14 女2 16 二年男12 女4 16 三年男4 女1 5 四年男 女2 2

○四十一年卒業生 男4

○四十一年度授業料総額一二四〇 四十一年度経費総額二五六 (備)

6・6 例により禁酒会を開く。出席数名。九時頃より会を開く。農繁の期節故来会者為めに少なし。炬を囲みて座談す。

井口先生云はるゝやう、去月執行されし正遷宮祭に、酒を用いずに客人を饗応せられしかども、意外に困難を感じざりし事。外にも熱心なるは感想を語られ、又三ヶ月程前義塾へ来たられし裁縫教師星八重子婦人、台湾に居らるゝ夫病氣の為め看護のかたがた突然彼の地へ向はるゝ事となられし故、遺憾ながら義塾を去る事となられし事を報告せられたり。次ぎに望月先生の御話に、父上死去せられて後、一家の戸主と居なれし以来一層種々なる困難に襲はるゝなれども、近來は左程に苦しきを感じられぬやうになられしとの由を申されたり。

終はて、茶菓を食べ十一時半頃閉会せり。(禁)

7・4 例会を例の場所に開く。集られし会員は井口先生・望月先生・西沢本衛君・西沢弥平君・水口象雄・丸山文市君・平林義行君の七名、各自胸襟を開いて語らる。中にも丸山文一君の大気焰は一層席上を賑はしたり。別に席もつくらず、茶菓を食しつゝ思ひ出づるまゝを語り合ひ、十二時少々過ぎ散会せり。(禁)

8・1 例会を開く。夏蚕の真最中の故にや、出席者僅かに望月直弥氏と平林義行氏のみ。十一時半頃まで信仰談に時を送り、終に禁酒会の為めに二名にて祈禱を捧げ、十二時頃散会せり。(禁)

8 (グンデルト穴戸元平君来る。(備))
9・5 四十二年九月五日回答

一創立年月 明治三十四年四月

一修業年限 制限なし科別なし

一学級数 一

一学年別生徒数 五年在學生 男〇 女二 四年：男三 女〇 三年：男二 女二 二年：男三 女一 一年：男一〇 女〇

明治四二年(一九〇七)

明治四二年（一九〇九）

合計 男一八 女五、二三

一 創立以来入学生徒数 男一八八 女二六、二二四

一……卒業生徒数 男一四 女四、一八

一 学科目 修、国、漢、英、作、理、歴、地、習、図、数、体、唱、裁

一 教授季節及時間 四月一日に始まり翌年三月卅一日に終る 時間は一週三十時間以内

一 教員数 男一

一 經常費予算 二五〇円

一 臨時費予算 三〇円

一 授業料月額 五十銭

(備)

9・5

禁酒会を開く。出席者水口象雄君・望月直弥君・平林義行君の参名なり。信仰上の事に付き種々語り、後茶菓を食す。終に本会上に又愛の友の上に御祝福の豊ならんことを主に願ひ、歎びに満ちて散会せり。時は十二時間近かなりき。(禁)

10・3

例により禁酒会を開きたり。今回は一時農事も忙しからざる故にや多くの出席者ありたり。九時頃開会。平林幹事の感話後、望月直弥氏は現今教育界の腐敗に付き憤慨せられ、聖書を引きて、大いに旗色を鮮にして戦はざるべからざる事を最も熱烈に語られたり。次ぎに井口喜源治氏は、我々兄弟は最も清き感情を以て、清き行をなさざるべからざる事を痛切に語られたり。茶菓を食し、雑談に時を過し、十一時半頃閉会せり。(禁)

10・12

松下真視学小穴憲吾氏来る。(備)

10・13

相馬愛蔵君来塾。(備)

11・7

例会を義塾に開設せり。

出席会員井口先生・望月先生・水口象雄君外数名。九時少々後より会を開き、井口・望月両先生の御感話あり。後一同茶菓を食し、十一時半頃散会せり。(禁)

12・5

例会を開く。来会者井口・望月両先生外数名。八時頃より会を開く。平林幹事の開会辞、次ぎ望月直弥氏の感話ありたり。曰く、先日白金の火災に遭遇されし人々は、一般に比較的善人の家屋の由なるが、信仰の眼を以て見る時は、是れ贖罪の理に外ならぬと

の理由を熱烈に御説明ありたり。

次に井口先生には、聖書百約記を引かれ、廿九章を朗読後、キリスト者の此世にをいて受る困難の最も感謝すべき理を語られたり。次ぎ島内村大飼君出席せられ、実験談をせられたり。一同にて茶菓を食し十一時半頃開会せり。(禁)

12・20

本会第十八週年紀念会を研成義塾に開催せり。来会者約七十余名。一同着席せしは八時頃なり。平林幹事開会の辞を述べ、一同二回君が代を唱へ幹事の簡短なる会務の報告あり。終はつて望月直弥氏の本会の奮闘史と云ふ題にて、本会の起源及其間にをける幾多の実験を熱心に約一時間程も語られたり。望月清美君の会規朗読、井口先生の馬鹿勝の手柄と云話あり。

丸山文一郎氏の面白談話あり。後茶菓を喫し、矢原諸氏より寄附せられし福引の余興ありたり。其間讀美歌教番、一同歡を尽し歡会せしは十二時頃なり。相馬肥料店主より菓子の寄贈あり、相馬・望月(東京)両氏より午後八時十五分祝電を受取たり。入会者七名を得たり。(禁)

- 等々力 望月 範三 42年12月20日 除名
- 穂高町 北原 基 〃 〃 除名
- 青木花見 清沢武次郎 〃 〃 除名
- 〃 清沢今朝幸 〃 〃 除名
- 柏原 等々力真治 〃 〃 除名
- 北穂高村 鳥原伊俛睦 〃 〃 除名
- 南穂高村重柳 丸山 茂 〃 〃 除名
- 北穂高村青木花見 清沢 一雄 〃 〃 除名
- 〃 清沢 浩 〃 〃 除名
- 細萱 丸山孫三郎 〃 〃 除名

(名)

○明治四三年

1・2 第一回禁酒会を義塾に開催せり。来会者九名八時半頃より本年度役員の改選を執行せり。開票の結果望月清美君と平林義行君の両名当選せり。後一同席に着き、開会の辞を兼共々本会の為め働き度き旨を述べられ、次ぎ井口喜源治氏は(失楽園)と云ふ題にて

明治四二・四三年(一九〇九・一〇)

明治四三年（一九一〇）

の御演説あり、終はって、望月直弥氏は吾人は大胆に旗色を鮮にして、禁酒会員たるの名に恥ざる働きをなすべき事に付き、痛切に語られたり。及茶菓を喫し、雑談に時を送り十一時半頃散会せり。（禁）

2・6

第二回禁酒会を義塾に開きたり。来会者五名、会員も少数故互に胸襟を開いて相語り、誠に恵まれし夜なり。茶菓を食しつゝ談じ、十時散会せり。（禁）

3・6

第三回禁酒会を義塾で開設せり。出席会員六名、九時半一同着席。平林幹事開会の辞を述べ、次に望月直弥氏は近次庚申講を脱せられし事、又世の偶像に対して、吾人の取る方針に付き（モーセ）の十誡を引かれて語られたり。次に西沢本衛君の演説あり、曰くキリスト信者たるもの行為は、最も慎重の態度に出でなければ、是れによりて世の人を躪しむるが如き事ありはせぬかと云ふ事に付き、近頃の実験を語られ、井口先生には二三の感話を本会の純禁酒会でありたき事の希望を演説あり、太田君の実験あり後茶菓、十二時半頃一同散会せり。（禁）

4・3

例会を開く。来会者拾名。平林幹事簡短なる開会の辞を述べ、後一同の談話ありたり。杉山君の湯の話、平林君の研成義塾、井口先生の昔話、望月先生の讚美歌四〇九番を歌はれ、西沢君の禁酒を勧むの題に付きて語られ、河合君の犬の話、清沢一雄君の一日の事の題に付き話さる。清沢浩君の着とは祭の題に付き話さる。白井佐登美君は吾禁酒会は何を社会に貢献しつゝあるやに付き説明せられ、西沢本衛氏は楽と云題に付き話されたり。後一同茶菓、実に恵まれたる禁酒会なりき。散会せしは〇時五十分頃になりき。（禁）

5・1

5・5 来会者五名。井口先生より読売新聞にや記載しある荻原守衛氏の経曆談を讀まれ、後一同にて雑談に時を送り十二時半頃散会。（禁）

四十二年度（四十二年五月五日回答）

教員数 男一 女〇
生徒数 二四 男一九 女五 五年在學生 男〇 女二 四年：男三 女〇 三年：男二 女二 二年：男四 女一 一年：男

一〇 女〇

卒業生 五 男三 女二 （備）

6・4

四十二年六月四日回答

四十二年度授業料総額九十一円 〃経費総額二百四十五円 （備）

6・5 来会者数名、例によりて例の如く会を終りぬ。(禁)

7・3 出席者 井口先生・望月先生・平林幹事の三名、会員も少数の事故坐談にて時を送り、茶菓を食し、十二時頃散会せり。(禁)

7 金三十円の内四十二年七月望月君より一円受取。(備)

8・7 例会を開くべきなれど、夏蚕の最も盛なる時期故休む事と決せり。(禁)

9・4 例会を催すべく、義塾に出席者を待ち居りしが、農蚕繁忙の期節故更になく、故開催を見合はせたり。(禁)

10・2 空向(禁)

10・8 六男鑑六郎生る。(戸)

10・15 16 創立滿十二年感謝記念会、内村先生・齋藤宗次郎君・木村孝三郎君・海保竹松君等来塾。(備)

10・21 二十一日より三十一日まで秋期休業。(備)

11・2 井口菊野 本郷千駄木町二十二番地英語通信社C部へ入会。(備)

11・6 望月先生・西沢本衛氏・白井佐登美氏・平林幹事の四名、烟燵にて望月先生より(二三日前若石学の講習を小学校に保科五無斉氏

開かれ)講習の様子及び五無斉氏の風手に付き語られなり。茶菓を喫し十二時閉ず。(禁)

11・18 四十三年度(四十三年十一月十八日回答)

四月末日現在生徒数男三〇、女一、三一 教員数男一、女一 經常費予算三五〇 臨時費予算二〇〇。(備)

11・20 清沢浩君の入学を送り、青柳さく子姉の来塾歓迎会を開く。(備)

11・21 裁縫をはじめ。女徒 井口貞・望月京二人来る。(備)

12・4 例会を義塾に開く。来会者七名。抽籤にて話題を定む。

一番(落語もしくは新体詩)丸山文一郎君、二番(世の飲酒家を見て)西沢本衛君、三番(酒の医学上必要物なることを西沢静雄氏語らる)。四番(何にてもあなたの出来得る事而して必ずやらなければ承しませんが)望月清美君は過る日、客に行かれ酒席にて思ひ切て自分の主義を主張せられし当時の実験談ありたり。(本会の発展策に付きて)望月先生、六番(君をして十年若からしめば如何なることをなさんとするか)平林幹事、七番(幸福人)西沢弥平君。一同終はつて茶菓を喫、雑談十二時少々後散会せり。(禁)

明治四三年(一九一〇)

明治四三・四四年（一九一〇・一一）

矢原 太田 充実 43年12月20日 除名

等々力 望月 七八 // 除名

// 浅野 元次 // 除名

// 望月 清徳 // 除名

白金 寺島 伯 (名)

○明治四四年

1・3 本年第一回禁酒会を義塾に開催せり。出席会員九名。幹事の改選を行ひ、望月清美君最高点、平林義行君次点なるを以て本年の幹事は右兩名に当選せり。終はりて、一名づつ話題により談話あり。一同茶菓、十一時半頃散会せり。(禁)

2・5 二回禁酒会を義塾に開催せり。出席者八名程、平林幹事の開会の辞あり、後抽籤にて話題を定め、順次語られたり。茶菓を喫し、十一時半頃散会せり。(禁)

3・5 第三回禁酒会を義塾に開きたり。平林幹事病気の為め出席なし。井口先生司会のもとに会を終はりぬ。(禁)

4・2 第四回禁酒会を義塾に開催せり。望月幹事開会の辞、丸山文一郎君・望月先生・西沢君の談話あり。後茶菓、雑談に時を送り、十

一時頃散会。恵まれし集りなりき。(禁)

5・7 都合により本会開催を見合はせたり。(禁)

6・4 農蚕を日に日に忙はしく、為めに来会少なく、今宵は西沢弥平君・寺嶋伯君と平林幹事のみ。種々雑談に時を送り、十一時半頃散会せり。(禁)

6・26 四十三年度（四十四年三月末日調）四十四年六月二十六日回答、役場へ

一、学科目 修、国、漢、英、作、理、歴、地、習、図、数、体、唱、裁

一、修業年限 一定の制限なし

一、学級 一

一、教員 男一 女〇

一、生徒 男三〇、女一一

一、入学者 創立以来男二百拾壹人 女三十七人

一、卒業者 同男廿五人 女十人

一、本年度収入総額 授業料百二十五円五十銭 其他三百三十円

一、同支出総額 經常費二百五十円 臨時費二百円

四十三年度内一学年に入学者 男二十二 女十一 同卒業者 男八、女四 (備)

7・2

第七回禁酒会を義塾に開催せり。(禁)

7・30

四十四年度(四十四年四月末日調七月三十日回答) 郡役所へ

一 教員 男一、(小学校本科正教員)

一 生徒数 六年在学生男一、女〇 五年 男〇 女一 二年 男十三 女六 一年 男十三 女四

經費予算三五〇 臨時予算三〇〇(運動會費奨励費)

8・6

農蚕繁忙の時故休会せり。(禁)

9・3

第九回禁酒会を開く。丸山文一郎君と平林幹事のみ。雑談数刻、十一時過散会せり。(禁)

10・1

本会開催を休む。(禁)

11・5

第十一回禁酒会を開催す。来会者五名。政治上の事、農業の事など種々なる談話に時を送り、時々讚美歌を歌ひ、又本衛君の瑟わ

歌(城山)あり。三名は讚美歌、平林幹事の箱根八里等興味ありき。茶菓を喫し、十一時頃散会せり。(禁)

11

高等小学校補習科受持徳山高古一郎(上水内日里村) 来塾。(備)

12・3

清沢庄市君・原田幸自由君兩名の歓迎会を兼、禁酒会を催し、又来会者十五名程。西沢本衛君の開会の辞、井口先生・望月先生・

丸山文一郎君の感話あり。後兩君の挨拶あり。茶菓後散会せり。午後三時頃開会、六時頃散会せり。(禁)

12・20

〔空白〕(禁)

三〇 西沢静雄君 築君 一〇 望月秀一君 二〇 相馬鎰司君 二〇 西沢弥平君 二〇 相馬敏治君 二〇 白居佐登美君

二〇 原田亮一君 二〇 水口象雄君 二〇 平林善弥君 三〇 臼井政衛 栄君内一五ドヒン 二〇 丸山文一郎君 二〇

西沢福治君 三〇 望月義美君 融君 二〇 原口要君 三〇 西沢本衛 永一君 二〇 小岩三明君 二〇 竹岡喜男君

明治四四年(一九一一)

明治四四・四五年（一九二一・二二）

二〇 寺島昇君 二〇 白井潔君 四五〇（禁）

等々力 望月 亀久 44年12月20日 除名

〃 望月大丈夫 〃 除名

三枚橋 矢口 五郎 〃 大正元年死亡

〃 深沢弥惣治 〃 除名

〃 望月 要治 〃 除名

矢原 竹岡喜三雄 〃 除名

〃 白井 積善 〃 除名

穂高町 井口倫太郎 〃 除名

細萱 大谷 沢好 〃 除名

○明治四五年

1・7

明治四十五年

例会を研成義塾に開く。会する者数名。幹事の選挙を行ふ。原田幸自由氏・水口象雄氏当選後、原田氏のオルガン演奏にて讚美歌を唱ひ、雑談に時を移し、十一時散会。（禁）

2・4

例会を義塾に開く。午後八時半より会する者八名。水口幹事の開会の辞、井口氏の思想界の三大革命、地動説、進化論、宗教の比較研究に付き現今の清国其他の思想界を語られ、丸山文一郎氏東京陸中漫遊より得たる感話、木下尚江氏の近世の科学は一より百千万億迄教へ、零と無数に付き教へず、此の零と無数とは神なり、及黒光女史の将さに死せんとして神の力を知れり、及我精神界の振はざるを語られ、相馬綾雄君創世記を読みて何故神は智慧の木の実を作りしやに付き疑義を質され、水口氏善をなすに付き世の迫害を見て失望ありて困るとて実験談をせられ、原田氏境遇に捉へらるゝ事なく、固き信の上に立ち、俗事に従事して超俗的にある者は幸福なりと説かれ、清沢庄市氏正道を踏むに付きて自己の無知なるにも関せず、踏み迷はざりし実験を語られ、新入会者望月太郎君の照介及同君の挨拶あり。茶菓を喫し、真面目に各自の実験を語り、散会せしは十二時なりき。（禁）

2・5

尋常小学校（東穂高）に対する回答 生徒男廿五、女廿一（備）

2 西沢静雄君昇天せらる。葬式はキリスト教式にて行ふ。水口象雄氏禁酒会代表として会葬せらる。御悔として金一円同氏の家族に送る。(禁)

3・3 例会を聞く。直ちに雑談に入り、井口先生に向つて質問の矢をはなつ。各自の疑問は解かれ、茲に一種云ふべからざる快感にみたされ、実に家族的会合なりき。午後十一時散会、出席者五名。(禁)

4・7 昨夜北穂高禁酒会紀念会に會員一同出席せし為開かず。(禁)

4・28 四十四年度報告(四十四年三月末調査四十五年四月二十八日回答)

一 創立年 明治三十四年四月

一 学科 普通学

一 修業年限 制限なし

一 学級数 一

一 教員 男一 女〇

一 生徒 男二五 女二一

一 設立より前年度迄卒業生 男二五 女一〇

一 本年度卒業生 男五 女二

一 本年度授業料総額 百八十五円三十銭

一 同経費総額 三百六十五円

4・30

裁縫科授与式を行ふ、来賓丸山文一郎君。

研究科第一年修業生 26・11・28、望月千歳 27・5・14、矢口志女の

第四学年卒業生 26・5・16、望月きやう 27・7・10、西沢ちよ恵 26・4・24、荻原みつへ 27・11・10、望月さと

28・2・15、西沢喜代恵 28・12・13、臼井いく、26・8・19、望月はつゑ除く

第三学年修業生 27・3・16、井口貞 29・9・5、小口芳代 30・3・10、相馬正美

第一学年修業生 28・7・6、西沢有美 29・2・18、深沢花恵

明治四五年(一九一二)

(備)

大正元年（一九一二）

第一学年修学生 30・3・1、西沢寿江の 31・2・15、西沢滋水 31・4・17、望月定江 32・3・21、北野としゑ

合計十七人

(備)

明治四十五年度

月道 英 作・地 地・算 文・典・理

火読 英 画・農 唱 化・作

水算 漢・習 英 習・読 本邦

木道 英 文・典・理 地・作 生・画

金読 算 化・習 唱 本邦

土 漢・地 用器 英(珠)

高	補	○道	読	算	英	漢	本邦史	唱	作	用器画	農	生理	習	画	地	化	文	典	理
2	2	3	2	3	5	0	2	2	2	1	1	0	2	1	1	2	0	2	2

(備)

5・5 平林義行氏と原田幹事と二名各実験談をなし、十二時散会。(禁)

5・22 豊科警察青木部長来塾。(備)

5・24 前川忠次郎・須藤滝太郎来塾。(備)

6・12 十二日より二十三日迄農事休業、併し二週間位適當ならん。(備)

6・25 二十五日より八時始めとす。(備)

8・22 七男和七郎生る。(戸)

10・6 大正元年第一回の例会を研成義塾に開く。会する者七名。

午後九時原田幹事、我会員の多数は農業者なる故、農繁期休会せしも之れより毎月例会を開く由を演へ、休会中の所感、都会と田舎に就き小述す。丸山文一郎氏、燠炭肥料及大麦肥料に付き実験談をせられ、井口喜源治氏、乃木大将の死因世評区々なれど、

其最も大なるは知己の恩なるべし。昔は君臣義ありと云ひしが、乃木大将の明治天皇に於ける君臣愛ありとこそ称すべけれど語り。茶菓、各自実験談、時事、世界将来に就き談じ、十一時散会。(禁)

10・20
シャートル市母国觀光団員として来られたる平林弥魔雄君の歓迎会を教友、同窓両会と連合して義塾に開く。
昼の会食後記念の撮影ありて、井口氏の開辞及乃木の死より基督の死も自殺なりと称ふる者あれども、異れりとして彼れの昇天に付き説かれ、丸山文一郎氏国家財政の危機を救ふには、国民各自敬謙なる信者となり、華をさり、上下一致実力あらんかぎりの奮闘をするにあり、及乃木將軍の死は、平家の公達敦盛を討ち無情を感せし直実と同一徹なりとて、旅順役の実戦談より数万の部下を失はれし將軍の心事を推して涙以て語られ、望月直弥氏は東筑摩教友会を代表して理想の生活は名譽、富、學識、健康、樂しき家庭其他世人の望む如きものにあらず、基督と偕なるにありと語られ、武居君哲学よりの未來觀。平林君の答辭に曰く、井口師の渡米の際与へられし餞別の辭に何は成功せずとも同じ信仰の下に会するを希ふとありしに、今其希望に副ふを得しを喜ぶ。讚美歌花散り失せては、刈り入るゝ日は近し、五十三番合唱後祈禱会をす。

来会者 以上の外青柳ひさ子・西沢本衛・同弥平・久保田栄吉・清沢庄市・平林義行・望月清美・相馬綾雄・白居佐登実・斎藤茂諸氏午後六時閉会。(禁)

11・3
義塾に例会を開く。平林義行・西沢本衛・相馬綾雄三名と原田氏なり。先帝を忍び、軍隊を語り、各自実験談をなし、茶菓、十一時散会。(禁)

11・20
相馬綾雄君歩二七第八中隊に入営、及平林破魔雄君再び渡米に付き義塾に送別会を開く。先づ夕食を共になし、皆心行く迄語る。相馬君の答辭、十一時散会。(禁)

12・1
例会を義塾に開く。水口幹事と井口喜源治氏・清沢庄市氏の三名来会、各自懇談し散会。(禁)

12・8
清沢浩・同一雄両君除隊に付き慰労会を義塾に開く。一雄君事故あり、欠席す。来会者九名晚餐を共にす。自炊の飯に鯉汁にて鼓腹撃壤、時事問題の元老會議に花を咲かせ、真に家族的團樂の集りなりき。此自炊丸山文一郎・井口喜源治・清沢庄市三君の勞を多とす。(禁)

12・20
創立滿式拾青年紀念会を研成義塾に開く。

来会者貳拾四名、御客様、義塾の生徒、矢原夜話会にて五拾余名なりき。此内義塾の女教師青柳さく子氏外拾数名の若き婦人の

大正元年(一九一二)

大正元年（一九一二）

来会せられしは、本会創立時代四面楚歌裡に孤劍奮闘せしに比し、漸く根底定まり、暖かき家庭を基礎として立つに到れる表示なるを思ひ、頼母しかりき。

式次第左の如し。

君が代、開会の辞、会務の報告、会規朗読、本会の歴史、来賓の祝辞、会員の祝辞演説、余興、唱歌（聞けや主の角笛）以上。
午後八時原田氏司会の下に先づ君が代合唱ありて後、原田幹事立って開会の辞を演ぶ。曰く今宵我東穂高禁酒会創立満二十一週年記念会を営むに当り、多数の会員及御来客諸君の参集せられしは嬉しき次第なり。我が会が此地に今より二十余年以前呱呱の声を上げしより、直接社会と戦闘せし少年時代（禁酒伝道の幻灯会、夜学、芸妓設置反対運動、慈善、其他等せし時代）を経て、現青年時代（確固たる堅き岩に築かれり）に到れる過去を諸君と共に偲び、尚将来我々は社会にありて何をすべきかに付き、共に考へたしと結ぶ。次に水口幹事の会務の報告あり、曰く、先づ第一に悲しむべき報告をなさざるべからず、それは会員西沢静雄君今春肺を患ひて昇天せし事なり。会にては水口氏代表して葬儀に列し、弔慰料壹円を送れり。

其他は歓迎会二回（平林破魔雄君米国より帰郷、清沢一男・同浩二君の除隊）。送別会一回（相馬綾雄君入営）と毎月の例会のみにて、花々しき活動をなさざりしも、来る大正の新時代には、大いに奮発すべしと結ぶ。

清沢庄市君会規を朗読し、次に井口喜源治氏参会者中最古参者として立ち、本会の歴史の梗概を演べ、会員中曾て故ありて教育資金若干を寄附せしに對し、本県知事押川義則氏より木杯下賜ありしを、主義の爲理由を具し返上せしに、再下附あり、再び三度斯の如くして終に返納の新例を作りて、国の光の詳細なる記事に付き語る。其他酒を用ひざる結婚、祭礼、芸妓設置反対演説会に於ける暴漢の迫害等、社会の誤解中にありて奮闘せし創業時代の会員の元氣を語り、現今飲酒の害を医学者、道德者、爲政者は勿論一般社会に認められしも、禁酒実行に躊躇する意志弱き社会に對し、尚吾人の努力に待つもの大なるに、早々会員の元氣衰へ、如何にも老成せし観あるは遺憾なりと、燃ゆるが如き熱弁に満堂酔へるが如く、座るに骨鳴り肉躍るの概ありき。

次に禁酒の歌合唱あり、正義軍の土氣を鼓舞す。

次々望月範三君立ちて、頃日松本の某医師を訪ね煙草の害に付き学ぶ。喫煙家は肺、胃は勿論身体各部に有害なるも、殊に眼に於て甚し。先づ充血、結膜炎の原因トラホームの誘因となり進んで「ニコチン弱視、視神経萎縮となる、之れに付き面白き動物試験談あり。濠州ダーリン河畔の産馬皆盲目となりしが、他地方に行きし同血族種々無事にて、他地方より来りし馬は亦皆盲目とな

れり。此原因を調査せしに、上流に煙草の産地あり、洪水にて煙草の葉流下し、其れを食せし為なる事発見されたり。蓋し同毒素は一回〇・〇五瓦にて優に人命を奪ふに足る。其他青酸アンモニア、酸化水素等も有害なればなり。以上を聞いて同医師の喫煙を詰りしに、習慣の為禁じ得ずと、噫世人皆如斯意志弱しと断じ我等の戦ふべきを説く、次に西沢本衛君・望月直弥君の祝文朗読(別紙の)ありて教友会員寄贈の密柑茶菓を喫し、福引を開く。

東穂高禁酒会(地の塩、赤きシホ、世の光、ロソク)、政変の原因(増師蝸四)、昔は外国皆敵今は(兄弟、鏡台)、禁酒の軍勢其れ進め(ピー、ラッパ)、永き日や欠伸聞こゆる壁隣(あーうい、トウフ)等五十余本抱腹絶倒、八十の御臍皆位置を転ず。最後に讃へ歌「聞けや主の角笛」を合唱後閉会せしは午後十一時。

新入会者十名あり。此会井口喜源治氏及教友会員の勞を多とし、尚會員外相馬一雄君の密柑寄贈を感謝す。(禁)

吾が東穂高禁酒会も本日をして廿一週年の記念日を迎ふることとなりました。兎に角、かかる社会的の事業が貳拾年の長き継続をなし来つたといふ事は、容易ならぬ事でありまして、随而真に喜ぶべき価値があります。

昨年まで、毎年の記念日当夜の光景に徴しまして、今年のそれも賑賑はしいことであらうと集りし人、皆の喜びの顔色も思ひやられました、何となく「気の浮き立つ様」にも感じます。私は生憎十数日来病氣であります(と申しても全然床に就いて居りもしません、毎日出勤しては居ります)のと、其他の事情とによりまして……このうれしき会りに出席する事の出来ぬのは真に遺憾に思ひます。

されば聊か紙と筆とをもて、御祝辭を申し上げ様と思ひます。

「愛吟」中のジョンソンの詩に

木の嵩を増すが如く、伸びて必ずよき人ならず、樞は三百年を経て枯て仆れて丸太たるみ……云々……とあります。之れは勿論、人間の功なくして長命するの無益なるを歌つたものであります。

トールトキンス氏の

吾人の生命の長短は年令を以て算せず、寧ろ行為の如何を以てすべし……といつてあるのも同様であります。

然して事業とても、申す迄もなく人々によりて成さる、ものでありますれば、その事業が年々の生涯に於ける経験であります……

大正元年(一九一二)

大正元年（一九一二）

…吾々キリスト者たるものは長命ならば長命なる丈、それだけ多くの栄光を顕さんと祈り、且つつとめて行かねはならぬと思ひます！

この意味より致しまして、吾が「東穂高祭酒会」も毎度只集りまして榮会に終り……記念会も例年の如き順次と福引の賑ひとを以て終り……斯くして唯只年数の増ざり行くのみでは……余り「寂しい」様に《私は》は感じられます。

今年の「聖書之研究 クリスマス号」の内村先生の（クリスマスの意義）の末節に《クリスマスは単に嬉しいく〜といひて遊ぶべきではありません。深く考へ、深く決心し、深く感謝して、神とキリストと同胞とのために、蹶然起て働らくべき時であります。》といはれてあります！！

勿論茲に軽重はあるかもしりません……けれども、この……（先生の）御言葉の精神を移して、以て本会本年今晚の訓言と致しまして決して差支へなからうと存じます。

私も当地に遣はされました（神様に）ことは偶然でないことを深く信じまして、与へられたるその折々に於て《聖靈の御助けによりまして》出来得る限り働いて居ります！！（榮へは主にあれよ……アーメン）

今年も亦、我等の感謝すべき「クリスマス」は目の前に來つて居ります……吾等は毎年「クリスマス」に逢ひまする毎に、《感謝と決心と祈禱と》を以て新しき□來らむ一年は《上天の御冥助を祈り下して》一層価値ある働きを致したいもの……と考へます。

甚だ理屈!?がましきことを申し上げまして、諸君の興を醒せしやも計り難いのでありますが、其辺は何卒御許しを願ひまして、私の誠心のあるを所を……御くみとり下さる様御願ひ申します。

終りに諸君の上に御祝福を祈ります。

亞孟

大正元年十一月廿日

會員 望月直弥

（禁）

白金 望月 太郎 45年2月4日 除名

水口 恵 大正元年12月20日 除名

等々力 浅野 村治 〃 除名

矢原 秋山今朝雄 〃 除名

矢原 勇吉 大正元年12月20日 除名

青木花見 清沢 朋明 除名

〃 丸山 亨 除名

〃 鳥原 久雄 南洋行死亡

立足 森嶋今朝十 除名

耳塚 草間 丁 〃 (名)

○大正二年

1・5 大正二年度

第一例会を義塾に開く。原田氏と西沢本衛氏と二名来会せしのみ。故に二名俱に近日絵画研究の爲め上京せらるべき我会員西沢弥平君を訪ひ、矢原会員と共に送別会をなし、同君の前途を祝し、歌留多を遊び散会。(禁)

2・2 第二例会を義塾に開く。水口・原田・清沢庄一・同一雄四君来会。原田氏は去月二十六日結婚式を挙げられし会員西沢本衛君、同月十二日上京せられし西沢弥平君を報告せらる。従来の式を捨て、基督教式によりし西沢君の勇氣は、万人に対する不言の禁酒伝道なりし事、及其の式の旧式に比し非常に莊重なりし事を語る。吾等の結婚式は旧慣の良精神をとらへてより有意義となし、聖旨に合せざるべからずとし、其の方法を共々研究し、その他雑談茶菓を喫し、午后十一時散会す。(禁)

3・2 第三例会を開く。井口・西沢本衛・水口・平林・清沢庄一・原田・寺島の諸氏来会。幹事の改選を行ふ。西沢今朝勝君・寺島伯君当選す。後雑談に時の移るを知らず。茶菓を喫し、午后十一時三十分解散す。(禁)

3・27 大正元年度本科証書授与式 来賓丸山文一郎君 賞品卒業生へ 所惑十年 其他へ 後世への最大遺物、望月保子だけ少年訓

第三年卒業 一人 望月清徳

第二年 四人 丸山親男、小林美好、増田喜美人、浅野元次

第一年 十六人 草間丁、中沢良実、宮沢岩市、森島今朝十、三沢季雄、丸山亨、山本猛夫、鳥原久雄、清沢朋明、西沢一

八ヶ月に達せざるもの五人 片瀬喜策、鳥羽政敏、小川重春、清沢寛助、猿田竹良
二、西沢久光、小穴重高、松嶋稚光、井口源次郎、荒川ふさへ、望月保子

大正元・二年 (一九二一・二三)

大正二年（一九一三）

中途退学三人 西沢茂雄、林せつ、勝野秀樹

（備）

4・6 例会を研成義塾に開く、出席者井口先生・丸山文一郎君・西沢幹事・寺島幹事等なり。当夜穂高村より矢口豊治君・矢口貞雄君入会す。寺島君開会の辞あり。丸山文一郎君今宵二人の青年の此処に来られしは偶然にあらずと、又二人の青年に対し、訓諭的に禁酒の意義を簡単に述べられ、井口先生の面白き話あり。其の終りに、善きにも悪きにもよく馴れ過ぎてはならぬと説く。次で西沢幹事の所感あり。楽しく茶菓を味ひ、散会す。次の例会には丸山文一郎君の農事実験談ある筈なり。（禁）

裁縫科証書授与式 求賓相馬安兵衛君

研究科二年修業生一人 ○望月千歳26・11・28

〃 一年修業生五人 ○望月きやう26・5・16、西沢ちよゑ27・7・10、望月さと27・11・10、西沢喜代恵28・2・15、

臼井いく28・12・13

四年卒業生 四人 ○望月はつゑ26・8・19、井口貞27・3・16、小口芳代29・9・5、相馬正美30・3・10、

三年修業生 六人 ○深沢花恵29・2・18、山田つるゑ28・4・22、丸山喜代恵28・10・26、等々力幸29・7・18、

望月千江野30・2・28、西沢有美28・7・6

二年修業生 七人 西沢寿江の30・3・1、望月定江31・4・17、西沢滋水31・2・15、須沢芳美31・5・10、

北野としゑ32・3・21、○望月とし恵30・10・8、原田ますみ

一年修業生 四人 ○富成とめの32・4・24、望月とくとゑ33・2・21、西山多根33・2・6、北原ますみ30・9

出席四ヶ月に達せざるもの七人 小室てるを、西沢むつ、浅野千歳、山田かつへ、矢口しめの、萩原八代美、山田けさの

中途退学二人 佐野きやう、臼井六子

総計三十六人 賞品卒業生 基督信徒の慰め、其他 歡喜と希望（備）

大正二年度

月道 英画 植裁

火読 英東 唱物

水算 漢習 英本

木道英作 栽植

金読算物 唱本

土漢東英 (備)

5・4 例会を開く。出席會員水口・寺島・矢口豊治氏の三名あり。当夜穂高村より入会者二名あり。先月例会に於て、丸山文一郎君の農

5・6 事實験談あると云ひしも、不幸にして同氏の出席あらず。例によって例の如く会を終りぬ。(禁)

尋常小学校(東穂高)に対する回答。(大正元年度)(不正確也)

5・31 郡役所へ回答(大正二年四月末調査)

一、教員数 男一、女一、生徒数 男二二、女三六 本年度經常費予算三六〇円 臨時費予算一八円

二、現在使用する教科書

聖書新約全書、讚美歌米國聖書會社・教文館、光風館吉田弥平國文教科書、三省堂中村久四郎外國史教科書、神田乃武スタンダードリーダー、南日恒太イングリッシュコース、直定体英習字帖

証明書を与へたるもの

○望月 五六 明治22年1月生 自35年4月至38年3月

○平林 基宜 明治22年3月生 自36年4月至39年12月

○望月 融 明治23年1月生 自37年4月至40年2月

○小林 正樹 陸郷村 明治19年12月生 自38年4月至39年9月

○渡辺 三七 七貴村 明治23年6月生 自37年4月至39年3月

○遠藤右弥太 明治17年2月生 自35年4月至38年3月

○片瀬 与一 明治22年8月生 自37年4月至39年3月

○望月 秀一 明治16年1月生 自34年4月至36年12月

○西沢 永一 明治22年5月生 自35年4月至38年3月

大正二年(一九一三)

大正二年（一九一三）

○竹岡 喜嗣 明治21年7月生 自36年4月至39年3月

○水口 象雄 明治20年8月生 自34年4月至37年3月

○横山 重義 三田村 明治19年3月生 自36年4月至39年12月

○横山 信之 明治17年3月生 自35年4月至37年3月 39年冬期英語

○轟 宗義 明治21年10月4日生 自36年4月至39年12月

○小平 忠実 明治22年6月6日生 自36年4月1日至38年3月24日補習科卒業

○望月喜代美 明治23年8月24日生 自38年4月至41年3月

○中村 守夫 明治25年6月24日生 40年4月1日至41年3月24日一年修業41年4月1日至同年9月30日

○林 都久茂 明治17年5月25日生 自明治24年4月至36年3月満二ケ年秘露渡航（備）

6・1 農事多忙中なるを以て休会す。（禁）

7・6 例会を塾に開く。出席者僅かに三名。井口喜源治君・水口恵君・寺島伯君なり。雑談中、井口君の富士登山の談あり。後茶菓を喫

し、午后十一時半頃散会す。（禁）

8 会員多忙中なるを以て例会を休む。（禁）

休会。（禁）

10・5 例の如く開会す。井口先生・平林義行君・寺島幹事等なり。此夜米国より歸られたる片瀬与市君出席せらる。会員少数なるを以て、坐談に時を移し、片瀬君の米国の教友諸君の日常を聞き、十時半散会す。片瀬君より菓子を贈らる。（禁）

11・2 義塾に例会を開く。寺島幹事と白居易登美君との二名ありしのみ。（禁）

11・11 役場へ回答 大正元年調査

学級数二、学級一、教員 男一、女一、生徒 男二五、女三六、経費四七五円（備）

12・7 義塾に開きし処、井口先生・原田君の二名。記念会も近づきし故、今宵其の相談する筈なりしも、幹事出席せざりし為め、相談纏まらずして解散す。（禁）

12・14 臨時相談打合せ会を開く。寺島幹事・白居易登美君・平林義行君の三名出席す。来るべき記念会には各自福引を出す事となし、其

の他種々協議あり、散会せしは十一時頃なりき。(禁)

創立滿二拾二週年紀念会を研成義塾に開會す。

出席會員拾八名、其の他来賓義塾の生徒及び小学校の生徒にて四拾余名、先づ寺島幹事の開会の辞あり、曰く本会が此東穂高に二十余年前生れて、社会のあらゆる迫害を受けて屈する事なく、奮闘努力して漸やく今日に至り、其の結果現今では一般の人が酒の害を認め、飲酒家其の者迄が酒の害を唱へる様になりし為め、今では創立時代の會員諸君の様に社会的大運動なくして、平和的に且つ精神的に其の方法がなり、現社会では飲酒家益々排斥せられ、禁酒家が益々歓迎せらる様になりしと。然し未だ社会の人は酒の害を充分に認め乍らも、禁酒実行に躊躇しつあるは誠に遺憾なりと。故に未だ本会は将来彼等の為めに益々努力し、禁酒事業其他社会的事業に尽くされん事を希望し、且は今晩の会を楽しく、有益に過ごされん事を望むとなし、次に又同君の会務報告あり。讚美歌四百五十一番を合唱し、次に井口君會員中の最も古き會員として、本会の歴史を述べられ、本会の起源より創立時代の會員諸君の苦戦奮闘の有様を語られ、尚将来の希望を述べらる。実に創立当時の状況を偲べれたり、

次に上京中なる會員、西沢弥平君よりの祝辞、望月喜代美君代読せらる。又同君の会規朗読あり。終りて蓄音機の余興あり。數番にして望月範三君の薩摩琵琶歌、常陸丸あり。川窪健城流を大に發揮せらる。後又蓄音機に興を添へ、最後に元氣よく禁酒会の歌を合唱し、散会せしは午後十二時。(禁)

穂高村 矢口 豊治 大正2年4月6日 南洋行

〃 矢口 貞雄 〃

〃 根津多仁之助 〃 5月20日 大正2年12月退会

〃 矢口 熊治 〃 除名

柏矢町 富成 忠一 〃 12月20日 除名

矢原 西沢 一二 〃

〃 西沢 久光 〃 除名

八軒町 望月 正次 〃 南洋行

立足 中沢 良実 〃 除名

大正二年(一九一三)

大正二・三年（一九一三・一四）

細萱 飯沼清兵衛 大正2年12月20日 除名

// 鳥羽 政敏 // 除名

本村 小林 美好 // 除名

重柳 丸山 俊文 // 除名

中堀 松沢 美篤 // (名)

12・30 松本稅務署へ回答

一、学校の名称 私立研成義塾

一、学校設立認可の形成 私立学校令小学校類似の各種学校

一、学校使用地地番 東穂高村千八百番の一 坪数百八十一坪 地価五十九円七十三銭 本年分借地料二十四円 所有者重野茂

佐太郎(備)

○大正三年

1・4 大正三年度

第一例会を研成義塾に開く。出席会員井口・水口・寺島の三君なり。本年度幹事望月喜代美君・寺島伯君と決定す。(禁)

2・1 第二例会を開く。井口先生・望月幹事の出席せるのみ。一兩日間に於ての談話ありて、茶菓の後十一時散会す。(禁)

3・1 第三例会を義塾に開く。出席会員、井口喜源治・水口象雄・望月幹事の三君なり。水口・望月の両君、互に井口君の感話を聞か

氏は近頃禁酒会が振はない原因は、禁酒会員各々が何か欠点がある為で、亦教友会員に於ても亦然であつて、聖書を読む事が欠けて居るか、祈りが欠けて居るか、他人の為めに証をせんのか、其の反応で教友会も振はないと言はれた。種々実例を挙げて語られたので、会員は実る胸に応へ、感極つたのである。而して従来例会より以上の善き会であつた。(禁)

3・25 大正三年度証書授与式

第三年卒業生一人 小林美好 26・10・15

第二年修業生九人 中沢良実 30・6・4、森嶋今朝十 30・4・5、清沢朋明 31・10・8、西沢一二 32・1・6、西沢久光 32・

2・24、小穴重高 31・1・4、小川重春 32・5・25、井口源次郎 32・12・13、望月保子 30・12・4

第一年修業生十人 飯沼清兵エ32・3・3、望月勇31・10・31、松沢美篤32・1・2、山田広32・1・15、高橋一郎31・10・28、丸山俊文32、2・10、望月正次32・1・9、寺島満江31・7・5、望月洋34・4・1、清沢寛蔵30・5・25

出席八ヶ月に達せざるもの五人 上条静30・7・12、折井芳富32・11・10、丸山亨、有賀平門、伊藤やゑ
 中途退学五人 片瀬喜策、丸山親男、鳥羽政敏、平林光子、林 一夫

合計三十人

卒業生一人賞品 研究十年 其他 禁酒のすゝめ(備)

4・5 本日は安筑連合教友会を浅間温泉に於て開かれし為め、夜の例会を休む。(禁)

4・12 十二日より十九日迄本課一週間臨時休業。校長上京の為め。(備)

4・14 二男源次郎東穂高村の伊藤恒司妻やゑと養子縁組をする。(戸)

4・28 役場へ

大正二年度入学生 男一〇、女九 学級二 卒業生 男一、女三 在籍生 男二三、女三二

4・30 裁縫科授与式、今日平林光子渡米の為め出発。望月直弥氏甥新一病死の為め来穂。

研究科第二年修業生一人 西沢ちよゑ27・7・10

研究科第一年修業生二人 小口芳代29・9・5、相馬正美30、3、10

第四学年卒業生三人 等々力幸29・7・18、丸山喜代恵28・10・26、深沢花恵29、2・18

第三学年修業生四人 望月としゑ30・10・8、北野としゑ32・3・21、西沢滋水31・2・15、須沢芳美31・5・10

第二学年修業生三人 富成とめの32・4・24、望月とくゑ33・2・21、北原ますみ30・9

第一学年修業生一人 荻原八代美32・3・2

仮証書一人(第四年) 西沢有美28・7・6

出席四ヶ月に達せざるもの十六人、望月さと、西沢喜代恵、山田つるゑ、望月定江、青柳ひでみ、矢口くま、山田けさの、小松正女、白井いく、小室てるを、原田ますみ、浅野千歳、山田す江き、西沢むつ、矢ノ口はるみ、原田ちよゑ

大正三年(一九一四)

大正三年（一九一四）

計 証書を受くるもの十四人、仮証書をうくるもの一人、証書を受けざるもの十六、計三十一人 外に四月より入学せるもの六人 望月保子、上条静子、飯江定江、松尾はるの、小室ゆきゑ、望月ふみ恵 再合計三十七人（備）

大正三年度

月道 英 習・物 動作

火 読 英 西洋 唱 地 裁

水 代 漢 鉞 英 本邦 裁

木 道 英 画・算 動作・画

金 読 代 地 唱 本 裁

土 漢 西洋 英 作法・茶湯

（備）

5・17 役場へ

大正三年度授業料総収入 百四十二円 其他収入 二百四十二円 メ三百八十四円 經常費三百六十九円 臨時費十五円（備）

5・18 東穂高等学校へ 本年三月東穂高卒業義塾へ入学せるもの尋卒 男三、女一 高卒 男七、女三（備）

5 例会を開く筈の処、各幹事病氣の爲め出席せず。聞く処に依れば井口先生一人出席せしのみなりと。誠に御氣の毒なりき。（禁）

6 休会。（禁）

7・5 例会を開く。参会者寺島幹事・井口先生・丸山文一郎君の三名ありしのみ。先づ雑談に時を移し、丸山君の本年度麦作の実験談及稲作の予想談を聞き、散会す。時に午后十一時半、毎会斯く少数なるを誠に遺憾とす。（禁）

8 休会。（禁）

9・6 例の如く塾に開く。出席会員井口先生、丸山文一郎君、水口象雄君・望月正次君・寺島伯君之五名とす。

寺島君の開会之辞及希望、丸山文一郎君の欧州大戦争より得たる感想、優勝劣敗之思想に付語らる。次に井口先生の同じく時節柄として欧州戦乱に付其の御感想及び予想談等あり。今回の会は専ら戦争談にて持切たり。後茶菓あり、散会せしは十一時頃なりき。

（禁）

10・14 陸軍演習欠席生徒多し。八軒町に出火。（備）

10・16

十六日より十二日間農事休業。廿八日始業。(備)

10・28

宮城県若柳町小野寺正策氏来塾。(備)

11・1

例会を開きしが、幹事病氣の爲め出席する能はざりしを以て詳細なる記事を得ず。(禁)

11・1

例の如く聞く。出席会員井口先生・丸山文一郎・水口象雄・望月正次・寺島伯の五名の外、義塾の生徒五名なりき。会半ばにして會員平林義行君来る。開会の辞寺島幹事、次に丸山文一郎君の禁酒につきて青年に対する希望、井口先生は禁酒会は只に酒を禁ずるのみにあらずして、此の社会の悪風を矯正するためなりと。其の外種々の実験談及感想談等あり。最後に寺島幹事、十一月号雜誌婦女界の飲酒卅年禁酒十年間の実験と云ふ記事を照会す。即ち卅年酒を飲みて世に酒豪家と知られし人、断然と禁酒し、飲酒時代と禁酒時代との比較談なり。其の結論に厳格なる禁酒は信仰の力によると、信仰ある人に取りては禁酒がさほど困難にあらざることとを証明せり。信仰なくして永久の禁酒寛束なし。茶菓の後、雷様の遊戯あり充分の飲を尽し、十時半散会す(禁)

11・12

郡役所へ回答

大正三年四月末現在生徒数 男女別 男二九、女三七(本科男二九 女二、裁縫科女三五) 大正三年度経費総額予算经常費 四

八〇円、臨時費二五円 一ヶ月一人授業料 本科 五〇 裁縫科 三〇(備)

12・6

夜会員相馬綾雄君、今回軍隊より帰郷せられしに付き同君歓迎会を開く。

此夜晚餐を共にすべく、午后六時各会員集る。即ち井口先生・丸山文一郎君・杉山茂登君、水口象雄君、平林義行君、原田幸自由君・齋藤茂君・望月正次君・望月市重君・望月善代美君・寺島伯君等なり。寺島幹事の祈禱によりて食事をなす。互に恵まれたる此の会食を感謝せり。後二十分休憩して更に会を開き、寺島君開会の辞及び希望を述べ、次に御客様相馬君の在隊中に於ける、禁酒に対する迫害の余強行ならざりしを語り、又如何なる迫害を受ける共自らの意志さへ堅固なれば、さまで苦痛になしと、皆無言の中に或る感想を得しならん。次に丸山文一郎君時局に対する感想を述べ、且つ将来の予想を語る。次に水口君の感想談あり最後に井口先生の談ありて曰く、相馬君の話によりて、相馬君が軍隊にありて余り酒の爲めに責められし事なく、且つ至る処に於て愛されし事の所以、及び多くの人は軍隊に行く時、又は軍隊に在る中は禁酒をよく実行し乍ら、家に帰ると酒を飲むと云ふ。是は軍隊に在る中は常に気が張って居りし為、酒を飲まず、家に帰る時は大に安堵して、帰る爲め人に勤めらるゝまゝ飲むと云ふ事なり。故に吾々は斯かる時にも益々決心を固くして、之に打勝ち、最後迄良く実行せられよ、熱心に語る。後又時局談あり、

大正三年(一九一四)

大正三・四年（一九一四・一五）

丸山君と同様に先生の意味ある話ありたり。後茶菓を喫し、午後十時半、楽しく会を終りたり。

此夜相馬君より会員端絵書の寄贈ありたり。（禁）

十九日より一月七日迄新年休み。（備）

12・19
12・20

八軒町 望月 市恵 大正3年12月20日
高山 正治

青木花見 清沢 寛蔵 除名

青木花見 鳥原 五郎 除名

矢原 原田四賀蔵 除名

重野三門三 除名

萩原 重男 除名

幅下 等々力新七 除名

本村 小林 初美 除名

穂高 小川 重春 除名

片瀬 喜策 除名

柏原 枚山 次雄 除名

河上 保義 除名

下伊那飯田 小松 多門 除名

除名

○大正四年

1・3

夜八時より研成義塾に第一例会を開く。幹事改選の結果、平林義行君・寺島伯君当選す。寺島幹事開会の辞あり、次に望月喜代美君禁酒の困難を語りて、青年に対する希望を述べ、次に井口先生の例に依って教訓ある話あり。即ち日本及び日本人に在る汝の敵を誰と云ふと云ふ記事の重要な個処を照介せられ、最後に寺島幹事禁酒実験談あり。茶菓に移る。後讚美歌の合唱あり、充分の歓を尽し、午後十一時散会す。（禁）

1・24 二十四日より二月三日迄寒中休み。(備)

2・7 夜八時頃より研成藝塾に第二回禁酒会開催。来会者数名。新任平林幹事の開会の辞を兼、本会の希望を述べられ、後井口先生の訓話あり。後茶菓、雑談に時を送り、十一時頃散会せり。今宵は積雪多、加へて寒氣中々に強き為め、出席少なかりき。(禁)

2・18 午後三時頃より浅川軍一水車屋にて負傷翌日死す。(備)

3・7 例会を催す。雨降にて道路最も悪しき時なりしにもかゝらず、出席者意外に多く、先ず平林幹事開会の辞あり。寺嶋伯君の禁酒に關する話しあり。井口先生の禁酒に付きての訓話あり。後茶菓、雷様の余興あり閉会は十一時少々後なりき。(禁)

3・27 大正参年度授与式

式順序

一、君が代 二、祈禱 三、学事報告 四、証書授与、五、螢の光 六、祝辞 七、来賓祝辞 八、仰げば尊し 九、卒業生答辞祈禱 十、神共に居まして

来賓 相馬安兵衛氏、望月喜代美氏、寺島伯氏

午后同窓会 幹事 望月喜代美、水口象雄

卒業生(本科三年) 四人 清沢朋明31・10・8、井口源次郎32・12・13、望月保子30・12・4、小川重春32・5・25

二年七人 松沢美篤32・1・2、高橋一郎31・10・28、山田広32・1・15、望月勇31・10・31、望月正次32・1・9、丸山亭

△31・6・19、丸山俊文32・2・10

一年十七人 杉山次雄33・12・20、等々力新七33・10・7、本郷常次32・7・1、細萱復司33・10・28、小口曠義32・11・23、

山崎亮衛32・9・23、小平重雄34・1・15、一木圭吾32・9・18、高山正治33・2・25、小林初実32・8・18、重野三門三

34・4・21、細萱峯芳32・9・14、内山定吉33・2・14、井口喜三郎34・12・6、荻原重男34・9・18、望月文雄32・11・13、

上条静△30・7・12

中途退学者二人 富成忠一33・6・15、川上保義32・8・13

出席八ヶ月に達せざるもの五人 浅野忠生、黒岩正子、清沢貢、西沢久光、西沢二二 在籍三五 男三二 女三(備)

4・1 入学式。齋藤 茂・望月義美・伊藤豊作三氏来塾。(備)

大正四年(一九一五)

大正四年（一九一五）

4・4 例会を開く。来会者、塾生及び教友、先生と十数名。寺嶋氏の開会の辞、井口先生の飲酒の害に付ききての御話しあり。平林幹事の感話、終はって茶菓余興はじゃんけんにて、一口話をなす。散会せしは十一時頃なり。実に恵まれたる集りなりき。（禁）

4・11 日曜、昭憲皇太后御一年祭に付儀式挙行。（備）

4・25 女子同窓会を開く（日曜）。前日午后より準備、出席者二十四人。外、会費（二十銭）出だせるもの二人、計二十六人。

食物 ゴモク寿し、馬鈴薯ノリマキ、ギセイ豆腐、牛肉の吉野煮

買物 七銭人参、十銭干瓢、三十二銭椎茸、七銭五厘ウス板、二銭食塩、二十銭竹の子罐、十九銭五厘本海苔一文半、七十二銭五厘三ボン二斤半、四銭ワリパン、十銭五厘醬油七合、六銭酢四合、二十二銭五厘鯉節、二円十三銭五厘一円牛肉、六十五銭米四升五合、二十八銭玉子二百匁、三銭酢、五十銭豆腐

4・26 小口芳代 開会の辞、一月より十二月の歌、福引二十八本寄付、相馬正美閉会の辞、今夜望月清治氏来る。（備）

4・26 午后、林盛次氏来塾。（備）

尋常学校へ報告（大正四年三月三十一日調査）

在籍生 男二八、女三〇

大正三年度入学生 男二十一、女十人

同 卒業生 男三人、女一人

学級数 二 教員男一 女一 （備）

4・30 裁縫科式年修業生四人

◎小口芳代29・9・5、相馬正美30・3・10、△西沢喜代恵28・2・15、△望月さと27・11・10

卒業生

2	31・5・10	須沢	芳美
1	30・10・8	望月としゑ	
3	31・2・15	西沢	滋水
4	32・3・21	北野としゑ	

三年修業生 七人

望月ふみえ 32・9・18、富成とめの 32・4・24、望月とくゑ 33・2・21、望月定江 31・4・17、◎寺島満江 31・7・5、飯沼定江 32・12・3、△小松正女 28・6・10

二年修業生 二人

荻原八代美 32・3・2、◎西沢むつ 32・3・31

一年修業生 一人

山田す江き 33・8・5

証書を受くるもの十八人 受けさるもの十二人

出席四ヶ月に満たざるもの九人 西沢ちよゑ、等々力幸、丸山きよゑ、北原ますみ、長沢筆子、矢ノ口はるみ、小室ゆきゑ、西沢有美、白意志つ江

退学者一人 松尾はるの

本年四月より入学せる者 二人 望月保子、二本もとへ

在籍合計 三十人(備)

大正四年度

月道 英 作 地 文

火読 英 西歴・習 唱 生 裁

水漢 算 英 図 本 裁

木道 英 習 地 化

金読 算 生 唱 本 裁

土漢 英 珠算(用器画)(備)

5・2

例会開催。農繁期に入り為めか、来会者少なし。先生と外教名。午後九時少々後開く。平林幹事の開会の辞、井口先生の御話ありたり。毎月たゞ一回の集り故、各人の感想を語るは最もたのしく、最も有益なる事故、次回よりは各語り合ふやうにとの注意あり

大正四年(一九一五)

大正四年(一九一五)

て後、茶菓。十一時少々後散会せり。(禁)

5・15 伊藤豊作氏等出発す。(備)

6・30 郡役所へ回答 現在調

教員 男一 女一 生徒 男三二 女三一

經常費予算 五百四円

臨時費 廿五円(備)

6 例会開催、来会 名。平林幹事は都合悪しき為め出席せず。(禁)

7・4 例会を開く。来会者八名。平林幹事の開会辞と共に、人間には信仰心は必ずある者、即ち人類の通有性である事を実例を引きて語

る。後井口先生の此度の欧州戦乱は、独逸の横暴きわまりなき結果なる事を陳べられ、例を引き、云ならば、子女が山に登りて、あたりの風景を眺めて居る処え、乱暴なる青年が、ものも云はずに、打ちつゝあるのを、又、それを止めんとしたるものにも、其中間にならぬ、ものは、打つと云ふて、死にいたらしむると同然なる行為にて、其暴威を振うむ、又甚だきなりと、聴者を、感激せしむるやう語られたり。雷様の余興あり。茶菓後散会、十二時半頃なりき。(禁)

8・1 例会を開くべきなれど、目下養蚕の最中にて会員諸君の出席を気づかい、例会を見合はせたり。(禁)

9・5 例会を開く筈なるも、農蚕の繁忙なる期節故、休会せり。(禁)

10・3 本会例会を開くべきなれど、会員諸君も繁忙にて、出席少なき事ならんと思ひ休会せり。(禁)

10・17 十七日より二十八日迄農事休。(備)

11・7 例会を義塾に開き、会員諸君 []。(禁)

11・30 三男喜三郎東穂高村の望月秀一、妻よし江と養子縁組をすと胸襟を開いて談合し、十一時頃散会せり。(戸)

12・5 例会を開く。来会者八名、先生の希望演説あり、寺嶋伯氏の感話あり。一同茶菓を頂き、来たるべき記念会の下相談を次日曜日に

なす事となし、十一時散会せり。(禁)

12・20 本会記念会を義塾に開らく。来会者約五拾名程。八時開会、井口先生・丸山文一郎氏・寺嶋伯氏・望月喜代美氏・水口氏演説、感

想談等あり。福引の余興、茶菓あり。十二分の飲をつくして散会せり。十一時半頃なりき。(禁)

正 誤 表

九八ページ

(誤) 11・7 例会を義塾に開き、会員諸君 []。(禁)

11・30 三男喜三郎東穂高村の望月秀一、妻よし江と養子縁組をすると胸襟を開いて談合し、十一時頃散会せり。(戸)

(正) 11・7 例会を義塾に開き、会員諸君と胸襟を開いて談合し、十一時頃散会せり。(禁)

11・30 三男喜三郎東穂高村の望月秀一、妻よし江と養子縁組をする。(戸)

矢原 白井 寿英 大正4年12月20日 除名

〃 西沢 守一 〃

〃 西沢 清実 〃

〃 藤沢 覚 〃

〃 矢口 末貞 〃

〃 深沢 喜内 〃

〃 丸山 輝一 〃

細萱 細萱 復司 〃

穂高町 井口源次郎 〃

〃 島田 茂司 〃

白金 相馬 虎男 〃

○大正五年

本会例会を開く。(禁)

本会例会を開く。(禁)

例会を開く。来会者、井口先生・水口象雄君・高山君・杉山君・平林幹事の六名。平林幹事の開会の辞、水口氏・井口先生の感話

あり。十時頃散会せり。(禁)

大正四年度本科授与式

順序

一、君が代 二、祈禱 三、学事報告 四、証書賞品授与 五、仰げば尊し(本科生) 六、祝辞 七、修業生送辞(細萱復

司) 八、答辞(卒業生) 九、神共に居まして(裁縫生) 以上

来賓無かりき 裁縫生十人 二年総代・杉山次雄 一年総代・武井久男

卒業生一人・丸山俊文 32・2・10

大正四・五年(一九一五・一六)

大正五年（一九一六）

二年修業生八人 杉山次雄³³・12・20、細萱復司³³・10・28、等々力新七³³・10・7、高山正治³³・2・25、小林初実³²・8・18、荻原重男³⁴・9・18、望月文雄³²・11・13、井口喜三郎³⁴・12・6
一年修業生十二人 武井久男³²・4・8、藤松誠³³・5・9、大谷勇³³・8・10、嶋田茂司³⁴・3・27、臼井喜代一³³・5・19、篠本良一³³・7・21、等々力古吾朗³⁴・2・19、西沢徳³⁴・3・14、丸山要³³・10・26、丸山輝一³⁶・1・16、清沢汲³³・5・6、大島晁治³³・9・5

右 二十一人

○中途退学三年二人 望月正次、松沢美篤 二年三人 本郷常次、小平重雄、浅野忠生 一年六人 清沢眞、飯沼治、古幡孝夫、中山治、花村幸男、耳塚文人

○出席八ヶ月に達せざるもの 二年一人 二木圭吾 一年二人 唐沢隆治³⁴・2・18、中島重潤³⁴・2・18

総計 三十五人

○賞品 平民の福音 卒業生 平民の福音 キリスト略伝 定価十銭

○其他生徒へ角ペン二個 代価二銭五厘

○午后同窓会 出席者 水口象雄、望月正次

○証書を受くる者にて欠席せるもの 大島晁治、藤松誠、大谷勇、篠本良一（備）

4・2

4・23

本日女子同窓会出席者 二十八人

山田未喜、小室ゆきゑ、白意志づ江、西沢ありみ、須沢芳美、北野としゑ、西沢むつ、望月京子、小口芳代、西沢千江恵、相馬正美、杉山あさ江、望月とくゑ、山地君江、丸山ゑん、二木もとゑ、伴ひろみ、矢ノ口春実、望月定江、富成とめの、西沢しげみ、望月保子、伊藤きみゑ、寺島満江、等々力みす子、小川小幸、池田をまさ、井口貞 二十八人
会費二十銭 △ゴモクザし、ウスイタツ、ミ、渦巻卵子、薩摩芋キントン、蓮根の落花生あへ

○四銭五厘人参一わ、四十銭椎茸六十奴、八銭ウスイタ一わ、廿八銭サツマイモにめめ、十八銭筍かん、八十七銭三盆三斤、

十銭五厘ス七合、拾七銭黒ダマリ一升、四銭ワリバシニわ、九銭干瓢、メ二円二十六銭俵屋

三十三銭蓮根、拾銭豆腐二丁、一円二十七銭卵九百匁、貳拾銭鯉節、拾五銭落花生一斤、拾銭葛の粉、六拾九銭上米五升、

拾銭胡麻油、六銭手拭、藤屋へ赤鍋の礼

須沢芳美開会の辞、小口芳代大正琴 十字架トヘル 寺島満江の琴等。(備)

4・25

伊藤蓋氏来訪。諏訪郡茅野近在安国寺生、上伊那朝日学校在勤(平出)、明治四十三年師範出。

昨年来訪原重治氏(二十九歳)の友人也。其話大阪北区西権現町財団法人救護会(特殊部)金子弥総46・7。妻子静岡にあり。越后生れのよし。(備)

4・29

(土曜)裁縫科授与式

一、君か代 二、祈禱 三、学事報告 四、証書及賞品授与 五、螢の光(本科及四月入学の裁縫科生徒) 六、仰げば尊し

(裁縫科生徒) 七、祝辞及祈禱(望月保子) 八、五十三番(恵の光は) 以上

研究科一年 五人 ○須沢芳美31・5・10、西沢滋水31・2・15、北野と志多32・3・21、青柳秀美30・1・22、丸山喜代恵28・10・26

卒業生 六人 望月保子30・12・4、望月定江31・4・17、寺島満江31・7・5、富成とめの32・4・24、望月ふみ多32・9・18、望月とくと多33・2・21

第三学年 四人 ○二木ともへ32・9・5、伴ひふみ32・7・10、西沢むつ32・3・31、矢ノ口春実31・3・15

第二学年 一人 山田す江き33・8・5

第一学年 二人 ○小室ゆき江33・11・29、山地きみ多36・2・22

出席四ヶ月に達せざるもの 七人 相馬正美、白喜志つ江、小口芳代、長沢筆子、丸山えん、荻原八代美、伊藤きみえ

四月新入学生 四人 小川小幸、等々力みす子、杉山朝榮、池田をまさ

証書を受くる者 十八人 受けざる者 十一人

合計在籍 二十九人(賞品 平民福音)(備)

大正五年度

大正五年(一九一六)

大正五年（一九一六）

月道英作 植物

火読英 東洋唱化習

水漢算 図英 日本

木道英 植習物

金読算 日本唱 東洋

土漢英 珠算 (備)

5・7 例会を開く。(禁)

5・11 野々村亭南安曇郡長、望月亮二氏村役場書記の案内にて参観に来る。(備)

5・12 伊藤松太郎外一名家へ来る。(備)

5・14 体格検査書を郡役所へ送る。田中ふじゑ氏家へ訪問。(備)

5・16 十六日より三日間穂高神社遷宮式にて休業。(備)

5・23 東穂高役場へ回答

大正五年 学級数二 生徒男三六 女二九(現在) 五年度入学者 男二十一 女四 四年度卒業生 男一 女六(備)

6・4 例会を義塾に開きぬ。(禁)

7・2 本会例会を義塾に開催せり。(禁)

7・26 二十六日より八月廿日迄暑中休業。青柳姉二十六日午前十時半の汽車にて帰松。(備)

7・27 望月直弥君来訪。西沢弥平氏、糸魚川海投身の報告也。(備)

8・6 例会を開くべきなれど、農家一般忙はし^{イラ}期節故、会合を見合はせたり。(禁)

8・20 郡役所へ回答

大正五年四月末日現在生徒数 男三六、女二九 経費予算 經常費五百四円 臨時費二十五円(備)

8・21 始業。養蚕多忙出席者少なし。青柳姉少々下痢、残暑はげし稽古午前だけ。(備)

8・31 天長節。稽古三時間、出席生徒七人、他の学校は休み。朝雨、倫太郎上京。源次郎荷車をひきて明科まで送る。(備)

9・3 本会を休む。都合ありて。(禁)

10・1 例会を開く。(禁)

10・14 十四日より二十五日まで秋季農事休業。今年雨多く、収穫半に達せず。松本に博覧会あり、小規模のよし。(備)

10・25 高田格司氏来訪。(備)

10・31 天長節、出席生徒十一人、パン二つ宛与ふ。(備)

11・5 例会を開く。(禁)

12・3 例会を開く。来会者十名程。平林幹事の開会の辞あり、井口先生の禁酒実験談ありたり。御話によれば今回貝梅に分家せらるゝに付き、旧慣を打破して絶対禁酒のもとに家を建てられ、四囲の悪評をも顧慮するなく、所信を貫徹せられしとの事、実に痛快なる御話しなりき。後雷様の余興あり、十一時頃一同散会せり。(禁)

12・20 廿五年紀念会を開く。寺嶋伯氏、病気の為め相州小田原へ行かれ不在故、平林幹事主となりて勤めたり。八時半頃一同着席、平林幹事の開会の辞あり。水口君の会規朗読、平林幹事の会務報告あり、井口先生の本会の歴史を語る。来賓としては、重柳轟田実氏の真面目なる禁酒者の出でられし事と、本会の為め助力せられし事を述べられ、後茶菓、余興福引一同讚美歌、十一時半頃散会。出席者六拾二名程なりき。(禁)

矢原 西沢 徳 大正5年12月20日

南洋行

穂高町 小平 重雄 //

狐嶋 山崎 亮衛 //

仲之郷 田中 茂喜 //

柏原 望月 満雄 //

田中 伊藤 栄雄 //

重柳 臼井素慶次 //

// 轟 田実 //

// 渡辺 捨重 //

(名)

大正五年(一九一六)

大正六年（一九一七）

○大正六年

1・7 本会例会を開く（禁）

2・4 例会を開く。来会者拾名程。九時開会、平林幹事の開会の辞あり、会員諸君の感想談あり、後井口先生の養老の淹は酒にあらずして礦泉なりとの御話あり。茶菓後十一時頃散会せり。（禁）

2・11 紀元節。（備）

2・13 東京池袋の人河内捨松氏来塾。一場の話をなす。米園談なり。（備）

2・14 礫山の祖母まき子葬送、年八六。（備）

2・15 夜、望月千江野氏四十九日の法事に追悼会に行く。（備）

3・4 例会を義塾に開く。（禁）

3・21 犬養木堂、植原悦二郎ら穂高劇場に政談演説をなす。（備）

3・23 寺所の人、熊倉の曾根原弥太郎を入学せしめたき由云ひ来る。（備）

3・28 本科証書授与式

順序 一、君が代、祈禱 二、学事報告 三、証書授与、賞品授与、告辞 四、仰げば尊ぶし 五、祝辞、送辞（等々力古吾朗）
答辞（細萱復司） 六、神共にいまして

卒業生七人 在籍九人 細萱復司、高山正治、荻原重男、望月文雄、等々力新七、井口喜三郎、相馬和雄、△武田政一、△勝野忠雄

第二学年六人 在籍九人、等々力古吾朗、白井喜代一、大島晁治、丸山要、西沢徳、丸山輝一、△大谷勇、△山崎亮衛、△中島重熙
第一学年十九人 在籍廿五人 田中茂喜、望月満雄、小平重雄、伊藤栄雄、手越忠重、清沢等、深沢操、相馬広、望月与、越原重義、山本義政、黒岩毅、小穴英雄、中沢愛、鳥羽嵩、深沢喜内、小林平三郎、島田誠一、井口平四郎、△高山忠勝、△丸山良次、△勝野千秋、△木村進、△平林いさみ

中途退学 茂多井吉次

在籍四十三人 内中途退学一人 出席八ヶ月に達せざるもの十人 八ヶ月以上三十二人 賞品 卒業生基督教問答 修学生禁酒

の勧め(備)

4・1 例会を義塾に開く。(禁)

4・9 西沢永一君追悼会。教友出席者、斎藤茂、白居佐登実、西沢今朝勝、望月義美、丸山文一郎、水口象雄、平林義行、清沢庄市、及自分。(備)

4・11 水曜、夜穂高劇場に松井須磨子の復活を見る。同行者、青柳姉・相馬正美・望月京子・同和子・同潔子。(備)

4・20 衆議院議員総選挙。

東穂高小学校へ回答 大正五年度統計

学級二、教員男一、女一 生徒本科 男43、女1 裁縫科 女35 入学者 本科 男27、女1 裁縫科女15 卒業生 本科

男7 裁縫科女3(備)

4・21 午后、内村先生講演に会すべく下諏訪へゆく。同行者、平林義行氏。二十二日午后九時半頃帰る。内村先生より二円寄附。(備)

4・24 火曜、女子同窓会出席者三十二人

北野としゑ、寺島満江、須沢よしみ、望月とくゑ、望月保子、高山みつの、伴ひふみ、平林いさみ、青柳とみ、小川小幸、日岐小かつ、二本きみへ、白沢恒子、藤田みかへ、西沢滋水、西沢むつ、白意志づへ、荻原稚子、小口芳代、富成とめの、小穴貞恵、望月志げの、佐野としゑ、伊藤きみへ、相馬藤美、望月京子、望月定江、宇留賀よしへ、等々力幸、中島なつ、矢口みさ子

会費を出して出席せざりしもの 相馬正美、望月としゑ、望月ふみゑ。三十四人

会費二十銭 じもくずし、薩摩芋羊羹、筍の甘煮、蓮根のさらさびしほあへ

買物俵屋より三円九十四銭六厘 十二銭酢八合、三銭食塩、四十九銭六厘鯉ぶし、一円四十三銭三盆一貫匁、四十八銭小椎たけ八十匁(二十匁アマル)、十銭ウス板一わ、五銭ワリバシ二わ、十九銭角天十本、九十七銭五厘蓮根一メ五百匁、四銭人參二十匁、三十六銭サツマイモ二メ匁、十二銭干瓢(内蓮根三十二銭かへす)、外五十銭木炭、一円二銭米六升、九十一銭筍二十六銭醬油七合、三十銭卵二百匁、合計六円九十三銭六厘

須沢芳美開会の辞 寺島満江の琴、小口芳代のみのり琴、言葉つげ等、六時頃閉会。伊藤きみ江、等々力の親類にとまり家

大正六年(一九一七)

大正六年（一九一七）

より使怒りて来る翌朝分明す。（備）

4・28 初雷す桃万開。（備）

4・30 裁縫科証書授与式

順序 一、君が代 二、祈禱 三、学事報告 四、証書賞品授与 五、告辞 六、仰げば尊し 七、祝辞祈禱（西沢むつ）

八、神共にいまして 其他生徒バン二個二銭五厘づゝ 本科出席生徒男十九、女二

研究科二年二人 31・5・10 須沢芳美 32・3・21 北野と志ゑ

研究科一年六人 30・12・4 望月保子 31・4・17 望月定江 31・7・5 寺島満江 32・4・24 富成とめの 32・9・18 望

月ふみゑ 33・2・21 望月とくゑ

卒業生三人 32・7・10 伴ひふみ 32・2・31 西沢むつ 34・1・2 青柳とみ

第三年八人 34・9・1 〇杉山朝榮 33・8・5 山田す江き 34・1・28 白意志づ江 34・8・24 小穴貞恵 35・1・1

二木きみ江 35・1・7 等々力みす子 34・4・3 小川小幸 35・3・24 白沢恒子

第二年二人 33・11・29 小室ゆき江 36・2・22 〇山地きみゑ

第一年二人 36・12・10 〇宇留賀よしへ 36・8・28 中島なつ 以上二十三入

出席四ヶ月に充たざるもの 研究科三年一人 相馬正美 研究科二年二人 西沢滋水、丸山喜代恵 研究科一年三人 三枝た

けよ、白井きみゑ、二木としゑ 第四年二人 矢ノ口春美、二木ともへ 第三年二人 山田たけ、荻原八代美 第一年一人

池田をまさ 退学一人、矢口はるの 合計十二人 又計三十五人 四月入学生七人 総計四十二人

四月三十日欠席（証書をうくるものにて）北野としゑ用事、寺島満江病氣、富成とめの用事、望月ふみゑ無断、伴ひふみ病氣、

山田す江き無断、小室ゆきゑ無断、宇留賀よしへ同、中島なつ同

賞品 禁酒のすゝめ （備）

大正六年度

月道 英 習 代 動

火 読 英 西 洋 唱 用 器 裁

水漢 幾作英 鉞裁

木道 英画代 動

金読 幾習・法制 唱 西洋裁

土漢 西洋英 珠

道二 漢二 読二 幾二 代二 西洋二 英五 鉞一 動二 唱二 画二 珠一 作一 習二・一 法制一 二八 (備)

5・6

例会を開く。来会者五名。平林幹事の開会の辞、白井須慶次氏、小平重雄氏の感想談あり、後井口先生の御話ありたり。曰く、近頃味噌かき期節に当りて食塩大欠乏を来たし、他郡にて味噌の腐敗する事夥しきとの事、是に付きても我々は地の塩となりて、我々は働きたきものなりとの御話ありたり。茶菓後十一時散会せり。(禁)

6・3

例会を開く。来会者六名程。九時開会、平林幹事の開会の辞あり、先生と外に三名程の感話あり。茶菓、十時半頃散会せり。(禁)

6・5

郡役所へ回答。大正五年度収入惣額 授業料二百二十六円八十銭 其他収入三百五十四円廿銭 同年度支出惣額 經常費 五百五十六円 臨時費二十五円。(備)

7・1

空白 (禁)

7・25

二十五日より八月廿日迄暑中休業。例年七月中稽古のところ、今年養蚕の景気すばらしく、人足不足。生徒出席者四五名にすぎず。故に廿五日より休むこととす。(備)

8・22

手塚縫藏氏来塾、共に礫山館訪問。(備)

9・1

きく子入学す。(備)

9・2

西沢達司氏より、盗食につきて詰問の手紙来る。(備)

9・6

六日より午后稽古す。(備)

10

三日より十六日迄一週間ミンシシ講習

出席者、青柳さく、小口芳代、望月保子、相馬正美、二週間会費総計一円宛 須沢芳美、望月とくゑ、丸山きよゑ、寺島満江、

青柳とみ、一週間会費三十銭宛。(備)

10・17

慰勞会。(備)

大正六年 (一九一七)

大正六・七年（一九一七・一八）

10・18 青柳姉松本へ帰る。午前十時五十七分。（備）

東京四谷算筒町七九坂田祐君来る。午后五時二十二分の汽車にてかへる。義塾にて祈禱会をなす。秋田の人教導団に入りて士官となり、日露戦争に行きて奉天に戦ひ、戦争中も聖書の研究を読みつゝ戦ひ生き残りたれば、残年を神様の為めに用いんと欲し、バプテスト派の中学の四年に入り（年三十）、高等学校を経て、大学の文科を出で（哲学、心理学、教育等）、目下バプテスト派の中学の校長たり。今年四十歳、結婚して十二年未だ子なし。（備）

10・20 望月田鶴野東京にて病死。（備）

10・24 和合与三兵衛君来る。（備）

10・28 重柳臼井寿慶治氏の家に行く。同日其兄嬢来る。（備）

10・29 二十九日より始業す。此日朝一番にて青柳氏帰郷す。（備）

11・24 土曜、松川村一柳勝一氏外一人来訪、礫山館を訪はん為なり。（備）

11・25 松岡弘氏（温村下長尾の人）、当時温明小学校（在横沢）奉職、家より通勤、学校まで凡一里、家は一日市停車場より凡半里。諏訪の人小川久喜氏二人来訪。温明に小泉西塩田の人にて滝沢万二郎氏あり、下諏訪研究読者会に出席せる人なり。南安の郡長は岡

田タケクマと云ふ人のよし。（備）

12・20 柏原 等々力古吾朗大正6年12月20日

八軒町 横内 三直 //

// 望月 条市 //

// 清沢 清志 //

三枚橋 相馬 和雄 //

穂高町 望月 与 //

矢原 西沢 柳男 //

踏入 山本竹千代 //

○大正七年

（名）

1・1 出席者少なし。(備)

1・8 八日より始業(十二月二十九日より休み)。(備)

1・17 松本救世軍小隊長士官大尉片山清見(福岡生れ岡山育ち、家は信者)・伊藤八重外兵士三人来る(伊藤は会津の人、家仏教徒の爲め家を追い出され、十日間断食祈禱することありと云ふ)。(備)

1・19 望月才一郎鎌倉にて死す。(備)

1・20 丸山玉次郎氏来る。夜研究会をひらく。出席者水口・平林及余、ヨブ記をはじめ。(備)

1・22 望月一郎一寸来塾。(備)

1・23 二十三日より二月三日まで寒中休み。(備)

1・24 西沢ちよゑ来る。(備)

3・7 救世軍山室大佐、高木參軍、末吉上田女大尉、片山松本女大尉、小林宇都宮末吉大尉来る。柏矢町停車場に迎へ、義塾にて昼飯、二時より穂高劇場に講演会。来聴者約千名、五時の汽車にて松本行。(備)

禁酒会主催にて、穂高劇場に於て午后二時より救世軍山室大佐以下の講演あり。来会者約一千人、山室大佐は昨年欧米視察の際の旅行談及宗教談あり、同行者在前橋高木聯隊長・松本片山女大尉・上田末吉女大尉・宇都宮小林大尉なり。救霊カードに署名せるもの五十名以上、盛会なりき。(禁)

○三月に入りて弔悔状を送りたるものは

父を失へる高山正治君、祖父を失へる寺島伯君、同上望月満雄君へなり。

○大正七年度会長平林義行君、副会長水口象雄君、各部落の幹事は左の通り嘱托す。

矢原 白居佐登実君、三枚橋 相馬和雄君、八軒町 高山正治君、柏原 等々力古吾朗君、青木花見 清沢庄一君、細萱 細萱 復司君、仲之郷 田中茂喜君、白金 水口象雄君、等々力 望月七八君、両町 小川重春君、重柳 丸山俊文君、狐嶋 山崎亮 衛君、田中 伊藤栄雄君。(禁)

3・12 和田小学校赤羽王郎氏、高一生徒十六人を伴ひて来る。礫山館を見てかへる。(備)

3・21 東筑東川手学校久保田訓導並に矢口岩保氏来る。(備)

大正七年(一九一八)

大正七年（一九一八）

3・24 青柳郵便局長簡易保険勧誘に来る。（備）

3・25 西沢明花氏来塾。（備）

3・28 証書授与式

一、君が代、一、祈禱、三、学事報告、四、証書授与賞品授与、五、螢の光、六、祝辞、七、送辞答辞、八、神共にいまして
賞品 長尾半平著「禁酒」 卒業生には其外 「禁酒美談」 裁縫生徒には二錢五厘つつ長饅頭 在籍三十八人
卒業生 二人 等々力古吾朗、白井喜代一

第二学年 十一人 田中茂喜、望月与、伊藤栄雄、望月満雄、越原重義、山本義政、島田誠一、清沢等、中沢愛、牛越忠重、井口平四郎

第一学年 十三人 望月朝一、白井和喜治、丸山千里、丸山武敏、望月条市、福嶋兼次郎、等々力梧六、西沢清実、白井孝志、平林俊雄、小林達郎、佐野としゑ、荻原稚子

中途退学 八人

第三学年 二人 中島重瀬、丸山要

第二学年 三人 小平重雄、鳥羽嵩、中村今朝人

第一学年 三人 富成勇、西沢守一、相馬虎男

出席八ヶ月に及ばざるもの四人

第二学年 小穴英雄

第一学年 山本竹千代、平林竹肥虎、曾根原弥太郎

答辞 等々力古吾朗 送辞 田中茂喜

第二学年総代 望月満雄 第一学年総代 丸山千里

午后同窓会 会費五錢 出席者三十二人 蓄音機の余興あり盛会 午後二時開会（備）

4・15

太田継吉妻かよ葬儀につき一日臨時休業。青柳姉病氣欠席。

望月直弥君病氣大名町斎藤病院入院につき、五十錢づゝ見舞をおくる。井口・水口・丸山・青柳・平林・西沢本・白居佐・望月喜

代・原田の九人。(備)

4・17 種痘、トラホームの件につき、役場より等々力貞一氏来る。(備)

4・18 望月ひさ子東京より帰る。今日京子火傷、大町南部氏に托し薬をとりよせる。(備)

4・19 東穂高小学校新任校長竹内宣守氏来塾。(備)

4・20 日曜女子同窓会出席者二十三人

等々力みす子、小川小幸、日岐小かつ、藤田みかへ、小穴二二江、高山みつ、佐藤菊子、島田きり江、白沢恒子、杉山朝栄、本郷ふさ、中島貞恵、山田たけ、小室ゆき江、茅野とみゑ、望月久美、東条きぬへ、須沢芳美、望月和、白意志づゑ、相馬藤美、山地きみゑ、矢口美佐子

欠席会費だけ出せるもの 北野とし恵

料理 長芋よせ、ウドの甘煮、せりの志たし、五目ずし。

買物 七十銭小椎茸五十匁、十八銭ウス板一わ、九銭ワリバシ二把、二十銭干瓢、十二銭ス六合(一合不足又買ふ)、九十八銭八厘鯉節、(三分の二残る)、八十四銭三盆三斤(半斤バカリ不足又買ふ)、三十二銭五厘蓮根五百匁、十銭五厘人参三百匁、十四銭五厘醬油五合(一合不足又買ふ)、十一銭ウド一把(一把位不足)、八十銭長芋一匁六百匁(百匁位のこと)、十四銭四厘寒天八本(俵屋買物)四円七十九銭七厘、一円五十銭スシ米五升、三十七銭五厘卵十五、五十銭マキ、炭代)、会費一人二十五銭。(備)

4・21 午後三時半頃、村上医師・等々力書記来塾。トラホーム検診、種痘をなす。

田中茂喜18、牛越忠重18、山本義政18、井口平四郎16、望月朝一17、(丸山千里17)、白井和喜17、山本竹代17、(福島兼次郎16)、小林達郎15、白井孝志16、曾山登16、島原益種15、(太田保喜16)、西沢御男16、白井勝16、曾根原隆利15、堀内千秋16、等々力千秋16、井口治五郎14、中谷広門14、耳塚兼人16、望月和14、東条きぬへ14、杉山朝栄18、石附千代子17、佐藤菊子15、茅野とみゑ17、本郷ふさ18、高山みつ、水口みすゞ16、草間八男16。

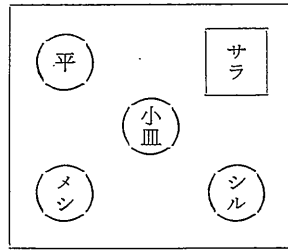
トラホーム検診、三十二人、軽症 井口平四郎、耳塚兼人、草間八男 三人
種痘二十九人 外教師二人。(備)

大正七年(一九一八)

大正七年（一九一八）

4・27

東穂高小学校より照会により左の通り回答す（大正六年度）学級二 生徒男三六、女三四（七年四月入学の女生を含まず）、入学生男一七、女二三、卒業、男二、女七。（備）土曜臨時休業。今日望月才一郎君の百日祭を等々力槌屋に行ふ。十一時行くことに約束す。教友会するもの丸山文一郎・平林義行・白居佐登美・望月義美・水口象雄・青柳さく及余、会する者



五時頃帰る。（備）

4・30

裁縫科授与式

順序 君が代、祈禱、学事報告、証書授与、賞品授与、仰げば尊し、祝辞、祈禱（杉山朝栄）、三九三番。来賓なし。

卒業生七人 34・1・28 白意志つ江、34・4・3 小川小幸、34・4・10 相馬藤美、34・8・24 中島貞恵、34・9・1 杉山朝栄

35・1・7 等々力みす子、35・3・24 白沢恒子

第三年五人 34・9・15 山田たけ、35・9・25 石附千代子、36・1・1 小穴一二江、36・2・22 山地きみゑ、36・4・1 日岐

小かつ

第一年三人 37・10・17 佐藤菊子、38・3・10 藤田みか江、38・3・28 矢口美佐子

本年より卒業生の姓名を呼ぶに年令順とす、三年山田たけ欠席につき山地きみゑ総代一年は藤田みかゑなり 矢口美佐子欠席 欠席の者には賞品を与へず。

外に穂高村青柳十郎次氏の夫人、押野親威二人、穂高村平林善治君、望月高二君、荒川荒二君等。初め讚美歌五十三、祈禱、聖書朗読詩篇九十章平林義行君、故人略歴白居佐登美君、讚美歌三五七、説教約翰伝第十四章、短命必ずしも悲しむべからず、朝に道を聞かば夕に死すとも可也、殊に信者には天国あり、父姉妹は待ちて団圓せるなるべし云々。三五五番、丸山文一郎君の感想談あり、それより各自花を供へ、三九二番を歌ひて休む。会の始まる前に昼食す。膳には飯、汁、平、皿。皿にはヨセ、リンゴ二個天ブラ、小皿にはコンニャクとヒジキのクルミあへ、外に牛房の煮たるもの。引物は、三盆二百匁茶名入四十匁、式終りて麴類と飯の人は豆腐汁、親類のうち、島屋三へ十両家五三氏は基督教の式に反対なりとて来らず。只その妻君一人づゝ来る。教友香奠一円づゝなり。

出席四ヶ月以下八人 寺島満江、相馬正美、須沢芳美、伴ひふみ、白井はつ、浅野力代[㊟]、茅野とみ[㊟]、小室ゆき[㊟]
 中途退学三人 宇留賀よしへ、矢口かつ、青柳とみ

四月入学せるもの六人 本郷ふさ研、平川志げの三、高山みつの四、島田きり江二、水口みずほ三、望月久美一
 賞品は本科と同じく「禁酒」、卒業生には其外禁酒美談を添ふ 参列者二十五人 長マンジウ二銭五厘づつ 昨年度に比較す
 れば次の如し

大正六年度 大正五年度

在籍	三十二	四十二
証書をうくるもの		
卒業生七人	研究科二年 二人	
三年 五人	〃 一年 六人	
二年 〇	卒業生 三人	
一年 三人	三年 八人	
計 十五人	二年 二人	
	二年 二人	
	計 二十三人	

中途退学 三人
 出席四ヶ月以下 八人
 四月入学 六人
 総計 三十二人

(備)

大正七年度
 月道英作 化地
 火読英画 唱生
 水漢算英化 文
 大正七年(一九一八)

大正七年（一九一八）

木道 英習 地生

金 読算 英 唱 化

土 漢 英 珠

道二 英六 作一 化三 地二 読二 画一 唱二 生二 漢二 算二 文典一 習一 珠算一（備）

5・8

水曜、遠足。穂高駅より出発、午前六時松川迄十七銭。柏矢町より、有明より、追分より、細野より乗るものあり。合計三十六人。丸山たづる案内者、半在家に出で（停車場よりの道を池田に出で東につききる）、山をこへ牛沢に出で、犀川にそふて山清路にいたる。池田より凡三里、十一時半頃山清路着。休憩所にて愛する日本を歌ひ、祈禱をなし、一時間許り休みて差切新道をすぎ、山清路より西条まで三里半強。六時頃停車場着。六時十五分の汽車にのる（西条より明科まで十一銭）。明科に着きたる頃は、薄暮。馬車にのる。穂高町まで十五銭、電灯点々たり。（備）

5・29

望月直弥君、大名町斎藤病院に於て昇天せる報あり。午后二時の汽車にて行く。島内青年・小原金作・川□□・胡桃沢勘内・三村寿八郎・手塚縫藏・竹内祐太郎等の諸氏あり、終列車にて帰る。（備）

5・30

葬儀、十二時の汽車にて行く。金市主人・西沢本衛氏等と同車。讚美歌、祈禱、司会者手塚縫藏君、聖書朗読コリント後書五節、川口策君本人の略歴、讚美歌、説教自分、ルカ伝十六章、弔詞、三村寿八郎氏、児島友太郎氏等、小原金作氏感想、捧花、讚美歌、祈禱奥村政次郎、赤羽豊次、松岡弘君等。出棺安楽寺墓地。讚美歌、自分の祈禱、夕飯、終列車にて帰る。寺島伯君より香資一円、内村先生より金三円送り來たる。（備）

5・31

東穂高役場へ回答。大正六年度収入総額 授業料百九十五円十銭 其他収入三百五十円五十銭 同年度支出総額 經常費五百二十円 六円 臨時費三十五円。（備）

6・2

禁酒会をひらく（四、五月記事落）。
出席者、平林会長、井口、等々力古吾朗君、武井文雄君、武井福雄君、小川重春君、小平君、平林竹肥虎君、西沢弥平君。平林會長の開会の辞、井口君の望月直弥君の死につきて、徳富蘆花の南洲崇拜等の談あり。菓子・茶・讚美歌・禁酒の歌等ありき。（禁）
四日より午前八時はじめ。（備）

6・4

6・8

土曜、松本聖書研究会に於て、望月君の追悼会をなす。出席者十五六人。（備）

- 6・12 十二日より二十五日まで農事休業。(備)
- 7・21 午前四時、杉山茂登君永眠。養蚕繁忙のため仮埋葬。(備)
- 7・26 二十六日より八月二十日まで暑中休業。(備)
- 8・2 青柳姉帰松す。(備)
- 8・7 洋子十八歳にて藤沢に病死す。(備)
- 8・8 倫太郎帰宅す。(備)
- 8・9 朝、望月ちよ子上京、此回は面会せず。望月京子来る。二三日前に平林善治氏来る。(備)
- 8・10 午前二時、倫太郎、喜三郎、浅川と共に四人出発。烏川にそひて本沢をのぼり、困難して午后二時頃常念前岳に達し、夕方其麓の乗越に下りて小屋にとまる。金井訓導・小川太郎学校の常番も亦来る。朝、父三人にて東天井より二の俣の小屋を過ぎ、大天井、燕をへて、中房に下りて夕刻とまる。燕にて雷雨にあひ、小屋に一時間許り休む。翌日二時頃中房を出て、途中少雨夕方かへる。(備)
- 8・14 平林早次郎氏来る。後諏訪郡玉川村の人、保証武司来る。礪山館を見るべく喜三郎案内して行く。(備)
- 8・16 東京麴町区下六番町十六番興亡史論刊行会理事中村長次郎氏来る。執拗に予約を強請す。上条助一・古川貢・三村寿八郎の三氏を紹介す。(備)
- 8・17 松本へ行く。十九日和合家を訪ふ。夫人に面会す。十八日夜、青柳家に厄介になる。(備)
- 8・21 朝一番、青柳姉帰穂。出席者少なし。米価暴騰の爲め所在騒動起る。(備)
- 8・28 夜、清沢冽来る。(備)
- 9・8 午前九時より聖書研究会。(備)
- 9・15 午前九時より聖書研究会、午后小学校に西沢明花氏の画会あり。(備)
- 9・19 竹内校長、豊科小学校高山健二氏を伴ひて来塾。(備)
- 10・16 十六日より二十七日まで農事休業。(備)
- 10・17 青柳姉帰松。(備)

大正七年(一九一八)

大正七年（一九一八）

10・19

ミシン会社支部長丹計之氏来る。（備）

11・9

東筑本郷村滝沢なかに十八、柳沢まさゑ十八わざ／＼来訪す。（備）

11・10

郡役所へ回答

大正七年四月末現在 修業年限 本科三年 裁縫科四年 学科目 普通学一般 教師男一 女一 生徒男三三、女三五 授業料

三〇より五〇 經常費予算六七五円、臨時費予算三五五円（備）

11・12

夜、太田保喜、西沢御男、西沢守一、豊科警察へ呼ばれたることにつき竹内建太郎氏来る、氏は美作の人仏教信者なり。（備）

12・10

午后竹内小学校長、上伊那派遣の五人の教員を伴ひて来る。（備）

12・20

松岡弘君来塾。（備）

午後八時開会、出席者會員共凡六十人。

讚美歌 五十三、祈禱 井口先生、開会の辞 平林会長、会務報告 水口副会長、会規朗読 杉山次雄君、唱歌 酒の罪、本会之

歴史 井口先生、祝辞演説、愛する日の本 救世軍々歌、茶菓 饅頭五個三錢・みかん五個、みかんは三箱約三百個、余興 福引

一本宛、禁酒のうた、祈禱 平林会長

入会者七名、演説は會員等々力古吾朗君禁酒の必要を論じ、米国大統領クリーブランドの例をあげて、熱誠、同會員杉山次雄君
悪魔の恐るべく之を排すべきを語りて熱心、新年の会は一月五日午后一時より開会することとして散会す。十一時。新入会者、山
本義政・重野忠義・深沢運治・望月朝一・中谷広門・草間八男・曾根原隆利。

（禁）

穂高村 平林竹肥虎 大正7年3月

立足 山本 義政 年12月20日

新尾矢村 望月 朝一

〃 曾根原隆利

耳塚 草間 八男

矢原 重野 忠義

矢原 深沢 連治 大正7年12月20日

三枚橋 中谷 広門 //

洪田見 矢口 巖保 //

12・29 (日曜) 一月七日まで休み。(備)

○大正八年

1・5 出席者少なし。(禁)

1・24 二十四日より二月四日まで十二日間、寒中休業。(備)

2・2 出席者、井口氏、水口氏、等々力古吾朗氏、白井素慶次氏、平林竹肥虎氏、望月満雄氏、武井文雄氏の七名。恰も穂高町初市にあたり、町の人々出席者少し。水口氏の食糧問題の解決如何、井口氏の三不良少年死神を尋ねたる西洋の話などあり。午后一時散会。(禁)

2・11 紀元節出席者、男一五、女一四。(備)

2・12 郡役所へ回答す。敷地百六十坪、建物総坪数三十七坪半、教室二十五坪。(備)

2・28 常盤村太田喜代松氏病死す。(備)

3・4 白金相馬安兵衛氏病死。七日葬儀、義塾本科男生十八名会葬す。校長弔辞をのぶ。年六十五。十七歳にして家をつぎ、四十年間公

共の為に尽せり。性不羈、己れの信ずる所に邁進する概あり。明敏自ら信者たらざりしも、人の信仰に干渉せざりき。理財の才に

富み、又潔白なりき。賄賂に誘はさたるを聞かず。運動費を出して郡会議員たるを肯せざりき。(備)

証書授与式

3・28

順序 君が代 祈禱 学事報告 証書賞品授与 みかみの賜ひし 祝辞 送辞 答辞 神共にいまして 祈禱

三年答辞伊藤栄雄 あとの祈禱山本義政 送辞等々力梧六

三年五人 35・1・18山本義政、34・4・17伊藤栄雄、34・9・30望月与、34・4・5牛越忠重、36・6・26井口平四郎

二年七人 36・3・19福島兼次郎、35・7・5望月条市、35・11・1等々力梧六、35・8・31白井和喜治、35・5・21山本竹

千代、37・3・29小林達郎、35・10・20望月朝一

一年十八人 36・4・16曾山登、36・11・27望月与喜男、35・12・20望月喜与一、36・5・10太田保喜、36・5・26西沢柳男、

大正七・八年(一九一八・一九)

大正八年（一九一九）

36・4・12 臼井勝、37・3・10 曾根原隆利、36・10・1 堀内千秋、37・2・16 重野忠義、37・3・6 深沢運治、38・5・31 井口治五郎、38・10・15 中谷広門、37・3・7 望月礼策、36・7・14 草間八男、33・2・21 望月とくゑ、38・11・5 望月和、38・9・14 東条きぬへ、35・9・9・14 曾根原弥太郎

出席八ヶ月に満たざるもの 五人 臼井孝志 36・10・18、佐野としゑ 35・5・16、高橋得七 36・5・10、高橋七郎 35・1・26、

甲田一男 32・10・11

中途退学 六人 田中茂喜、丸山千里、丸山武敏、島原益穂、等々力千秋、耳塚兼人

賞品 信仰のすゝめ 一年総代 曾山登、欠席につき重野忠義、二年総代 望月糸市（備）

4・12 東穂高小学校へ回答（大正七年度） 学級数 二、教員 男一、女一、生徒 男三七、女三六、入学者 男二〇、女一八、卒業者

男五、女三（備）

平林早次郎氏来塾。（備）

4・19（土曜）女子同窓会をひらくにつき、十八日午后、十九日授業休み。（備）

女子同窓会出席者十七人。

水口治代、東条きぬへ、上条としみ、井口操子、望月和子、相馬ふじみ、望月かつみ、矢口みぎ江、日岐小かつ、小川小幸、等々力みす子、白沢恒子、水口いわを、望月とくゑ、望月久美、山地きみ江、矢口みさ子

会費を出して出席せざる者五人。

西沢さわ江、杉山朝榮、富成とめの、佐野としゑ、須沢よしみ

会費参拾銭 五目ずし、薩摩いも友キントン、ひじきの落花生あへ、台湾ぜりの志たし。

買物 小椎茸四十匁 ウス板一わ ワリバシ二把 干瓢十五銭 酢七合 三盆五百匁 人参十五銭 醤油五合 薩摩芋二匁 蓮根三百匁 豆腐二丁 卵二百匁 白米四升五合 落花生二十銭 ヒジキ百匁 塩八銭 五銭油（藤屋へ鍋の礼、石鹼一個）、鯉節四十銭 モト結二わ、練羊羹二丁（小川ヘレコード四枚の礼）。俵屋の勘定三円八十七銭五厘、白米一円八十銭。（備）

4・20

平林早次郎氏へあて、望月京子縁談破約の手紙を出す。（備）

4・23

相馬君への返事概略。

負債凡二千五六百円、授業料平均二十四五円、一月の経費約五十円、一年の不足約三百円内特別寄附約百円。負債の利子約二百円、計約四百円欠損。(備)

4・28

北安青木湖まで遠足、朝一番五時五十八分穂高駅出発。汽車賃三割引、往復四十八銭。

西沢洸、小川健太郎、藤原次男、細川和平、小穴重雄、丸山亘、堀内富貴人、小口善品、等々力利吉、飯沼醜、中島保、等々力有、等々力梧六、望月条市、福島兼次郎、井口治五郎、望月礼策、白井勝、高橋七郎、水口治代、望月和子、東条きぬへ、望月とくとゑ、須沢よしみ、相馬藤美、水口いわお、山地きみゑ、矢口みきゑ、小川小幸、矢口美佐子、白沢恒子、杉山あさへ、丸山ゑん、日岐小かつ、等々力みす子、井口操子、佐野としゑ、望月京、上条としみ、等々力かゑる、望月久美、望月かつみ、以上 四十四人
教師二人

午后四時二十二分の汽車に五分許りにて乗りおくれ、午后七時の汽車にてかへる。一同無事。(備)
大正八年度

月道 英作 植東

火読 英地・唱帝 裁

水漢 算英。図物 裁

木道 英。地習 東

金読 算英 帝物 裁

土漢 英珠

道2、英6、作1、植1、東洋2、読2、地2、唱1、帝國2、漢2、算2、図1、物2、習1、珠1 28 (備)

4・30 竹田宮恒久王薨去葬儀につき休み。(備)

5・1 裁縫科証書授与式

研究科一年六人 34・9・1 杉山朝榮、34・4・3 小川小幸、34・4・10 相馬藤美、35・1・7 等々力みす子、35・3・24 白

沢恒子、34・1・28 白意志つ江

卒業生二人 36・2・22 山地きみゑ、36・4・1 日岐小かつ

大正八年(一九一九)

大正八年（一九一九）

三年三人 36・12・1 矢口美喜恵、36・10・19 望月勝美、37・2・24 平川志げの
 二年六人 38・3・23 水口いわお、38・3・28 矢口美佐子、37・10・17 佐藤菊子、38・3・10 藤田みか江、36・2・15 茅野と
 みゑ、37・8・23 浅野力代
 一年一人 38・1・20 望月久美

四ヶ月以下七人 34・9・15 山田たけ四年、38・1・7 小室いち江一年、38・7・17 浅野五恵一年、37・8・26 伊藤志げ子一年、
 37・3・20 水口みつぎ一年、西沢さわ江研一、須沢芳美研三

四月入学（本科より）一人 望月とくゑ

中途退学七人 本郷ふさ研一、丸山たどゑ研一、中島貞恵研一、小穴一二江四年、高山みつの四年、水口みすと三年、
 島田きり江一年

研究一年総代	小川小幸、三年総代	矢口みきゑ、二年総代	水口いわお、一年総代	望月久美							
在籍	証書をうくるもの	研究一年 卒業	三年 二年 一年 合計	出席四 四月 中途 月以下 入学 退学							
大正七年度	33	18	6	2	3	6	1	18	7	1	7
六年度	32	15	0	7	5	0	3	15	8	6	3
	増1	増3	増6	減5	減2	増6	減2	増3			

(備)

8・7 伊藤源次郎、明治三十二年十二月十三日生、大正八年八月七日家を出発、大正八年八月十三日香取丸にて横浜出発。大正八年七月二十五日長野県庁下附第四三五七四五号旅行券所持。(備)

9・8 午后一時より文学士柳宗悦氏「ブレイクの芸術に現れたる宗教」と題する講演小学校にあり行く。聴講者は大抵北部教育会員諸氏なり。赤羽王郎氏に面会す。(備)

9・23 長野県内務部長宛回答
 任命年月日

明治三十四年四月二十日 長野県中学卒業明治大学二年修業 小学校正教員・校長兼教員 俸給不定 井口
 同四十三年十一月二十日 松本高等女学校卒業 嘱託 十二円 青柳佐久

学級数二 生徒裁縫科二六 生徒定員一百 修業年限本科三年、裁縫四年 入学資格小学校卒業 授業料八十銭、五十銭 教科目
〔普通学級 沿革明治三十四年四月二十日設立許可(備)〕

9・29 朝、相馬黒光女史・相沢氏来塾。翌朝雨、信鉄二番にて帰京。(備)

10・1 郡役所へ回答

敷地運動場等借地、維持、経費の財源主として授業料及少額の寄附に依る。(備)

10・18 井口節蔵死す。名古屋駅前佐東棟一旅館方、同市中区下笹島町八番地。久留宮志か37、春一14、弘12、明9、信5、正吉3。(備)

11・3 午后十一時半義塾を立、明科より汽車木曾上松へ行く。汽車賃九十銭。上松より寢覚を見る。雨にて困る。福島駅に汽車やすみ夕方穂高へ帰る。汽車賃一円三銭。穂高まで同行者、生徒廿二人、教師二人。福島兼次郎、望月条市、等々力梧六、井口治五郎、

中谷広門、堀内富貴人、藤原次男、等々力利吉、白井今朝義、飯沼醜、丸山亘、小川健太郎、望月一一、西沢洗、等々力みす子、

望月とくゑ、須沢芳美、望月和子、上条としみ、水口治代、水口いわお、井口操子。(備)

11・21 東穂高小学校に西洋画並にロダン彫刻の展覧会あり、見に行く。赤羽王郎氏の説明あり。(備)

11・22 西沢今朝勝氏来る。寄附金四十円入る。(備)

11 小布施村平松九内来る。柏矢町まで送り行く。旧新約全書一冊贈る。(備)

12・20 柏矢町 小穴智恵雄 大正8年12月20日

踏入 小穴 重雄 //

八軒町 等々力 有 //

// 望月 一一 //

矢厚 白居 佐敏 //

重柳 白井今朝義 //

穂高町 小川健太郎 //

(名)

12・30 十二月三十日より大正九年一月七日まで新年休み。(備)

○大正九年

大正八・九年(一九二〇・二一)

大正九年（一九二〇）

1・1 四方拜、みかん五つづくれる。（備）

1・8 夜、西沢弥平・白居佐登美氏来る。曰く、今日午后三時頃、白居勝肋膜炎にて死す（十八歳）。其死に際美に美しかりき故に、其

式をキリスト教の式に於てなさんとす。諾す。（備）

1・10 午后行く。同行生徒十七人、香資生徒一同にて金三円を贈る。順序 一、讚美歌五十三 二、祈禱 三、本人の略歴（白居佐登美）

四、臨終の有様（西沢弥平） 五、聖書朗読詩篇九〇篇 六、讚美歌三五七 七、話教コリント前十五〇 五一以下 八、弔辭義

塾総代福島兼次郎、寄進社総代原田喜義、夜話会総代朋友二人 九、拱花 十、讚美歌三五五 十一、謝辭、出棺、墓地にて讚美

歌五九二及祈禱。（備）

1・22 一月二十二日より二月三日まで寒中休み。（備）

2・4 水曜始業、青柳来らず。（備）

3・27 証書授与式、午后同窓会

卒業生 望月条市、福島兼次郎、等々力梧六

八月以下 佐野としゑ、山本竹千代

二学年 重野忠義、曾山登、曾根原隆利、深沢運治、井口治五郎、中谷広門、望月和

八ヶ月以下 西沢柳男、東条きぬへ、水口治代、望月与喜男、曾根原弥太郎

中途退学 太田保喜、望月礼策、高橋七郎

死亡 白井勝

一学年 藤原次男、小穴重雄、小川健太郎、堀内富貴人、等々力利吉、飯沼馨、丸山勝、有賀義人、西沢洗、中島保、丸山亘、
等々力有、上条としみ、等々力かほる、井口操子、小穴智恵雄、白井今朝義、細川和平、望月一一

八ヶ月以下 小口義品

中途退学 丸山義三郎

在籍 証書をうくるもの 受けとるもの

三年	男	4	1	5	3	3	2
二年	男	13	3	16	6	1	9
一年	男	18	3	21	16	3	2
計	男	35	7	42	25	4	13
	女				29		

中途退学 八ヶ月以下 死亡

三年	0	2	
二年	3	5	1
一年	1	1	
	<u>4</u>	<u>8</u>	<u>1</u>

入学式。一日午後上京四日帰京。

4・1
4・2
4・3
4・4
4・17・18
(日曜)

休み

(備)

(備)

金曜午后より十八日、女子同窓会出席者十七人、会費を出し出席せざるもの一人。

山地きみゑ、青柳あさへ、望月潔子、飯沼ふみの、平川志げの、佐藤菊子、西沢八栄子、望月久美、井口操子、山田春子、水口いわお、望月好子、望月かつみ、杉山朝栄、矢口みきゑ、望月和子、矢口みさ子、。佐野登しゑ

○五月ずし、鯨かん一切れ、ウド甘煮、蓮根人参油あげ巻き、台湾芹ゴマヨゴシ

会費四十銭。材料 白米四升二円三十銭、卵七個五十銭、干瓢十銭、醬油五合二十五銭、酢五合三十銭、椎茸二十匁六十銭、ウス板五十枚十六銭、ハシ二十五本五銭、砂糖三百匁一円五銭、蓮根三百匁四十五銭、人参二十銭、角天五本三十銭、ウド一わ三十銭、モトギ二わ四銭、食塩五銭、油あげ十枚四十銭、ゴマ三合十八銭、鰹節四十銭、炭薪六十銭、合計八円二十三銭。

大正九年(一九二〇)

大正九年（一九二〇）

杉山朝榮開會之辭 蓄音機 唱歌 讚美歌等 六時解散。（備）

4・24

土曜、宮城まで遠足。午前六時穂高停車場に集り有明下車。汽車賃七錢。宮城は桜いまだ三四分開きたるのみ、八重桜は蕾いまだ堅し。十一時頃不動堂前にて昼飯、それより魏士鬼の窟を見、それより練兵場へ出て、牧の東北より烏川をわたり穂高村をすぎて帰る。同行者、男生十五人、女生十一人、帰りは四時頃にて好都合なりき。（備）

4・30

裁縫科証書授与式

研究科二年七人内四ヶ月以下五人。杉山朝榮、等々力みず子、小川小幸、相馬藤美、白沢恒子、望月とくゑ、伊藤とみへ
研究一年四ヶ月以下二人 山地きみゑ、原野かほる

卒業生四人。青柳あさへ、。矢口美喜恵、。平川志げの、。望月勝美

三年六人内四ヶ月以下二人。水口いわお、。矢口みさ子、。山田春子、。佐藤菊子、藤田みかゑ、飯沼ふみの

二年二人。望月久美、浅野五恵（四ヶ月以下なれども昨年与へざりしゆゑ）

一年一人但四ヶ月以下 中島操

在籍 証書をうくる 受けざる

研二	7			2	5
研一	2		0	2	2
卒業	4	4	0	2	0
三年	6	4	2	0	2
二年	2	2	0	0	0
一年	1	0	1	10	1
	22	12			(備)

東穂高小学校へ回答

創立年限三十一年十一月七日 修業年限 本科三年、裁縫科四年 教員男一、女一 生徒 男35、女29 入学者

一年へ 本科男十八、女三 裁縫科女一 卒業生男三、女四

本年度収入 授業料二百七十九円八十錢、其他五百二十円

本年度支出 經常費六五〇円 臨時費二〇〇円 (備)

大正九年度

月道 英習 代動

火読 英西 唱用器サ

水漢 幾作 英鉞サ

木道 英画 代動

金読 幾習 英西サ

土漢 英珠 (備)

5・30

芦沢みつ子・次男義男・竹内菌生来る。芦沢母子、三時の汽車にてかへる。十五年ぶりの面会なり。竹内・青柳と礫山館に行く。五時の汽車にて竹内かへる。(備)

5・31

西沢八栄子の家へ行く。西沢洗、ウソを云ひて豊科のベースを見に行かんとす。西沢久光に電報をうつ。(備)

6・1

長野持丸大尉(救はれて七幸・清沢キヨシ外一人と来る。生徒にはなしをなす。(備)

東穂高小学校より研成義塾につきて左の項照会し来る。

起原 明治三十一年十一月七日 矢原集会所を借りて私塾的教授を始む(生徒男十九人女二人)(カッコ内採道)。

変遷 明治三十四年一月一日より三枚橋新校舎に移転。同四月長野県認可(明治四十三年十一月より裁縫科を置く)(カッコ内採道)。

校長 井口喜源治更迭なし。

重なる施設 本科及裁縫科あり。(備)

9・16

郡役所へ回答

一 大正九年度入学志願者数 南安疊郡より二十五人

二 同上 入学者数 二十一人他一

三 同上 在学者数 六十二人他二

四 大正八年度までの卒業者数 二百八十五人(本郡)(備)

大正九年(一九二〇)

大正九年（一九二〇）

- 9・30 岡村千馬太、竹内小学校校長来塾。（備）
- 10・1 松山□□寺島伯来塾。松山一日夜、二日夜、二泊三日。日曜あつまり、同日午后三時半、明科へむけ寺島同道出発。（備）
- 10・4 郡役所諏訪郡書記来る。同氏に回答。
- 10・12 大正九年度 經常費予算六百七十円、内教員給四百四十円。臨時費予算二百五十円。（備）
- 10・14 七貴小学校田中嘉忠氏（内鎌）、松井某（小諸）来る。（備）
- 10・14 松岡弘氏来る。十四日夜、塔ノ原の東和合火事。（備）
- 10・16 十六日より二十七日まで秋季農事休業。二十八日（木曜）より始業。（備）
- 11・4 夜、東条蒔氏夫婦及子供来宅。いろ／＼面白くない話をきく。（備）
- 11・14 日曜、午后東条静子来塾。（備）
- 11・17 午后一時頃、東筑摩郡島内小学校職業酒井喜恵司（新村）・小松捨木（倭）・金田隆光（下伊那智里）・藤原昂（麻績）・木下薫平（飯田）の五人参観に来たる。（備）
- 11・24 夜、伊藤松太郎来る、源次郎除籍の件。平林義行来る、悪評の件。（備）
- 11・21 夜、勝野猪之蔵来る。（備）
- 11・25 朝、自らバプテスマを授く。祈りて曰く、父と子と聖霊の名によりて汝にバプテスマを授く。願くは従来のすべての罪をゆるし、神の国に新たに生るものとならしめ給へ。神の国に其名をしるさしめ給へ。残れる生涯を神の為るに用ふることを得しめたまへ。汝の手汝の足すべて神の栄光の為に用ふることを得しめたまへ。悪魔の誘惑に敗ること勿れ。アーメン。（備）
- 11・29 夜、穂本屋へあて明年中に他へ移転すべく手紙を出す。（備）
- 12・6 月曜、救世軍少隊士官少校淵本清一郎氏・兵士小原外一名来訪す。淵本氏は紀伊の人、今回片山大尉に代りて松本へ来れるなり。（備）
- 12・8 須坂小学校在職沼田弥平氏・荻原重男氏と共に来談す。（備）
- 12・9 夜、浅川為美来談す。（備）
- 12・13 白井郡書記来塾。（備）

12・15 午后二時郡役所へ行き、郡長白田松太郎氏・郡視学渡辺坦平氏に面会。金百五十円受取る。

私立研成義塾

右義塾従来の効績を認め茲に奨励金壹百五十円を贈呈す今後益々斯道の為に尽瘁せられむことを望む

大正九年十二月十五日

長野県南安曇郡長 從七位勲八等白田松太郎 (備)

12・19 午后禁酒会紀念会。(備)

午后二時より研成義塾に満廿九年の紀念会をひらく。平林会長開会の辞、会務報告、横内三直氏の会規朗読、井口氏の本会の歴史等の演説あり。余興は例年の如く、福引あり、密柑あり。新入会者、丸山善吾・堀内富貴人・宮沢佐内・長沢住喜・浅川為美の五氏、五時頃散会。紀念会を昼間ひらきたるは今回を以て矯矢となす。開会は午后一時よりなすを可なりと思へり。時間短かければなり。(禁)

七貴塩河原 堀内富貴人 大正9年12月19日

〃 鵜山 宮沢 佐内 〃

八軒町 浅川 為美 〃

細萱 丸山 善吾 〃 (名)

12・26 九時よりクリスマス。(備)

12・29 二十九日より一月六日まで新年休み。(備)

○大正一〇年

1・2 第一日曜、出席者、井口・荻原・西山耆男・矢口・臼井素の五会員。新会長平林義行氏、副会長横内三直氏、今年より入会金三十

銭を徴収するの建議あり。各自懇談して散会す。今日は恰も新年初売にあたりたれば出席者少し。(禁)

1・12 東条夫妻出立。(備)

1・18 郡役所へ回答

大正九・一〇年 (一九二〇・二一)

大正一〇年（一九二一）

研成義塾生徒調（大正九年十二月現在）

出身	在學生徒数	裁縫科	計	卒業者数	裁縫科	卒業生数	裁縫科	卒業後
町村名	一年 二年 三年	同上		大正八年度	同上	大正九年度	同上	卒業後
東穂高	男四 男三 男三	女一六	男一〇	男一	女四	男三	女四	男中二人は家居、農業一人は商業一人は神奈川県藤沢中学第四学年入学女子は家居
西穂高	男四 男三	女二	男七	男一			女一	
南穂高	男五 男二		男七	男一				
明盛								
七貴	男一 男一		男二	男一				
計	男一四 男九 男三 女三 女一 女三	女一八	男二六 女二二	男四 女一	女四	男三	女五	(備)

1・21 東穂高小学校へ回答

明治三十一年十一月七日創立 生徒男十九人。女二人 同三十四年認可、同四十一年度児童数男三〇、女二一、学級教一。

明治四十三年十一月より裁縫科を置く。大正九年度生徒児童数 男二六、女二二、学級教一 (備)

1・23 二十三日(日)より二月二日まで冬季休業。此冬割合に暖かなりき。(備)

2・1 一日、二日、初市。

3・12 自転車古きを出して中古と交換。二十七円外荷物台一円五十銭。(備)

3・12 荻原勘六(六十九歳)死去。(備)

3・20 松尾春野(二十三歳)腹膜、心臓にて死す。二十三日葬儀、会葬弔辞をよむ。(備)

3・27 本科証書授与式

讚美歌 五十三

祈禱

学事報告

証書授与

讚美歌 三九三

祝辞 (矢口岩保氏)

送辞 小穴智恵雄

答辞 重野忠義

讚美歌 三九二

祈禱 井口治五郎

証書をうくるもの

三年 重野忠義、井口治五郎

二年 藤原次男、堀内富貴人、中島保、等々力有、小穴智恵

雄、細川和平、井口操子

一年 細川郁雄、小穴文雄、小川真澄、宮沢佐内、西山耆男、

長沢住喜、望月義美、西山公、等々力忠雄、小穴三代

司、丸山善吾、西沢八栄子、望月好子

午后一時より同窓会

余興 蓄音機

会費 十五銭

卒業生 重野忠義

井口治五郎

二学生修業生総代藤原次男

一学年修業生総代宮沢佐内

うけざるもの

三年 西沢柳男

二年 西沢光、丸山亘、望月

一一

一年 望月輝男、岡村源市、

望月潔、浅川為美、渡

辺亮

	一年	二年	三年
22	13	7	2
9	5	3	1
31	18	10	3

(備)

3・31

青柳さく子昇天

二十七日午后、等々力宝来屋に行く。帰りに松本へ五時の汽車にて行かると予定なりしが、少しおそくなりたれば、五時の汽車には間にあふまじければ、明日二番にて行くと云ふ事也しが、

二十八日朝、治五郎帰宅して先生は風を引いた様であるから、松本へ今朝は行かぬ、風薬を買って来てくれとの事故、守妙を持つて来ると寝て居られた。その日は粥など少し食したるが、二十九日になりてタンが出たり、熱も高く、食欲も無いから、大倉蔵吉

大正一〇年(一九二一)

医師の診察をうけた。青柳姉は先年大学にて手術を受けた腸の部分が大変動気がうっていたから、注射してくれとの事なりしが、医者は心臓が弱いから注射は出来ぬ、胃腸の悪い所へ風を引いたのであるから、食欲の出るまで絶食するがよいと云ひて、水薬と散薬を二日分くれたが、塾では看護にも都合がわるいからとて、さきに行かれぬと云ふ電話を二五三竹内和市氏方にかけてが。二十九日にドウモ工合がよくないから、御都合が出来るなら和泉町の母さんから来て頂きたいと電話をかけた。

三十日の朝、母上は参られたが、大層様子がよかつたので、あとから誰も来なくてもよろしい、御安心して下さいと、また電話をかけた。此日はみかん、林檎など少しはべられたが、水はうまいと云つてよくのまれた。

三十一日の朝、来て見ると、大分様子がわるく、昨夜十二時頃から幾度となく下痢されたの事にて、それからクツ湯を二口ばかりのまれたが、自分は玄米湯をつくるつもりで玄米を炙つて居ると、母さんが呼んだから行つて見ると、炬燵によりかかつて変な目付きをして居られたが、そのまゝ何のうけ答へも無い。幾度も呼んだがそのままであった。急いで「大変わるいから六九の姉さんと和泉町の弟さんに来て下さい」と電話をかけ、また大倉医師を呼んだが、医者は注射しても駄目だ心臓麻痺を起したのであると云つた。それからまた、「ツイなくなつた、上の兄さんにも知らせして下さい」と電話をかけたが、そのうちに弟久吉さんは明科へ行く途中で聞いて（汽車の中）、明科から豊科まで俵、豊科から自転車で来られた。六九の姉さん（竹内うめ）が来る。六九の姉さんの夫竹内和市氏と青柳氏の兄上飯ヶ浜武七氏が参られ、また本町一丁目ヒダキの主人三原清七氏が来られ、細萱の親類の方が参られたが、いろいろ相談の結果、松本より自動車を呼んで（二十円也と云ふ）、それから箱を岡村勇氏の処にて作り（八円五十銭平林義行君奔走）、九時頃出発した。（備）

4・1 四月一日入学式、四日まで休み、一日午后松本へ行く。夜、蟻ヶ崎火葬場（木沢）にて茶毗す。翌朝一寸芦沢みつ子姉に報告し、それより木沢に行きて遺骨を拾ふ。紅顔も白骨となり、遺憾極りなし。（備）

4・4 四日葬儀、柏矢町十時半の汽車にて行く。同行者、丸山文一郎・平林義行・荻原重男・勝野猪之蔵外に女生徒青柳あさる・望月好子・東条きぬへ・山田春子・飯沼ふみの・平川志げの・矢口美喜恵の七人。仏式裏町林昌寺、自分は弔辞、平林義行氏東穂高教友会代表、山田春子女生徒総代にて弔辞。

墓地に於て讚美歌「遙に仰ぎ見る」をうたひ祈禱、芦沢みつ子・望月和子も同列、横山雅夫氏同断、茶、菓子、三つ盛り、したし、里芋等外胡麻むすび、引物紙箱包み三盆砂糖四百匁づつ、五時頃の汽車にてかへる。（備）

4・9 女子同窓会

出席者 青柳あさゑ、杉山朝榮、飯沼ふみの、矢口みきゑ、山田春子、佐藤菊子、望月久美、東条絹枝、西沢八栄子、平林千代栄、井口操子、西牧秀之、森島照代、武井すへの、臼井きよみ、井口礼子、十六人。会費二十銭、米二合、卵二個づつ、五目めし、馬鈴薯のきんとん、青菜のしたし、泡雪よせもの、買ひもの。(備)

4・13 十三日は棚上げ(臨時休業)。十二日五時半の汽車、夜行く坊主読経、十三日墓参り、寺にて茶菓(落雁二個)の饗あり。五時の汽車にて帰る。六九の店員停車場まで送り来る。(備)

4・14 須沢芳美一寸来て帰る。(備)

4・15 絞り染。(備)

4・16 同右。(備)

等々力みす子・望月平吾氏来る。腰かけ二個新調、一個一円五十銭づゝ少し高し(寺島の北の建具屋)。屋根屋四人来る。救世軍克己週間献金メ切る、金七円五銭也。(備)

東穂高小学校へ回答

学級三月一日現在 2 教員(年度末現在) 男1、女1 生徒三月一日現在 男26、女22 入学者 年度内第一学入学者、男15、

女1 卒業者 男3、女5 本年度収入総額 授業料二百十八円 其他三二〇円 本年度支出総額 經常費五八〇円 臨時費一

九〇円(備)

4・24 (日)裁縫科授与式

須沢芳美氏囑託絞染をなす。

杉山朝榮研三、等々力みす子研三、水口治代研二?、平川志げの研一、矢口みきゑ研一、青柳あさゑ研一、山田春子卒、飯沼富美野卒、矢口みさ子四、水口いわお四、佐藤菊子四、望月久美三、東条きぬゑ三、藤田みかゑ三、平林千代栄三、山地昌子三?、等々力さき一?、青柳喜恵一?

在籍生徒十八人 内証書をうくるもの 研究科一年二人 卒業生二人 三年修業四人 合計八人(備)

大正十年度

大正一〇年(一九二一)

大正一〇年（一九二一）

月道 英作 算化
 火読 英習 地生
 水漢 算英 画化
 木道 英作 生地
 金読 算英 習化
 土漢 英珠

讚美歌の時間の得られなかつたことは遺憾である。生理は一週一時間で足りる。算術の時間は、一週四時間で不足である。（備）

学科大体予定

大正十年度 道2、読2、漢2、算3、作2、習2、画1、化3、外地2、英6、生2、珠1、二八
 作1、習1を減じ東歴か帝歴を加ふるを可とす。（備）

青柳さく子姉弔悔

金壹円

東条 網枝。

金壹円

飯沼ふみの。

金五十銭 佐野としゑ

金壹円

水口 いわを

金壹円

平川志げの。

金五十銭 二木もとゑ

金貳円

水口 象雄

金壹円

矢口美喜恵。

金壹円 青柳あさゑ。

金壹円

望月 久美

金壹円

重野 忠義

金壹円 平林千代江

金壹円

山田 春子。

金五十銭

高山 正治

金五円 二年三年生十人

藤原次男 堀内富貴人 細川和平 宮沢佐内 西山一男

長沢住喜 望月義美 等々力忠雄 丸山善吾 小穴文雄

金壹円 佐藤 菊子

金五十銭

望月 条市

金壹円 西沢 本衛

金五十銭

望月 与

金壹円 深沢八重作

金五十銭

等々力みす子

金壹円 白居佐登実

金壹円

倭村氷室 荻原 満江

金卷円 杉山 朝栄

金五十銭見舞

。印は松本行

金卷円 望月 好子。

金卷円 須沢芳美

金五十銭 矢口 美佐

金五十銭 日岐小かつ

金五十銭 藤田みかへ

金五十銭 小川 小幸

金卷円 西沢八栄子

金卷円 小沢 寿作

とりなくこゑすゆめさませ
みよあけわたるひんかしを
そらいろはえておきつへに
御ふねむれるぬもやのうち (備)

6・11 六月十一日より二十四日まで農事休業。(備)

6・25 田中ふじゑ氏来塾。(備)

7・17 竹内蘭生・大内信の二婦人来塾。集り後礫山館へ行く。(備)

7・24 大内信及其兄上外に島内の女教師一人来塾。森本慶三氏、内順一氏来塾。(備)

7・25 軽井沢へ行き帰る。平林義行氏明科まで同行す。(備)

7・26 二十六日より八月二十一日(日曜)まで暑中休暇。(備)

7・27 等々力胡吾郎氏来。研究誌代一月よりの分二円五十銭うけとる。(備)

7・28 宮下滋水氏来(上押野)、南米行の話あり。菓子一袋貰ふ。(備)

7・31 安息日、森本氏二人・寺島伯・横内三直・平林義行・荻原重男計七人。詩篇五十一篇講義、森本氏の講演あり。すし二円買ふ。(備)

8・1 柏矢町九時十九分の汽車にて帰郷の途に就かる。軽井沢日本女子大学三泉寮森本喜代子(二十一歳)あて為替十円送る。順一氏十

六歳、順一氏は二男、順一氏の弟あり。喜代子氏は長女なり。女子大学の家政師範科生なりと云ふ。(備)

8・2 松尾久直七月廿四日死去の報あり。弔詞を父善作氏に送る。(備)

あけがたや星と消えゆく螢かな(備)

8・10 越後、木村孝三郎兄来訪、義塾に一泊、十一日朝柏矢町ステーションより松本へむけ出発。六日星温泉へ来られたる帰途なり。(備)

8・19 郡役所の書記来る。

大正一〇年(一九二一)

大正一〇・一一年（一九二一・二二）

女生徒の入学者調査。大正六年十五 七年十六 八年七 九年八 十年六 現在出席八人。（備）

8・22 始業八時始め、午前だけ稽古。（備）

8・28 竹内善市氏・望月和子・青柳あさる等来塾。集り后礒山館へ行く。（備）

8 東京市麴町区有楽町三ノ三東京電灯株式会社へ回答

宮下一門 二十二年十二月一日生

三十九年四月入学、凡一ヶ年普通学修業。（備）

9・1 一日より九時はじめ、午后二時間。（備）

10・18 十月十八日より三十日まで農事休業。（備）

10・24 二十四日夜行にて上京。二十五日朝、新宿中村屋着・柴田豊造・柳敬助・山本安曇・小室芳代・倫太郎・中岡五郎・大塚二十九・

寺島伯・喜三郎・内村先生・山岸壬五・ボース・俊・秋田雨雀・相沢舜の諸氏に面会。（備）

10・29 二十九日朝出京、赤羽のりかへ、宇都宮より日光鉄道、日光着九時半、中禅寺湖着正午、日光着四時頃、夜小山泊り。篠井二時間

許りまちて、明科より馬車にのりて家に八時頃着。（備）

10・31 天長節祝賀式。（備）

11・10 師範学校訓導、教正をつれて来る。信仰談を少しする。（備）

12・19 郡役所へ回答

教員数	生徒数	授業料	經常費	臨時費
-----	-----	-----	-----	-----

大正八年度	男一・女一	男30・女30	本科八〇	裁縫科五〇	六五〇円	二〇〇円
-------	-------	---------	------	-------	------	------

大正九年度	男一・女一	男26・女22	〃	〃	五八〇円	一九〇円
-------	-------	---------	---	---	------	------

大正十年度	男一	男35・女8	〃	〃	五〇〇円	二〇〇円
-------	----	--------	---	---	------	------

各年度四月末日現在（備）

○大正一一年

1・18 穂高町小学校へ回答

義塾卒業生数 男二百三十一人、女六十二人

卒業生状況 郷里にあるもの、大概農業に従事すれとも商業教育芸術等に従事するものも幾分あり。海外其他郷にあるものも幾分あり。海外其他郷にあるものも幾分あり。海外其他郷にあるものも幾分あり。

学科学科 修身、国語、漢文、英語、数学、博物、物理、化学、地理、歴史、習字、器画、唱歌。

裁縫科 修身、国語、唱歌、裁縫、女礼、茶湯、插花

授業料 本科八十銭 裁縫科五十銭 (備)

1・20 鶴林堂へ注文す。井上英語第四卷四冊、三省堂世界地理下卷三十五冊、改訂漢文第二卷二十五冊。(備)

2・6 役場へ回答。義塾教育費用

大正八年度 八百五十円

大正九年度 七百五十円

大正十年度 七百円

大正十一年度予算 九百六十円 (備)

2・14 鳥川村曾山登、土官学校予科生徒志願者証明書。(備)

2・19 小学校にて植原代議士講演あり、「華府会議の側面観」。(備)

2・20 等々力忠雄、鉄道学校への証明書。(備)

2・24 二十四日より二十八日まで臨時休業。二十三日長野へ行く。東ノ門二葉屋に宿る。二十八日長野五時半の汽車にて帰る。(備)

3・4 武井文雄・青柳甲子雄・百瀬湊の三人夜来る。倭山追悼会の相談。

3・7 西沢八栄子成績証明書。(備)

3・8 朝女史来る。夜水口象雄来る。(備)

3・9 朝女史来る。中谷子英来る。

出欠30、表紙60 餘35、D 230 菓子100 455 渡す。(備)

大正十一年(一九二二)

大正十一年(一九二二)

3・13 荻原本十氏来塾、20寄付。(備)

3・15 世界地理上巻八八 七冊、下巻八六 四冊、生理衛生教科書二冊九五、化学教科書一八九、鶴林堂へ返す。(備)

3・17 奉射祭休まず。淵本少校来塾、講演を頼む。頼山陽の歌、詩は唐詩、歌は古今に、住まば江戸、樂した人より苦勞した人。(備)

3・18 夜生徒勸誘依頼の手紙を出す。斎藤茂、望月平吾、田中茂喜、横内岩保、七貴松井。(備)

3・28 授業料 本科一元五十銭 裁縫科一元 三月二十八日出願、四月七日認可。(備)

4・19 穂高町役場へ

研成義塾 私立 穂高町 創立年月 明治三十一年一月七日 学科 中学校に準ず

修業年限三年 教員 男一 生徒三月一日現在男35、女8 入学者第一学年へ年度内男28・女7 授業料収入三七八円 其他一

五〇 經常費五〇〇 臨時費二〇〇

年度内卒業生 男四 女一(備)

大正十一年度

月道 英作 東物

火読 英習 植代

水漢 帝英 物珠 家事?

木道 英殖 画東

金読 英習 代物

土漢 英帝 家事? (備)

道2、読2、漢2、英6、珠1、東歴2、日本歴2、代2、物3、作1、習2、画1、植1、植民1、二八

女子に六時間目か土曜に家事を加う(備)

二十五日より八月廿日まで休み。(備)

7・25

畔上賢造君、木曾奈良井より来たる。参会者約二十名。会費五十銭にて五円五十銭集まる。路加五章? ベテロ等が漁獵の時の話、すみて茶話会。西田万喜代氏始めて来たる。午后有明温泉行、同行者、武井・平林・横内・白井等凡て六人朝七時出発。途中畔

8・20

上、武井に分れて塾に来たる。九時の間にあふ。出席者十六人朝道話すみて生徒帰る。

弓張りの月は東にのこりつゝ麓の里は今覚めんとす

神様の与へ給へる今日の日をみむねのまゝに用ひしめ給へ

ほのくゝとかすむふもとの朝げしき千松島見る心地こそすれ

ほのくゝとあけゆく里の村々は千松島見る心地こそすれ

穂高町面積〇・五八方里 人口男二二六五、女三三六二(備)

12・10 郡役所へ回答

修業年限三年 入学程度小学校卒業 学科目普通学 教員数男一 生徒数 男三二、女七 授業料一、五〇 本年度経常費七〇

〇円 臨時費二〇〇円。(備)

大正十一年役場届け

田自作十九俵預け 畑自作二俵半 貸宅地二俵 給料年額二百円 養蚕五貫匁(備)

〇大正一二年

1・15 武井すへの学業成績及人物考定書。(備)

2・23 夜、小学校に海外興業株式会社員川村憲三氏の活動写真あり。同氏は東京の人(自宅今は東京市外中野町三三〇番地)明治大学

出、ブラジルに二年余滞在、一昨年帰朝。(備)

2・24 土曜、塾にてブラジルの話あり。(備)

2・25 日曜、平林利治君送別の会あり。出席者武井文雄・平林義行・水口象雄・横内三直・西沢本衛・白居佐登実・勝野義権・小沢寿

作・井口治五郎・平林□ 信毎記者・青柳甲子雄。(備)

3・7 平林利治君出発、柏矢町停車場に生徒と見送る。水口象雄・西沢本衛・白井素慶次・白居佐敏の人々も見送る。(備)

3・15 平林利治君正午横浜出帆。(備)

3・26 証書授与式。(備)

4・1 日曜。(備)

大正一一・一二年(一九二二・二三)

大正十二年（一九二二）

4・2 始業。(備)

4・3 宮沢ふさ姉来宅、明治三十一年十月十二日生。(備)

4・22 女子同窓会をひらく。

出席者 島田竹よ・望月志げみ・草間正子・田矢しづ・望月みち子・堀内千代子・丸山きく子・白井きよみ・青柳あさる・寺
島雪江・武井すへの・井口操子・井口礼子・西沢八栄子・望月久美・藤沢清。

会費二十銭、卵二つ、白米二合づゝ。

五目ずし四升、椎茸五十銭、干瓢十銭、人参十銭、水豆腐三連、青板四枚、す五合、砂糖二百目、塩少々、はし三十人前、う
す板六十枚、うど五十銭、醬油壱升。うどうま煮、卵やき一切づつ、せり浸物

朝あつまり、昼飯一時頃、蓄音器五時半解散。(備)

4・25 役場へ

田自作扱とりあげ三十俵位 畑自作扱にして四俵位 貸宅地扱二俵 給料年額二百円 養蚕五貫匁(備)

大正十二年度

月道 英 作 動 地

火読 幾 英 画 鉞

水漢 英 習 唱 西

木道 英 地 動 用 器

金読 幾 英 殖 珠

土漢 西 英 (備)

道2、読2、漢2、英6、珠1、幾2、鉞1、動1、西歴2、日本地2、画2、習2、作1、植民1、 28

画は用器画を二時間、習1、作2? (備)

7・25 二十五日より八月二十日まで暑中休業。上山二十五日、宮沢姉二十六日帰省。(備)

8・12 穂高町役場へ回答 大正十一年度

設立年月 明治三十一年一月七日 学科 中学校に準ず 修業年限 三年 教員 男一 生徒 男35、女8 入学者 男23、女4
 本年度内卒業者男3、女1 本年度収入総額 授業料 五二二円 其他一五〇円
 本年度支出総額 經常費五五二円、臨時費二二〇円。(備)

8・29 郡役所へ回答

修業年限 男三年、女四年 教員数 男一、女一 生徒数 男三六、女二三 授業料 男一、五〇、女一、〇〇 經常費七二〇
 臨時費一五〇。(備)

12・8 松本市バプテスト牧師原三千之助(袋町一三四)氏来塾。(備)

12・10 倭学校長松岡弘氏来塾。(備)

○大正一三年

3・28 授与式。午后男子同窓会。

証書をうくるもの	八ヶ月以下中途退学	在籍	計
三年 男 四 女二	男一 女〇	五 二	七
二年 一 二 〇	四 〇	一 〇	一六
一年 一 四 七	二 一	一 六	一六
裁縫科		一 八	二四
卒業 一	四ヶ月以下	一	一
三年 四	一	五	五
卒業生 田多井寿男・丸山忠義・宮坂半・島田清・武井すへの・井口礼子			
二年修業生総代 内山八郎 一年同降旗数市			
一年——女子総代 堀内千代子			
裁縫科卒業生 井口操子 三年総代 平林晴子(備)			

五三

4・6 日曜、治五郎上京す。(備)

大正一二・一三年(一九二三・二四)

大正一三年（一九二四）

4・20 日曜、午前九時より集り、終りて女子同窓会を開く。会費白米二合、卵二個、金二十銭、出席者十六人。

白井志づゑ・望月和子・武井末の・青柳あさゑ・井口操子・井口礼子・平林晴子・白井きよみ・望月美智子・島田竹よ・堀内ちよ子・秋山みす子・丸山菊子・丸山静枝・白井みつ子・東条けさ子。

五平餅 米二升だき一人に五串づゝ拾個 ゴマ醬油づけ（白ゴマの方よし）ゴモクずし二升だき 卵やき二きれ ウドのうま煮 外にひたし。

買物 酢三合、小椎茸三十銭、人参十銭、カンヒヤウ十銭、三ボン一斤、たまり五合、塩五銭、ウスイタ三十枚、はし三十、經ぶし小一本、青いた三枚、氷豆腐二連、ウド一把、種油五銭。

解散五時半（余興蓄音器）。（備）

4・23 郡視学、竹内校長来る。（備）

4・24 役場へ回答

設立年月 明治三十一年一月七日 学科 中学校に準ず 修業年限 三年 教員 男一、女一 生徒 男三七、女一六 入学者

男一六、女二二 年度内卒業生 男四、女三 本年内収入総額 授業料五八五、五〇 其他の収入二九五、〇 經常費八五〇

臨時費三〇。（備）

4・28 穂高座に青柳博士の演説会あり。加藤正治来る。行きて逢ふ、久瀧。（備）

5・2 宮沢師の父上来らる。長野市へ行かれる途次なり。翌朝明科へ行かれるを途中まで送る。雨ふる。筈をいたゞく。（備）

5・6 斎藤茂氏の父秀次郎氏の葬儀に行く。（備）

5・10 総選挙。（備）

5・11 日曜、ローマ書四章講義、午前十一時頃小学校へゆく。霊水会絵画展覧会あり。午后同発会式、一寸祝辞をのべる。（備）

5・12 朝午前六時十九分発の汽車にて大町まで遠足。総勢三十七人。十一時頃青木湖着。アワ崎にいたりて集りをなす。ルカ伝七〇・一より十七。築場和泉屋にいこひ、ヒメマス三尾づゝ外に氷豆腐つけあはせたるもの一皿づつ食ふ。一人前十五銭、汽車賃往復とも

合せて八十五銭づゝ、一人も落伍者無し。帰る時、選挙の発表あり、植原悦二郎氏、百十数点の差にて青柳栄司に勝つ。（備）

5・21 望月亮二君操子の手メを持つて来る。（備）

5・30 役場届け

田字町浦及鎮守一五四八坪 二百円 きくの・平四郎

畑自作町浦鎮守牛喰 二五四坪 二十円 //

給料 研成義塾 二百四十円 喜源治

貸宅地 町十三 四三二ノ内 十四円 (備)

6・11 十一日より二十二日まで農事休み。十一日宮沢姉長野へ行く、明科まで送つて行く。(備)

6・12 Nへ行く、すぐかへる。十三日朝帰宅。(備)

6・20 青柳甲子雄来る。(備)

6・22 宮沢姉来る、午后六時半頃。いろいろ土産を貰ふ。百合も夕顔も。(備)

6・23 始業。(備)

7・3 宮沢姉・秋山すみ子同道、礫山館へゆく。(備)

7・21 朝六時中房へ行く。穂高の宮前にあつまる。同行者、上山晃・望月正次・平林行雄・内山八郎・武井頼義・蒲千広・降旗数市・

平林義美・井口鑑六郎・窪田秀雄・平林平・矢口堯・内山進・藤原守人・水口健次・藤松安雄・小川守男・井口操子・宮沢先生及

自分の同勢二十人。昼頃中房着。飯田女学校教師清水弥平氏にあふ。夜十二時頃出発、小川守男先頭提灯、前後に日の出漸く頂上

に達す。集りをなす。中房へ昼頃漸くかへる。疲れたる者多く、有明登山中止し、二十三日ひる頃かへる。一人一円六十錢づつ、

一人一食一合五勺平均。(備)

7・30 三十日より八月廿日まで休み。三十日朝、宮沢姉帰省。(備)

8・9 午后十一時、太田覚いわしやに於て脳溢血にて突然死去。年令四十一歳、十一日葬送。(備)

8・12 片丘村丸山乙一氏、埴科郡風長谷川 氏、東京市代々木山田鉄道氏来訪。(備)

8・14 午前、喜三郎来る。(備)

8・15 朝、山へ行く。(備)

8・20 宮沢姉より行かぬと云ふ手紙来て驚く、祈る。(備)

大正十三年(一九二四)

大正十三年（一九二四）

8・21 始業十七人来る。(備)

8・23 夜、明科小山潤一郎・内川千次二氏来訪いろ／＼語る。(備)

8・24 午后、宮沢姉来る。柿羊羹を貰ふ感謝。(備)

9・3 笛の音きこゆるたひに思ふかな此列車にて君や来ますと
役場へ回答 予科の生徒無し

9・3 学科 修身、国語、漢文、歴史、地理、数学、英語、博物、物理、化学、習字、図画、体操、家事、裁縫(備)

9・27 夜、諏訪永明村の人矢沢政信氏、小川健太郎氏と共に来訪。彫刻真髓をかせる。(備)

9 滝沢寅之助氏来る。同氏は本年六十一歳、自由行動をとることを許され、救世軍の為に□働くと云ふ。乃木大将ソックリの

容貌。(備)

10・15 相馬宗次氏葬儀、仏式。(備)

10・19 午后、上山帰省。(備)

10・20 二十日より二十九日まで秋の農事休み。朝七時十二分発にて宮沢姉帰省。(備)

11・27 倫太郎来る。(備)

11・28 郡役所へ回答(大正十二年三月卅一日調)

12・21 学級数二 教員数二 生徒数 男三七、女一六 経費総額八八〇 生徒一人当経費一六円六〇(備)

操子、等々力古吾郎に嫁す。媒酌人望月亮二・望月義美。来客、内山すま・玉一・伊藤今朝十・ひさ。同日朝十時頃、望月義美・

等々力古吾郎来。

参列者 平林義行・横内三直

讚美歌 五十三

祈禱 父

聖書朗読 エベソ書五章

感話 父・横内

○兄 具梅

○母 内山姉

○よめ

○父 西

○おじい

讚美歌 三三二

祈禱 平林

握手

祈禱 父

讚美歌 四六二

終り 茶・菓子折

午後六時頃自動車にて、仲人望月亮二、嫁、倫太郎、玉一、今朝十、荷物、柳行李、竹行李。

髮結竹田、折、菓子折、謝儀五円、折七個小川屋、一箇二円少し高し。自動車祝儀一円、菓子折一個三十錢十個、十日市姉二泊。

倫太郎・玉一・今朝十、一時帰帰る。玉一・今朝十直ちに帰宅す。宮沢氏不快にて参列せず。宮沢氏の家より反物一反貫ふ(四五

円?)。(備)

12・25

(木) クリスマス午前九時、午后禁酒会の予定、案内の人名。

小沢寿作・いち、白井素慶次、横内岩保・同三直、西沢一二、望月寿男、曾根原常一、白井佐登美、西沢本衛、丸山文一郎、水

口象雄、望月義美、越原重義、森島音市、藤原次男、西山竜男、等々力古吾朗、青柳あさゑ、杉山あさゑ、望月久美、望月好子、

望月和・同潔子、平林義行、細川和平、細萱復司、西田万喜代、寺島俊吾、宮坂半、望月与、佐野範三、島田捷治、島田清、重

野忠義、曾根原弥太郎、深沢運治、小川健太郎、小穴智恵雄、山田春子、西牧秀之、武井文雄、武井末の、森島照代、矢口きみ

ゑ、望月義美、丸山忠義、白井きよみ、平林竹肥虎、丸山岩男、藤原勇、丸山松柏、竹内今朝義、荻原勝利、藤原正安、北沢勲

夫、平林義美、深沢操、深沢喜内、安田徳四郎、荻原十重十、原田幸自由。(備)

12・26

郡役所へ回答

任命 明治三十四年四月廿日 明治法律学校修業・本正 校長兼教員、裁縫家事唱歌を除く全部 十二年四月一日 月四十円、

井口喜源治。大正十二年四月一日 飯田高女 教員 裁・家・唱 宮沢ふさ 月三十円。

私立研成義塾 大正十三年四月一日調 学級一 生徒男三十七、女一六

生徒定員 男四〇、女三〇 修業年限 三年。入学資格 義務教育修了者 授業料一元五十錢

大正一三年(一九二四)

○横内

○平林

○望月

大正一三・一四年（一九二四・二五）

教科目 修、国、漢、歴、地、教、英、博、物、化、習、図、体、家、裁縫
沿革大要

明治三十一年十一月七日、南安曇郡穂高町矢原区集会所を借りて創立。同三十四年一月同町三枚橋に移転。同年四月二十日認可。明治四十五年四月廿四日規則改定認可。大正八年四月十二日授業料額変更の件認可。

目的 義務教育を終りたる者に須要なる教育を施し、靈肉健全にして有為なる人物を養成するに在り。維持方法は生徒の授業料、設立者の私財提出、同情者の少額の出資。設立以来泉・郡・町村の補助を受けたること又出願したることなし。（備）

12・27 倫太郎妻きわ子入嫁。林兵次郎氏同道。牛流友一氏媒妁、来客内山玉一・伊藤今朝十・等々力古吾朗・平林義行・横内三直。（備）
12・28 二十八日より冬季休業、一月十一日まで。宮沢氏二十八日帰省。（備）
○大正一四年

1・1 新年式。（備）

1・11 宮沢氏遅く来る。（備）

1・18 勝野千秋氏結婚、司会者として行く。（備）

1・22 郡役所へ回答 十三年四月三十日 生徒数 男三七、女一六（備）

1・24 長男倫太郎穂高町の林栄太郎四女きわと結婚する。（戸）

1・25 朝、倫太郎・きわ・鑑六郎出生。明科七時五十一分の汽車に間にあふ。明科、横内に立ちよる。見送り、自分の外に妹及び和泉屋に泊り居る二人の女教師、木村外一人なり。（備）

松本市六九町竹内和市氏の母堂里恵子死去。

弔歌 不足なく此世の旅をなし終へて桜見ながらに極楽のそら（備）

1・31 小川豊治氏に金三百円返す。（備）

2・13 五時（午后）、勝野千秋・いせ子？出生。穂高停車場に見送る。仁丹一円おくる。（備）

2・21 井口準治郎来る。信仰のすゝめを送る。（備）

2・22 日曜、横内岩保、白井素慶次来る。親子并を食ふ。其妻君等に平民の福音を一冊づゝおくる。（備）

大正十四年(一九二五)

午后同窓会、会費二十錢。今日一時何分の汽車にて宮沢氏無断帰省す。(備)

4・1

大正十四年度、下の印刷物(注)教科書一覽略二百枚一円二十錢、身分証明書三百枚一円八十錢。始業、新学生十六人大に不足す。(備)

4・15

役場へ

田自作町浦及鎮守一五四八坪所得金額百五十円 井口きくの・平四郎

畑自作町浦鎮守牛喰二五四坪

二十円 同

給料 研成義塾

三百四十円 井口喜源治

貸宅地町なし

十四円 同

合計 五二四円

(備)

4・22

中等教科書協会長小林義則氏へ回答 一年五〇、二年四〇、三年四〇。

創立 明治三十一年十一月

学科受持 修、漢、国、数、歴、地 井口喜源治 一年六〇、二年六〇、三年五〇。

英、理、体、物、化 宍戸 元平

裁縫・家事 宮沢 ふさ

唱、習、画、博 青柳さく抹消 田中 久江 (備)

大正十四年度

月道英 作 植代

火読英 習 物 文法

水道英 歴 唱代

木道英 画 殖物

金読英 歴 代 珠

土漢英 物

道2、国2、漢2、英6、作1、植1、代3、物3、唱1、習1、殖1、文法1、画1、歴2、珠1、28 (備)

5・26 役場へ回答(大正十三年度)

創立月日 明治三十一年十一月七日 学科 中学校に準ず 年限 三年

教員 男一、女一 入学者 男一七、女三 年度卒業者 男七、女四

生徒数 男三九、女一六 〆五五

授業料六三二円 其他収入二五〇 經常費八六〇円 臨時費三五円 (備)

伊藤今朝十、源治郎を迎へに横浜へ行く。(備)

5・27 源治郎、伊予丸にて横浜着。二十八日今^ア十同道午前帰宅。(備)

6・9 治五郎来る。学力試験、源治郎も同道。六月十一日兵隊検査。(備)

6・11 六月十一日より二十四日まで農事休業。(備)

6・14 明科午后五時何分の汽車にて盛岡行。翌朝四時大宮着、午后二時頃急行にのり、十六日午前二時頃盛岡着。(備)

6・20 花巻に齋藤宗次郎訪問。苳畑をとひ、鰻飯を頂戴して帰盛。(備)

6・22 午後十一時何分盛岡発。二十三日朝松島着、瑞巖寺を見、午前十一時汽船にて塩釜へむけ出発、十二時頃着。塩釜神社へゆく。汽

車にて仙台着、人車にて仙台見物、俵代二円三十銭、夜九時半仙台発、大宮のりかへ、篠井にて三時間十五分待ち、明科より俵にのり、六時過ぎ帰る(二十四日)。(備)

6・24 盛岡より電報。夜牛流友一氏来る。(備)

6・28 電報を發す。夕刻和泉屋へキワキトクスグコイとの電来る。源次郎七時頃出発、八時前、エイゲンジフタリイマタツタと打電。夕

方望月織一氏来、菓子折とタオルを貰ふ。(備)

7・18 穂高小学校へ回答

十二年度入学生男16 南安14 北安1 スワ1

十三年度 男17 南10 北6 東筑1

十四年度 男22 南11 北1 (備)

土曜、齋藤宗次郎兄来訪。少時話し停車場へ行き、五時五十一分の汽車にて上京。十二日の内村先生の集りの模様を聞きカンシ

大正十四年(一九二五)

大正一四・一五年（一九二五・二六）

ヤ。（備）

7・24 裁判所へ行く、生れて初めて。（備）

7・26 二十六日より八月二十日まで休み。（備）

7・28 五時五十一分の汽車にて豊科行、小沢君の宅にて晚さんを頂き、モクシロク二章エペソ、スムルナ……の三教会につきて語る。それより禁酒会へ行く。放蕩息子のたとえ、我が来るは正しき者を招く為にあらず、罪ある者を招きて悔改させん為なりを語る。

めぐまれたる一日、終列にまにあはず歩いてかへる。（備）

8・21 始業。（備）

8・26 喜三郎来る。二十七日点呼、九月一日帰る。二十円やる。不相変無礼不遜。（備）

9・1 今日操子来る。一所に村上へ行く。夜、和泉屋へ行く。きわ一昨日午後五時頃来るよし聞く。（備）

9・3 夜きわ来る。（備）

9・11 朝雨、県視学曰田紀六氏・郡視学来塾。（備）

9・14 十四日より午后授業。（備）

12・25 九時よりクリスマス、会費二十銭。午后禁酒会記念会満三十四年。（備）

12・29 二十九日より一月十日まで休み。（備）

12・30 倫太郎・きわ来る。（備）

○大正一五年

1・1 新年祝賀、出席者少し。（備）

1・3 第一研究会禁酒会、イザヤ書四十章、エレミヤ哀歌四章。（備）

1・8 塚田千秋入営出發。（備）

夜八時頃、倫太郎・きわ信鉄によりて帰盛、東京を経て。夜、井口準次郎来、金百円渡す。（備）

1・9 瀬川久雄来る。郡役所へ回答、生徒数男三六、女五 授業料一円半。（備）

1・10 片丘村丸山乙一君、一青年をつれて集りにくる。夜、武井文雄君の宅にてあつまり、七恩の話をする。（備）

1・12 明科の横内の長男来る。(備)

1・13 夜、福与・平林・横内・島田来る。(備)

1・14 久保田・岡村源一氏禁酒会の相談にくる。(備)

2・11 堀金学校へ午后講演に行く。(備)

3・4 豊科へ衛生展覧会を見に行く。(備)

大正十五年度研成義塾第一学年用書注文。(備)

3・14 水、源次郎横浜へ行く。宿屋は横浜市海岸通り五丁目松阪屋旅館、一九日空向丸にて出発。(備)

3・24 田中久江氏帰松、病気の為め。(備)

3・26 二十六日より小川敏子来塾。(備)

3・27 授与式

第三学年 男四、女二 第二学年 男十一、内中退二、八ヶ月未満一、進級 男八 第一学年 男二十二、女一 八ヶ月未満。

進級男二十二 裁縫科十三内研究科一年二、卒業二、三年修業一、四ヶ月未満八 在籍 本科男三七、女三 裁縫科一三 合計

男三七、女一六 計五三。(備)

4・30 十五年役場へ届け

報酬 研成義塾 二百四十円 井口喜源治

畑自作町浦鎮守 牛喰二五四坪 二十円 井口きくの・平四郎

田自作町浦鎮守 一五四八坪 百五十円 井口きくの・平四郎

貸宅地町十三 十四円 井口喜源治

養蚕 二十円 井口きくの・平四郎

合計 四四四円

大正十五年度

月道 英代・習作地

大正十五年(一九二六)

大正一五年（一九二六）

火読 幾 英 図 歴

水 漢 英 習 動 鉞

木 道 英 幾 地 用 器

金 読 英 歴 動 珠

土 漢 英 幾

5・1 役場へ報告 教員 男一 女一 生徒 男三七、女二六 入学者 男廿二、女一〇 卒業生 男四、女四 授業料五五二円 其他

二五〇円 經常費六五〇円 臨時費一五〇円。（備）

瀬川光弥氏来塾、するめ二把貰ふ。（備）

5・12 坂本嘉治馬氏へ。（備）

6・28 役場より私立学校令施行細則改正に付照会の件（省略）。（備）

6・29 松本へ電報をかける、二度返事あり。夕刻行く、幸町田中由松氏に面会。つれかへる。（備）

7・2 柏原へ見舞にゆく。池上谷一郎氏にふる。蚕室を見る。ゴモクずしを馳走にあふ。（備）

7・3 長野県内務部へ回答 私立研成義塾 校長兼教員 手当未定 井口喜源治。（備）

7・30 夜、川端、勝野猪之蔵氏方へ行く、米人ユージェーマーヒー博士にあふため。（備）

7・31 夜、バンサン、マーヒー・勝野・松岡・平林・横内。八時より穂高劇場にて米国人の見たる排日問題「排日問題と其解決」の演説あり。下足共会費五錢、来聴者二百五十人位、収入十二円四十錢。經費約二十五円、マーヒー氏は夜行、軽井沢へ向はれた

り。（備）

8・13 夜、越後大鹿・山崎保英氏来る。夜恰も祈禱会、其夜はふしや泊り。義塾へ行き、午後一時頃馬車にて明科へ向ふ、小諸へ行かん

とてなり。年二十歳、鉄道工夫。（備）

8・15 喜三郎来る、二泊。（備）

8・27 鑑六郎帰盛。（備）

9・1 夜、芳川村田中勇雄と云ふ土方銭貰ひに来る。四年以前より中町救世軍の兵士なりと、酒によって来る。（備）

9・6 通信講習所長野支所へ回答。石田袈裟雄。(備)

9・8 二女操子柏原の等々力古吾朗と結婚する。(戸)

10・28 朝〇時二十分操子女子分娩。(備)

11・17 夜行にて上京。十八日朝、下谷区上根岸町八二戸村栄三郎氏訪問。それより中村不折先生訪問。帝展を見て、夕刻、麴町区平河町

五ノ二に相馬愛蔵君訪問。夜、喜三郎面会。十九日、明治神宮拝、夜活動を見、新宿発夜十時二十分にて帰る。(備)

11・25 夜、武井文雄氏来、又望月正門氏来訪、共に祈禱す。(備)

11・28 操子柏原へ返る。義子宮詣り。日曜、聖書協会の関氏来会、茨城の高橋きみ氏の話をなす。(備)

12・8 寺島喜悦氏来塾。(備)

12・12 後藤新平・永田秀次郎氏来穗。夜、武井文雄氏方へ行く、武井末野さんより長芋を貰ふ。(備)

12・14 田中静四郎氏来塾。(備)

12・25 天皇陛下崩御、昭和と改元。(備)

12・28 二十八日より一月十一日まで休む。(備)

○昭和二年

1・19 一時間早仕舞、中村栄蔵氏の葬儀に行く。柏原の老人の所による、望月義実氏と同伴帰る。(備)

1・20 豊科禁酒会。(備)

1・21 二十一日、二十二日臨時休業す。井口準治郎結婚。(備)

1・24 倫太郎来る。二十六日、きわ同道夜行にて帰盛、東京経過。(備)

1・26 西沢久平氏来る。(備)

1・27 沖頼母氏来る。(備)

2・5 千葉県佐原税務署長・北条虎雄氏へ回答、森本一司成績証明書。(備)

2・23 鉄道名古屋局長あて、矢口堯成績証明書。(備)

2・28 鉄道名古屋局長あて、藤沢今朝次成績証明書。(備)

大正一五・昭和元・二年(一九二六・二七)

昭和二年（一九二七）

3・2 入学勧誘依頼状を発す。

斎藤茂・西沢本衛・白居佐登実・西沢今朝勝・森本今朝次郎・小沢寿作・武井文雄・丸山けさ子・栗原勲・丸山道夫・栗林柳太郎・青柳佐平次・伊藤栄雄・等々力古吾朗・藤原次男・山地耕平・望月義美・水口象雄・安田徳四郎・堀内千秋・望月満雄・白井和喜治・蒲千広・有賀守司・丸山善吾・細萱復司・百瀬精一。（備）

4・22 穂高町役場へ回答（大正十五年度）。名称 研成義塾（学校類別）設立別 私立 位置 穂高町 設立月日 明治三十一年十一月七日 学科 中学校に準ず 修業年限 三ヶ年 教員 男一、女〇 生徒 男三三、女〇 入学者 男一〇、女〇 年度内卒業者 男六、女〇 本年度収入総額 授業料四九〇、五 其他五五円 經常費五一〇円 臨時費三五。（備）

4・24～26 竹内喜重来る。（備）
昭和二年度

月道 英 幾・習 作 地

火 読 算 英 画 歴

水 漢 英 習 化 生

木 道 英 算 地 作

金 読 英 歴 化 珠

土 漢 英 算 （備）

5・1 午後、小穴ちづる夫人来る。ふろしき菓子折を貰ふ。十二日横浜出発の予定。（備）
5・2 東京江渡欽嶺氏来塾、小山氏同道。すしを出す。さげかん二個貰ふ。操子来る。

6・12 長野県学務部長へ回答。長野県南安曇郡穂高町私立研成義塾校長兼教員俸給不定 井口喜源治。信濃教育会へ同断。（備）
南安曇郡教育部会（豊科小学校内）へ回答。設立者 井口喜源治 設置の時 明治三十一年十一月七日 修業年限 三年 学級数 一 教員 男一 生徒 数三〇 一円五十銭。（備）

8・28 朝、鑑帰盛。（備）

9・13 夜、倫・喜和帰盛、倫三泊。（備）

- 9・18 午後、東条脩・片瀬与一來宅。(備)
- 9・24 朝、波多村押出・百瀬里美(二十六位の青年耳遠き人)来る。研究誌第二集第三集、興国史談をかせる。(備)
- 9・26 鶴林十七版国文第二卷10改版世界地理中卷二十七註文。(備)
- 10・14 村上始氏、役場員と共に健康診断に来る。(備)
- 10・16 十六日より三十一日まで二週間農事休業。(備)
- 10・22 夜、藤沢今朝次融離室にて病死す。チブスなり、年十七歳。(備)
- 11・20 林栄太郎死す。(備)
- 12・6 喜三郎結婚。(備)
- 12・7 夜、礫山館養子の披露によばれてゆく。(備)
- 12・26 クリスマス。午後一時より、禁酒会。相馬君より百円貰ふ。(備)
- 12・29 東条脩君来る。寄附伊藤豊作夫人五円、積善十円、東条五十円、葉書三十枚貰ふ。夜、田中ふじゑ来る、等々力古吾朗来る。(備)
- 二十九日より一月十一日まで休み。(備)
- 12・30 国文第七卷十冊クラウン第二、十冊。(備)
- 横田広・井口和七郎成績証明書。(備)
- 昭和三年
- 横田広証明書。(備)
- 2・12 夕方、松代海津学舎小林喜重氏来る、一円キフす。(備)
- 2・26 午後、水口きさを君の娘むら子(三歳)の葬儀にゆく。詩篇九十篇を平林義行よむ、約十一章を健次よむ。サンビカ三百三、神共にいまして、再び主エスの。(備)
- 3・13 久宮内親王殿下の御葬儀。(備)
- 3・16 夜、伊藤今朝十オカン^マより風呂敷を持参、怒る。(備)
- 3・17 望月きわ来塾。矢口堯・水口健次来宅。奉謝祭。(備)

昭和二・三年(一九二七・二八)

昭和三年（一九二八）

3・19 昭和三年度研成義塾第一学年用教科書注文 二千円ふりかへおくる。(備)

3・22 横田広南安曇農入学志願証明。(備)

3・27 授与式。午後一時より同窓会会費二十銭。

三年、丸山道夫・中島武・小平七雄・越原賢人・坪田義人・竹川水男・横田広・牛越義盛・井口和七郎・相馬文字（四十三年十月九日生）・（死 藤沢今朝次）

二年、平林静雄・山田治男・矢野口四三夫・会田彦保・水野包芳（堀内正貴）

一年、丸山盛男・古幡正治・等々力三一・丸山義尚・相馬茂雄・召田寿策・横沢安正・木口等・曾根原芳文・丸山敏治・（秋山孝雄・望月太九郎・丸山留蔵・笠原英雄・小口納）

答辞小平七雄 祈禱中島武 送辞平林静雄 二年総代山田治男 一年総代丸山盛男

順序 一、めぐみの光は 二、祈禱 三、報告 四、証書授与 五、たえなるめぐみや 六、祝辞 七、来賓祝辞 八、送辞 九、神共に居まして 十、答辞 十一、祈禱 以上。(備)

	在籍	合格	中途退学
三年	10	9	0
二年	6	5	1
一年	15	10	5
	31	24	

(備)

4・16 夜、東条轉来る。(備)

4・17 同君今日出発、渡米。(備)

4・25 小平七雄証明書。(備)

5・17 治五郎来る。(備)

6・23 長野県へ回答。名称 研成義塾 設立の区別 私立 位置 創立年月 明治三十一年十一月七日 学科 中学校に準ず 修業年限 三年 学級 一 教員 男一 生徒 三月一日現在 男三一 入学者（一年へ）男一五 卒業者 男九 授業料 四五〇、其

他六〇・〇、經常費五〇〇、臨時費三〇・〇(備)

7・22 二十二日より八月二十日まで暑休。(備)

7・31 又提出、役場へ。(備)

8・20 西田萬喜代氏来宅。(備)

9・2 西之入徳氏来塾。(備)

9・12 治五郎上京す。(備)

9 九月より後援会成る。5 平林義行、2 武井文雄、2 横内三直、2 水口象雄、横内岩保、1.5 小沢寿作、1 西沢本衛、1 斎藤茂、2

10・16 白井素慶次。(備)

10・16 十六日より二十八日まで農事休。(備)

天皇陛下御即位につき、松本市清水部小学校に於て南北安曇・東西筑摩・松本市の千八十余人に賜饌、私立中等学校長として其席

に列することを得、光栄を感ず。(備)

10・20 内村先生の予言寺に一宿、塚本氏に面会す。(備)

10・21 帝展を見、相馬家に一宿。(備)

10・22 夜、新宿中村やにて清沢冽・野本文雄夫婦・小室孝雄・久保田栄吉・柴田豊造の諸氏及喜三郎にあふ。其夜行にてかへる。(備)

11・23 群馬県警察練習所長へ回答。田中茂喜字業成績証明書。(備)

12・2 義塾滿三十年の紀念会を穂高町小学校に開く。

内村先生の代理齋藤宗次郎君を花屋旅館に迎へて昼食をなす。田中ふじゑ氏外諏訪の人おかれて来る。讚美歌五十三。午後一時開会。白井保喜代君開会の辞―暑い時に暑いといへばあまりまへの事であるが、暑い時に寒い時があると云ふから多くの人は之を信じないが、クレオの地動説などそれである云々。平林義行君の会計報告。齋藤茂君の祝辞―井口先生は古武士の面影がある云々。

―松岡弘氏は一人の力にて三十年継続するとは驚くべきことである云々。丸山文一郎君の祝辞。讚美歌二百八十番。次に齋藤宗次郎君、内村先生が三日に亘りて記されたる四十一枚の原稿を朗読され。塾長謝辞・祈禱、讚美歌百七十番。それより写真撮影―作法室に於て読者会。讚美歌三三三、三三三。埴科郡南条村風宿・長谷川俱衛氏の感想。齋藤宗次郎君、内村先生、聖書研究雜誌に

昭和三年(一九二八)

昭和三・四年（一九二八・二九）

つきてかたり先生が幼時祭りと捕魚を好みしこと、子供の大将になって祭り遊びをなせること、札幌農学校に入りて中々信仰に入らず、伊藤一隆・大島正健氏が大に心配したるが、汝判ある鞭を踏るはあしゝの聖旨によりて悔改めしこと、高等学校事件、青年会館事件、独立雜誌廃刊事件等より背教者の統出、歴史と科学と信仰を打て一団となさんと苦心なざること等、研究誌四千四百部の配付の状態、祈りを以て書かれ祈りを以て發送せらるるを語り、夕食を花屋に於て共にし（教友二十余名と共に）、穂高の停車場に同君を見送った。記念菓子一個五十錢、松本市本町一磯村本店四百五十個。（備）

12・25 朝九時よりクリスマス祝賀会、会数四十余人、会費二十錢。午後、禁酒会満三十七年、会教四十余名。（備）

12・27 二十七日より一月十三日まで休業。（備）

昭和四年

1・1 新年式を行ふ。（備）

1・5 有明小学校午前十時より同級会に講演。（備）

1・12 東筑摩芳川村小学校に午後一時より講演。校長輪湖一氏、氏松本駅まで出迎へ、自動車にて行く。講演約一時間半、会員男三十人女八十人位、謝礼十五円。校長外職員三人、村井停車場まで見送る。（備）

1・14 夜、上諏訪・樋口てう氏来訪。越後よりの帰途、穂高停車場へ見送る。一時間位語る。（備）

3・26 証書授与式。卒業生 平林静雄・山田治男・矢野口四三夫。二年修業生総代横沢安正 一年修業生総代森島一郎。（備）

昭和三年度

昭和三年度			昭和四年度			
一年	二年	三年	一年	二年	三年	
31	15	6	20	29	5	4
24	10	5	21	16	2	3
		1	8	4	3	1
		死				
		中途退学				
		6				
		在籍				
		合格				
		1				
		中途退学				
		0				
		在籍				
		合格				
		3				
		中途退学				
		1				

(備)

火読幾 英 図 歴
 水漢英 習 動 鉞
 木道英 幾 地 用器
 金読英 歴 動 珠
 土漢英 幾

動物は一時間にて可なり(備)

5・13

長野県へ回答書留。名称 研成義塾 設立の區別 私立 位置 南安曇郡穂高町 創立年月 明治三十一年十一月七日 学科 中学校に準ず 修業年限 三年 学級数 一 教員 男一 生徒 三月一日現在 二十二 入学生(二年へ) 男十五(昭和三年四月一日) 卒業者 三(昭和四年三月) 授業料 四二一、五 其他 四〇〇 經常費 五〇、臨時費 三三〇、外に規則一通。(備)

5・17

役場へ回答。名称 …… 学校別 中学校に準ず 設立別 私立 位置 ほか町 設立年月日 明治三十一年十一月七日 学科 備考記載 修業年限 三ヶ年 学級 一 教員 男一 生徒 二九 入学者 十五 卒業 三 授業料 四二一、五 其他収入四〇〇 經常費 四五〇 臨時費三五〇。

5・30

学科 修身、国語、漢文、歴史、地理、数学、英語、理科、習字、図画、唱歌、体操 収支予算並に収支決算書 収入授業料四二一、五 同情者寄付四〇〇 支出 借地料三十八円五十銭 修繕費三百五十円 祝日費十円 化学用品廿円 運動会費五円 教師手当三百六十円 薪炭費三十円 電灯費七円二十銭(毎年四月三十日現在の生徒を五月十五日限知事に届出るべし)。(備)

區別

学級数	一	二	三
生徒数	14	13	2
本学年入学者数	14		
前学年卒業者数			3

(備)

6・1

午後一時より島内小学校にて内村鑑三・本間俊平氏の話をなす。会長・島立小学校校長・大池蚕雄氏・本郷小学校校長・野村氏来る

昭和四年(一九二九)

昭和四・五年（一九二九・三〇）

（三日後）。（備）

- 6・11 十一日より二十三日まで農事休業。（備）
- 7・26 二十六日より八月二十日まで暑中休業。（備）
- 8・6 国文第二卷六冊、第六卷三冊、漢文第三卷五冊。（備）
- 10・10 小平七雄人物証明書。（備）
- 12・15 小穴浩平、貞をつれて来る。（備）
- 12・28 二十八日より一月十二日まで休み。（備）

○昭和五年

- 1・4 古吾朗来る。（備）
- 1・5 瀬川久男来る。（備）
- 1・12 地理下、十八注文。（備）
- 1・13 朝、治五郎来る、二泊。貝梅より20、ウチより10、十五日朝上京。（備）
- 1・16 相馬文雄氏葬儀、見送る。豊科のあめいち。歯医者へ行く。（備）
- 2・10 午後三時、東筑坂北村長田・岩淵学に嫁したる望月潔、産褥熱にて二十三歳にて病死。十五日午前七時三十分長男徹も病死。二十三日仏式にて葬儀。（備）
- 2・27 有明村耳塚 草間丁大正元年度成績証明書。（備）
- 3・5 塾生のボタンをつくる。大一ケみがぎ上等二銭二厘、小一ケ二銭、型代大小八円。東京市神田区表神保町十、青木ボタンメダル工場振替東京二一四一。（備）
- 3・8 注文、昭和五年度研成義塾第一学年用書。（備）
- 4・15 役場へ回答 昭和四年度

名称 研成義塾 学校類別 中学校に準ず 設立別 私立 位置 穂高町 設立月日 明治三十一年十一月七日 学科 備考記載
修業年限 三ヶ年 学級一 教員 男一 生徒 男二八、女〇 入学者 男女 年内卒業者 男〇、女〇

本年度収入総額 授業料四〇八 其他の収入八〇 本年度支出総額 經常費 四六八円七十銭 臨時費 十五円。収支予算書並収支決算書 予算 經常費金四〇〇円 臨時費金二〇〇円 収入 授業料金四〇八円 同情者寄附金八十円 支出 借地料金三十六円五十銭 校舍修繕費金三十五円 祝日費金十円 化学用品其他金十円 運動會費金五円 薪炭費金三十円 電灯料金七円二十銭 教師手当金三百五十円(備)

4

生徒調。学級教一 生徒数三年一、二年十四、一年十三 本年入学者数 男十三 前学年卒業者数 男三(備)

報酬 研成義塾 二百五十円 井口喜源治

畑自作 …… 二十円 ……

田自作 ……

貸宅地…(備)

昭和五年度

月道 英 幾・習 地 歴

火読 算 英 化 作

水漢 英 図 生

木道 英 算 歴 地

金読 英 習 化 珠

土漢 英 算 (備)

8・17 浅野猶三郎氏来塾、内村先生追悼会をひらく。(備)

12・15 礼子、大町南部家へ行く。内山玉一・等々力古吾朗・平四郎同伴。平林義行・小沢寿作媒妁す。(備)

○昭和六年

1・26 小穴君夫学業成績証明書南穂高役場宛。(備)

2・14 真嶋一郎学業成績証明書七貴村役場宛。(備)

昭和五・六年(一九三〇・三一)

昭和六年（一九三一）

3・20 四月一日始業。入学志望者は至急入学願書御差出相成度候。（備）

内村先生の一周年にあたり、内村鑑三追憶文集十冊を頂載す。井口・平林義行・横内三直・小川守男・丸山文一郎・水口象雄・小沢寿作・白井素慶次・荻原十重十・白居佐登美。（備）

4・10 昭和六年度研成義塾第二学年用書注文。（備）

4・24 加藤長次郎氏来塾、ジャワ談をなす。（備）

昭和六年度

月道 英 習 歴 物

火読 代 英 植 文 法

水漢 英 歴 図 物

木道 英 代 作 植

金読 英 歴 物 珠

土漢 英 代 （備）

5・2 役場へ回答。

研成義塾 甲号表十二公私立学校（小学校に類する各種学校を除く）昭和五年度。名称 研成義塾 学校類別 中学校に準ず 設立 私立 位置 穂高町 学科 備考記載 設立月日 明治三十一年十一月七日 修業年限 三ヶ年 学級 一 教員 男一、女〇 生徒 男二〇、女一 入学者 男八、女一 年度内卒業者 男八、女〇 本年度収入総額 授業料二百八十五円 其他の収入五十円 本年度支出総額 經常費一九五、五 臨時費四〇、〇 備考 学科 修身、国語、漢文、歴史、地理、数学、英語、理科、習字、図画、唱歌、体操。

収支予算書並に収支決算書 予算 經常費金三六〇、〇〇 臨時費金五〇、〇〇 収入 授業料金二百八十五円 同情者寄附金五

十円 支出 借地料金二七、五〇 校舍修繕費金五〇 祝日費金五円 化学用品其他金十円 運動会金三円 薪炭費金二十円

電灯料金／ 教師手当金二百二十円 右之通りに候也 昭和六年四月研成義塾長井口喜源治。（備）

5・16 土、片丘村百瀬和夫氏来宅。四月より五常村小学校へ転任。祈禱して帰る。（備）

5・18 教科用書一覽表を神田小川町五八 中等教科書協会へ送る・東京開成館へ。(備)

6・11 十一日より二十四日まで農事休業。(備)

6・12 三女礼子大町の南部小三郎式男信と結婚する。(戸)

7・22 午後二時頃塚本虎二氏来る。へ九来る。四時五十二分の電車にて大町行を見送る。前数日、下伊那大鹿村の青年船沢三郎・ミツヲ氏来談。パプアネストの橋本牧師、南部信と同伴、三十分許談ず。(備)

7・26 二十六日より八月廿日まで暑中休業。(備)

8・5 国史下十四、鶴林堂へ注文。(備)

8・25 国語卷二十六注文。(備)

11・23 武井文雄氏来る。手締と結納とを一、一五贈る。(備)

11・28 初雪、三寸位積る。

我々の生涯を最も有効に送りたい。先づ人とは何ぞや。肉体と靈魂、法律と道德と宗教、肉体の糧と靈魂の糧(人はパンのみにて生くるものにあらず神の言)、靈魂の眼はひらく、朝に道をきかば夕に死すとも可なり。孔子の天、クワンタイ(宋の大夫)それを如何せん、孔子のいのり、大楠公の非理法權天、児玉源太郎大将のいのり、古の英雄、ジャンダーク、ナイティンゲール、本間夫人、万世一系をも天祐、真美人、婦人の天職、ミレーの名画、お花畑の草花、世の中に行くべき道は多けれどわかゆく道は神の正明、目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ。最も偉大なる事業は純潔なる生涯より(内村)、人生は波乱万疊。(備)

11・29 高家小学校女子青年団へ行きて午後一時間講演す、「最も偉大なる生涯」。来衆約三十名、帰途市営病院に操子を見舞ふ。(備)

11・30 炭一俵一円十銭。(備)

○昭和七年

1・11 山地茂一 学業成績証明書。(備)

3・4 二条貞男、大谷孝夫、学業成績証明書。(備)

3・25 授与式。二学年修業生二人 一学年……一六人 午後一時より同窓会 会費十銭 モナカ七個 蓄音機十枚許り 水口象雄 坪田義人出席 四時頃散会す。(備)

昭和六・七年(一九三一・三二)

昭和七年（一九三二）

3 聖書講義 昭和五年度 ヨハネ伝よりヨハネのふみモクシロク使徒。昭和六年度 馬太伝より使徒終まで。昭和七年度 路加伝より。

（備）

4・1 五男治五郎死亡。（戸）

4・2 午後八時すぎ電報到着。ジゴロウトウチニテシスコイトウキヨフニシタマグンヒカワムラヤクバ。続いて、和七郎より電報、ジゴロウシススグゴイ。続いてへ九へ電話。橋より落ちて死す云々。今朝十・古吾朗両氏来る。明朝出発に決す。（備）

4・3 松本六時四十分発汽車に間に合ふべく、沼田の自動車をとばす。賃銀三円、今朝十・古吾朗・平四郎。十一時頃、カソウシテアス

ヤコウニテカエル。（備）

4・5 九時頃、停車場まで南部信・武井直人停車場へ迎へにゆく。遺骨平四郎・古吾朗・今朝十、それに貞・喜三郎・鑑六郎・和七郎来る。

其夜一同つやをなし。（備）

4・6 葬儀 午後三時 讃歌二四九 祈禱（父） 遭難状況報告（喜三郎） 聖書朗読 哥前十五〇一より二十八まで（平林義行） 讃歌

三五七 説教（父） 讃歌 三四五 祈禱（南部信） 墓へ。墓にて讃歌 神共に在して 祈禱（父）。（備）

4・13 役場へ報告。甲号表十二公私立学校（小学校に類する各種学校を除く）（昭和六年度） 名称 研成義塾 学校類別 中学校に準ず

設立別 私立 位置 穂高町 学科 備考記載 設立月日 明治三十一年十一月七日 修業年限 三ヶ年 学級 一 教員 男一、

女〇 生徒 男一九、女〇 入学者 男一七、女〇 年度内卒業者 男〇、女〇 本年度収入総額 授業料二三四円 其他の収入

十円 本年度支出総額 經常費二二五円 臨時費二〇円 備考 昭和六年度表参照記入。収入予算書並に収支決算書 予算 經常

費金二二五円 臨時費金二〇円 収入 授業料金二三四円 同情者寄附金十円 支出 借地料金二十五円 校舍修繕費金十二円

祝日費金五円 化学用品其他金八円 運動会金三元 薪炭費金二十円 電灯料金 教師手当金百七十円 右之通に候也 昭和

七年四月研成義塾長井口喜源治。（備）

4・15 特別税戸数割所得金額申告書 昭和七年四月一日

田自作 町浦鎮守 一五四八坪 百二十円 家族 井口きくの・井口平四郎

畑自作 町浦鎮守牛喰 二五四坪 二十円 井口きくの・平四郎

貸宅地 町十三 四五坪 九円 戸主 井口喜源治

報酬 研成義塾

八十五円

……全収入 百七十円

合計 二百三十四円

(備)

昭和七年度

月道 英代・習作地

火読 幾英 凶歴

水漢 英習 公民 鉞

木道 英幾 地用器

金読 英歴 動珠

土漢 英幾 (備)

4・16 長野県へ。生徒定員 男三〇、女二〇。(備)

4・28 四男平四郎、武井すへの(武井直人の妹)と結婚する。(戸)

6・8 水、下伊那松尾小学校教師桐生竹雄・丸山 来る。職員二十余名、片丘小学校を参観し、手塚校長より民無信不立の話をきいたこ

6・30 と、松尾村は氷豆腐・水引・鯉等の副産物のあることをきく。(備)

6・30 役場へ回答。

名称 研成義塾 位置 穂高町三枚橋 設立者 現在校長名 沿革の大要 明治卅一年十一月七日穂高町矢原集会所を借りて設立、明治三十四年一月一日現在の場所に移転して今日に至る。生徒定員五十名。

学則 本塾は義務教育を終りたる者に須要なる教育を施し、靈肉健全これら有為なる人材を養成するを目的とす。修業年限を三ヶ年とす。休業日は日曜日・大祭・祝日・夏季休業凡三週間 冬季休業凡二週間 農事休業 夏秋合せて二十日間 学年末休業一週間。授業料は毎月金一円二十銭とす。(備)

学科別授業時数	修	国	漢	歴	地	数	英	理	習	図	唱	体
第一学年	二	三	二	二	二	四	六	三	一	一	一	一
第二学年	二	三	二	二	二	四	六	三	一	一	一	一
第三学年	二	三	二	二	二	四	六	三	一	一	一	一

昭和七年 (一九三二)

(備)

昭和七・八年（一九三二・三三）

- 8・13 鉄道旅客運賃割引証下附願 左記により鉄道旅客運賃割引証御下附相成度此段及御願者也 昭和七年八月拾参日 長野県南安曇郡穂高町 研成義塾校長井口喜源治 長野県学務部長殿 記 一、枚数三十枚 一、使用人員十二名 使用予定期間 自昭和七年八月至八年三月。（備）
- 8・25 卅枚来。（備）
- 9・26 夜より穂高神社祭礼、大町の南部夫人・礼子・満喜子来る。（備）
- 9・28 役場から通知があった。
- 10・16 第二補充兵証書 松本聯隊区長野県南安曇郡穂高町 戸主喜源治 七男 甲種 井口和七郎 右第二補充兵役に編入す 昭和七年八月卅一日松本聯隊区徴兵官[㊤]裏面 陸軍第二補充兵心得 一、服役年限十二年四ヶ月 二、本証書を失ひたる時は下付を市町村長を経て徴兵官（聯隊区司令官）に願出すべし。（備）
- 10・19 瀬川きのゑ、すみ子来る。（備）
- 10・19 十九日より三十一日まで農事休業。一両日おくれたり。（備）
- 10・20 午後一時頃、中気になった。（日）
- 12・5 朝七時頃、東京にて和七郎自動車にひかれ大腿骨を折り、直ちに下谷練癖町田代病院へ入院す。（日）
- 昭和八年
- 3・20 横内正直学業成績証明書。（備）
- 4・15 畑自作（平四郎・すへの）田自作 貸宅地（喜源治）控除 喜源治六十四歳、明治三年五月三日生。きくの六十歳、勝子二歳、昭和七年九月八日生。（備）
- 5・9 長野より大町をへて松本へ行く途次、山室中将、副官と共に、午後六時頃自動車にて立よられ、祈禱して下さる。其夜平林・横内松本へ行く。
- 仰臥半歳病末癒 惨風悲雨相統到
人生万事多反意 纒頼天惠^{ワスレ}遺煩悶（日）
- 5・11 文雄君来。山本勇一氏へ依頼状を書いてもらふ。（日）

- 5・12 小沢寿作君来訪、夫人の兄五十一歳中氣にて二年寝て居ることをきく。(日)
- 6・25 豊科町藤森和信(白井彦代男)東川手小学校松本和泉町西田二郎来る。
如何にせん世の波風の強ければ、病の床も吹き荒されて 大神のめぐみによりてさゝやかな命の箱舟波のまに〜(日)
- 8・5 午後一時頃相馬愛蔵君来訪見舞20貰ふ。(日)
- 8・10 太田勇(去年一月生)南の川へ流れて死す。(日)
- 8・12 午後竹内蘭生氏来訪、あめを貰ふ。(日)
- 8・17 堀内富貴人氏来訪、茶を貰ふ。(日)
- 8・22 朝、西入徳氏(早稲田大学教授)来訪、満洲視察の帰りだと云ふ、菓子を貰ふ。(日)
- 9・3 朝、和七郎来る。四日夜行にて上京。(日)
- 10・22 夜十二時枅や(望月喜代美)古幡標一郎のうらより出火。幸無風両家の物置を半焼にして鎮火。(日)
- 11・10 仰臥一年病未癒 夢寝頻思国前途
頼劍起者又劍仆 求平和者可嗣地(日)
- 11・22 轟田実氏来、森永サービステットを貰う。(日)
- 11・23 下里万平来、卵十個貰ふ。(日)
- 11・25 浅間枇杷の湯 小口泰雄弟好治、林ゆう子。南部信来る。(日)
- 11・27 堀内富貴人氏祖父葬儀。(日)
- 12・15 武井哲雄氏から見舞二円送る。内村全集の成るをききて。
内村の全集成りしこそめてたけれ誑者はすべて救はれよかし
チクタクの音をかぞへつゝ長き夜を寒さがまゝに眠りかねつゝも
大神のあつきめぐみにうれしくも又新玉の春に逢ふかな (日)
- 礼子・道雄と来る。(日)
- S子実家へ行く。(日)

昭和八年(一九三三)

昭和八・九年（一九三三・三四）

望月茂美氏来る。卯六十五外ソバ貰ふ。融氏よりのよし、いろいろ水口のはなしをきく。（日）

12・18 臼居佐登実十円送り来る。木村孝三郎良寛遺墨と金二円送る。礼子帰る。（日）

12・26 柏原中島氏（茂・武父）来、卯三十個貰ふ。（日）

12・27 南部信来る、毛布を貰ふ。（日）

12・28 耕地費八十五銭渡す。松岡弘氏より林檎一箱送らる。（日）

12・30 もちき長之助・朝代手伝に来る。操子来る、五十円返す。盛岡より三十円来る。木川寅次郎来る、みかん二十貰ふ。自分より三歳

の兄カクシヤクたるもの不相愛の硬骨。選挙の内幕をきくと驚く。横内から菓子を買ふ。

晝闇壓四辺 寒風捲積雪 辛酸猶一時 已知東方白

大神のあつき恵にうれしくも又新玉の春にあふかな

夜の雪

雨の音はいつしかやみて今朝見れば木々の梢に花ぞ咲きける（日）

○昭和九年

1・6 等々力古吾朗・瀬川久男来る。（日）

1・8 堀内富貴人来る。

空高くのぼれば落つるおそれあり低きにくらす身こそやすけれ（日）

1・9 南部信来る。（日）

1・11 平松九内氏栗羊羹を送り来る。（日）

1・12 大松や主人羊羹を持参す。（日）

1・14 有明学校中沢氏来る、飯島隼人・小松□郎・斎藤茂四氏等の話をきく。（日）

1・15 平四郎貝梅へゆく。「帝國興信所松本支所中島千里の名刺貼布」（日）

未明、くるしみは如何にますともわれは只神は愛なりと叫びつゞけん

罪人のわれをもすくひ給ふとは神は愛也く

2・1 神の前に立ちて恐れぬあらざるは十字架の血にすくはれしわれ

2・1

我れひとり正しと思ふ心こそだらくのふちに入るははじめなれ

罪人のかしらと思ふ心こそ神のみくにゝ入る枝折なれ

悔改め足らぬくくと友は言ふ実に然りとわれも云ふなり

大神の与へたまへる世界なりむさぼりあふぞをぞましきかな

2・16

黄何ぞ白は何ぞや皆ともに神の造れる子にはあらずや

3・1

水野利雄来る、見舞を貰ふ。(日)

3・9

望月正門氏武井君と見舞に来てくれる、見舞五円貰ふ。(日)

3・16

午後三時生る、喜徳と命名。(日)

3・17

赤十字の廣田文誌先生、助手藤森君来てくれる。毎月十四日・十五日、松本警察隣みどりやへ出張の由。(日)

3・18

午前三時勝子死す。一年七ヶ月遺懺^{イノチ}千方。(日)

3・23

平林・横内・南部らの手にて葬義。(日)

3・25

矢花良市来る、むしがしを貰ふ。(日)

昭和九年(一九三四)

3・26

丸山治氏来る、パイナップル一つ貰ふ。山本安曇氏来る、長崎カステラと茶を貰ふ。夕方南部信来る。(日)

3・27

夜九時頃齋藤^イ式男、平沢二氏来る、今度下伊那へ転任の由、菓子^イを貰ふ。墨^イをやる。山本氏へ水豆腐を送る。(日)

4・15

相馬家へ栗を送る。(日)

4・18

井口香山来る、饒舌、余計に頭痛がする。(日)

4・19

藤森彦代来る、マルシンレース(菓子)を貰ふ。(日)

4・22

塚田慶一帰る。(日)


4・22

下石長之助ブラジルへ出立す。

基督教徒の友を左の人々へ送る、武井文雄、平林義行、横内三直、松岡弘、藤森和信、水口象雄、小沢寿作、清水弥平、須坂町。

昭和九年（一九三四年）

- 丸山治、下伊那松尾村清水・中村貞男、横内岩保。（日）
- 4・30 竹内蘭生さん来る、飴を貰ふ。
- 山里も桜は咲けり然れども朝霜置きて薄氷張る。（日）
- 5・6（10） 今日岩原の婚礼平四郎ゆく。
- 咲きほこる庭の桜を寝ながらにながめて今日もくらしつるかな
無教会主義とは何か、送呈者 等々力・南部・竹内・横内・矢花良一。（日）
- 5・14 藤森彦代さん来る、焼海苔を貰ふ。（日）
- 5・15 松岡弘さんからリングを十二貰ふ。（日）
- 5・16 頭痛めまひ。（日）
- 5・19 野本氏夫婦来る、明治スペシヤルを貰ふ。西沢茂雄の悔みをやる。
- 6・9 青葉若葉蛙の声に柏餅（日）
- 鑑よりカステラ来る。長野市柳町部学校清水藤井さん松本へ行く途次見舞によってくれる、ネリ杏を貰ふ。只上を見る。無教会主義とは何かを贈る。法悦にみちて居るを見てうれしく思ふ。（日）
- 6・10 瀬川久男氏来る。サイダー二本、ヤキノリ二罐貰ふ。轟田実氏来る、ブドウ液（シオン）を貰ふ、頼まれて梓村金井俊英氏を相馬君へ紹介状をかく。（日）
- 6・15 東条君夫婦見舞に来てくれる、ケイラン三十、金十円貰ふ。鑑・中島とも中村屋販売部に入る。武井文雄君来る、パイナップル二個貰ふ。（日）
- 7・8 けわしきをあへぎ／＼ものぼるなる姿に似たるきのふけふかな（日）
- 8・8 横内正直来る、江戸前の菓子を貰ふ。（日）
- 8・10 中島武来る、高級のロシア菓子をもらふ。鑑よりカステラ。（日）
- 8・14 きわ、ヤヨミ、ナオミ来る、神宜く汝我が与ふる十字架を負ひ得るか余止むを得ずして曰、負ひ得べしも神、重且大なる十字架。十字架を負ふてよろめく弱き身をあはれみ給ふ神ぞ尊き（日）

- 8・6 藤森和信、名古屋病院にて病死。(日)
- 8・22 夜、大ざんげみたま下る。(日)
- 8・23 エス子里へ行く。今朝子来る、西洋菓子を買ふ、和七、五円よこす。(日)
- 8・27 瀬川久男氏来る、わらびがき、パインナップル・西瓜二ノ目、りんご十二、貰ふ。白井素慶次来る、ポウヅキを買ふ。(日)
- 8・28 平村義行来る。(日)
- 8・29 きわ、明科、篠井、大宮經由帰盛。(日)
- 9・21 南風強く表の塀破損、杏の大木波柿が倒れた、宮の森の木も二十本も倒れた。大坂大被害。(日)
- 10・7 藤森和信葬儀弔電を送る。(日)
- 10・8 パプテスト伝道師岡崎福松氏、南部信と来る。(日)
- 10・20 発病以来今日で満二年、神よ早く癒し給へ。
- 天高く晴れわたりたる秋の日にねてのみくらすことぞわびしき
- 小川健太郎亡父の引物を持ち来る。二十日夜、の鼻血を出す、大倉ドクトル来る、注射したり、頭と鼻を交互に冷す。
- 大オンジャウ準治郎氏明治ウララ健チャ二円見舞。(日)
- 10・21 二十一日古吾郎来る、鯉カンヅメ四本貰ふ。操子看病にくる、二十八日帰る。(日)
- 10・26 岩野けさみ来る。(日)
- 10・29 白井素慶次母葬儀行年六十九脳溢血より尿毒症にて。平四郎行く。
- 11・4 瀬川久男来る、飴、カツオカン竹〇七本もらふ。(日)
- 11・13 礼子来る、リンゴ一箱貰ふ。夕方かへる、けさみ松本へ行く。
- 山をこえ谷こえ野越え来る鳥はいづこの里に住まんとすらん (日)
- 12・1 藤田保脳溢血にて死す。(日)
- 12・2 小口盛男・中村長十・降旗巳次・山崎利男見舞にくる、菓子折一個つゝ貰ふ。(日)
- 12・7 横内君、伊藤豊作氏のところへ行ってくれる。(日)

昭和九年(一九三四年)

昭和九・一〇年（一九三四・三五）

12・9 宇留賀氏へ断りの手紙を出す。（日）
12・10 光やへ断りの手紙を出す。

盛衰興亡幾變遷 攻城略地非吾事
可憫古來鬪争跡 不如平和建設業

見る人もなき山の上の岩かげに神をほめつゝ匂ふ草花。（日）

12・29 年賀葉書百三通出す。（日）

12・31 夜、盛岡より電報為替三十円来る。（日）

○昭和一〇年

1・1 朝、鑑六郎来る、羊羹を貰ふ。中島武より栗最中を貰ふ。横内三直来る。

瑞氣靄々溢池辺 群鶴翩翾謳泰平

休説砲烟爆彈響 億兆齊望昭和春

波風はとく取りて四つの海静まらんことを待ちわたるかな（日）

1・4 夜、相馬愛蔵兄見舞に立よらる、羊羹を貰ふ。（日）

1・17 堀内富貴人氏来る、菓子と風呂敷を貰ふ。（日）

1・27 斎藤茂氏来る、菓子折とつるし柿を貰ふ。横内三直氏より長崎かすてらを貰ふ、東京土産なり。（日）

2・22 中島武来る、高級ロシヤ菓子を貰ふ。（日）

2・24 手塚縫蔵君来る。（日）

3・2 昨夜より気分よろしからず、朝大倉医師来てくれる。操子来る、相馬兄へ藤原武重の依頼状をかく。水口象雄氏来てくれる、林檎

とみかんを貰ふ。横内君と光やの事について奔走してくれる。

片枝に水は通ひて春来なば老いたる木にも花や咲くらん

エス様のあつき血汐に流はれて罪深き身も救はれにけり

みな人のすべての罪を赦したりわが身の罪も赦せ大神（日）

- 3・4 横内・水口君今日豊科警察へ行ってくれる、光やの件。小沢寿作君来てくれる、笠井のむし菓子の折を貰ふ。昨日南部信来る。手塚縫藏君夫人逝去去脳溢血なりと。
はぐくみし子等に齡をゆづりおきて神のみくによ行きし君はや (日)
- 4・26 貞来る、二十九日夜行にて上京。(日)
- 5・10 丸山貞雄氏之ヨメ来る。(日)
- 5・12 大倉医師来診。(日)
- 11・21 塚原小林平三郎氏礫山の事をきくに来る、菓子を貰ふ。頭痛の為め逢はず。末野秋物仕舞に実家へ行く。(日)
- 昭和十一年
- 2・20 総選挙。荻原寛衛氏五年振にて来る、菓子を貰ふ。(日)
- 3・25 高家小学に居た村上氏？来る、志を立てて上京する由、成功を祈る。密柑・梨・りんごを貰ふ。(日)
- 3・27 古川町長・等々力武雄区長・二本久吉惣代へ手紙を送る。釧路市末広町五ノ三望月算氏久方振りに来る、見舞式円貰ふ。(日)
- 4・9 午前十一時喜文生れる、一ノ五匁。礼子来る、十五日礼子帰る。(日)
- 4・17 相馬様来る、明日松本高商へ行かれる由(二〇)。盛岡より送金(五〇)。(日)
- 5・22 中島武来る、卯拾八貰ふ。赤坂田町六ノ一三菊屋洋菓子店方に鑑六郎が居ると云ふ。山室中将より民数紀略・申命記一冊貰ふ。神田区神保町二一十七 救世軍日本本営。(日)
- 6・21 望月和子見舞に来て呉れる、三沢屋の蒸菓子を一折貰ふ。(日)
- 9・13 参拾円水口君から庭木外便所の代。(日)
- 9・22 喜徳・太田邦夫と穂高村へ迷ひ行く、心配した。(日)
- 9・20 義塾旧校舎に最後の集りをなす、出席者 小沢寿作・白居佐登実・水口象雄・横内三直・平林義行・武井文雄・丸山治・西沢本衛の八人。(日)
- 10・24 水口来る、一ノ瀬か熊本口口し細萱の俵屋一千本十二円位、四尺五寸に二尺五寸、一反歩六百本位。(日)
- 10・30 島地むらじ姉来る、ビスケットを貰ふ。(日)

昭和一〇・一二年(一九三五・三六)

昭和一一・一二年（一九三九・三七）

11・20 午前二時竹内園生姉召さる、葬儀は廿二日午後一時の筈。（日）

11・23 結婚。夫井口和七郎、大正元年八月廿二日生、妻 五千三百十二番地、今朝十長女伊藤あさよ、大正六年十月十五日生。証人 北

穂高村二千三百二十番地伊藤豊作、明治十二年二月二十八日生、穂高町四千五百五十八番地二禾幹夫、明治廿七年一月三十日生。
昭和十一年十一月三十日届。（日）

11・30 七男和七郎穂高の伊藤今朝十長女あさよと結婚する。（戸）

12・3 倒れしは二、三日前と思ひしも早五とせになりけるかな

昨日今日師走のそらに珍らしき暖き日をうれしく思ひぬ（日）

12・5 病める身に思ひくらべて我友のすこやかなるを只祈るかな。平四郎柏原へ行く。（日）

12・5 東条東一氏カステラの折を持って来る、轉氏の委託品。（日）

12・6 伊藤今朝十来る。平四郎柏原へ行く、カステラをやる、昼飯を食べて来る。（日）

12・12 金拾円東条静子より来る。（日）

○昭和一二一年

1・23 東条夫婦来てくれる、カステラを貰ふ。（日）

1・27 出五〇。尿道狭さく症にて一日おきに病院へ通ふ由。夫人も病氣心配である。（日）

1・30 水口君来てくれる、菓子折を貰ふ。（日）

島新田で女子生れる。（日）

1・31 朝、大倉医師来てくれる、心配ないといふ、安心。（日）

2・1 町内の子供たいこをたゞいて困る、横内に頼む。大雪降る。（日）

2・2 朝一尺六寸。

2・4 武井文雄氏来る、パインアップル二かんとタオルを貰ふ。頭が痛くて困った。（日）

2・10 久し振りに古吾朗来る、花王石けん二箱とワッフルを貰ふ。（日）

2・11 伊藤博一の娘来る、三円見舞を貰ふ。（日）

横内来る、そば粉を五合ばかり貰ふ。柏原と中島氏の家へ床上の強飯を送る。伊藤ひさよ国防婦人会の帰りによる。豊科の小沢寿作久しぶりにて来る、サンドを貰ふ。(日)

2・12 三円のはれやかを買ふ。(日)

2・19 久しぶりに下里万平来る、満洲の独立守備隊に行くと言ふ。ホリネスが分れて車田先生の方へ転じたと言ふ、面会十分間。(日)

2・28 夜、中村やへ入りて金こをこわし一千四百円をうばひたる賊あり。(日)

3・2 白井みほ子見舞に来てくれる、菓子折を貰ふ。キリスト教読本をやる。(日)

3・4 末野島新田へ行く、六日帰る。(日)

3・5 島地さん来る、青柳品雄^カ氏の話を聞く、切カステラを貰ふ。水肥の粉を一袋やる。(日)

3・7 菊野、柏原へ行く。(日)

3・17 久しぶりに横内正直来る。お祈りをする、ロシヤ菓子を貰ふ。(日)

3・21 望月正門氏来る、五円入。水口きぬ子来る、桃かん二つ。丸山盛男証明書。(日)

3・22 鑑六郎へ戸籍抄本送る、十五銭書留十三銭。(日)

3・24 久しぶりに押野の丸山治来る、菓子を貰ふ。横内来る。(日)

3・27 島新田の兄様来る、そば粉、切りカステラを貰ふ。(日)

3・28 久しぶりに柏原の操子と義子と来る、感謝々々、菓子折と餅一反を貰ふ。大町の礼子、満喜子、真理帰る。(日)

3・29 操子、義子帰る。(日)

3・30 横内帰る、東条君托してカステラを送ってくれる。(日)

4・6 午前水口君来て呉れる。(日)

4・9 喜文誕生日、末野島新田に行く、芋種や色々貰ふ。十日帰る。(日)

4・14 水口君桑苗を植えに来てくれる、巻寿志を貰ふ。(日)

4・18 夕方大町のおふくろ、まこと、恵美子来る、豊科の祭の帰、八時の自動車にて帰る。(日)

昭和十二年(一九二七)

昭和十二年（一九三七）

- 4・20 礼子来る、竹の子。藪子、菓子を買ふ、四時頃の自動車にて帰る、もち草をつんで行く。重柳の白井来る、我等は永久に三人と云ふ本を（畔上君よりの）貰ふ。（日）
- 4・24 島地さん来てくれる、カステラを買ふ。家族さだ子・ひろし・水口きぬ子来てくれる、前掛、枕おほひを買ふ。（日）
- 4・27 斎藤茂君来てくれる、開運堂のくるみまんじうを買ふ。（日）
- 5・13 〇へ従軍徽章を送る、手紙も出す。（日）
- 5・16 朝初雷。中島から手紙が来て中村やで十八日にお祝ひをすると云ふ、新築の落成。（日）
- 5・23 へ九来る、我等は永久ただ一人とすぶらんをやる。（日）
- 5・24 大町の口来る、蒸し菓子を買ふ、柏原の帰り。（日）
- 6・24 横内正直、兵隊検査に来る、ヌガーを買ふ。（日）
- 6・29 世田ヶ谷区深沢町四ノ一七三塚本虎二氏より虎屋の羊羹を買ふ。（日）
- 7・4 武井文雄君来る、サインアップル二つ貰ふ。梅を少しやる。（日）
- 7・11 大町S口来てくれる、東京の帰り。メロンを買ふ。和七郎からのりの細煮アヤを持って来てくれる。松本のHS来てくれる、飾菓子其の他貰ふ。（日）
- 7・18 礼子・真理を連れて来る、赤飯を買ふ。夕方帰る。（日）
- 7・29 水君ミヅキ象雄来る、桑島改殖奨励金二円二十銭、塾の新切余り一円合せて三円二十銭受取る、くるみの菓子を買ふ。（日）
- 8・5 堀内富貴人（口口四村西山見舞に来てくれる、メロンのシロップを買ふ。）（日）
- 8・10 望月和子来てくれる、塩川のロシヤ菓子のやうな物を買ふ、ガクをやる。（日）
- 8・15 岩手県稗貫郡八重畑村小原ゆう。（日）
- 8・16 大町の礼子・真理を連れて来る、砂糖やばんを買ふ。（日）
- 今朝カ来る、袋入れのお土産を買ふ。和七郎から小遣入を買ふ。
- 矢口盛生 成績証明書。（日）

- 8・22 夜北のや来り、(昨夜廿一日)あさよ女の子を生み、母子共まめだと云ふ電話があったと知らせてくれる。(日)
- 10・8 操子来る、蒸菓子を貰ふ。九日義子来る、二人泊って行く。(日)
- 10・9 池田やの葬儀、七歳いはほ、見舞五拾銭、悔五十銭誠に気の毒。(日)
- 10・21 大町の礼子・道雄と二人来る、むし菓子最中エポンを貰ふ。二十一夜和七郎・あさよ・睦子と来る、たら石けんママレード三つ貰ふ。(日)
- 10・28 朝代帰る。
- 11・1 文雄さん菓を持って来てくれる、うづまきの菓子を貰ふ。二十七日晩、盛岡から西洋梨を一箱貰ふ。(日)
- 11・23 相馬様来てくれる、梨、りんご、ようかんを貰ふ。(日)
- 12・8 武井文雄君来てくれる。(日)
- 11 中島武、中村やのあられの美しいかん入を送ってくれる。(日)
- 昭和十三年
- 3・4 中島武君よりお菓子を貰ふ。(日)
- 3・5 東穂高小学校校長竹内・矢口訓導・水口君見舞に来てくれる。カステラ八本とパインアップル(水口)貰ふ。(日)
- 3 中堀坪田(弟)君見舞に来てくれる。(日)
- 3・19 鳥羽山田保恵さん来る、菓子折、名入富呂敷を貰ふ。すしを出す(双葉)。(日)
- 3・22 大町で男児生れ母子共元気良し。(日)
- 3・23 病気に付き廃校届を出す。県知事宛。(日)
- 3・29 瀬川久男氏来てくれる、コーリンと最中を貰ふ。(日)
- 4・6 研成義塾廃校届認可県知事大村清一。(日)
- 4・10 竹内校長いとま乞ひに来る、長野へ行き県視学になると云ふ。(日)
- 4・16 平林義行君、竹の子を持って来てくれる。東条晴君の十円の為替も同じく。(日)
- 和七郎に小為替にて金十円送る、横内正直より小倉かんを貰ふ。(日)

昭和一二・一三年(一九三七・三八)

昭和二三・一五・一七年（一九三八・四〇・四二）

4・21 武井文雄君来てくれる、むし菓子、はいもの種を貰ふ。大倉のお医者様来てくれる。（日）

5・8 轟田実君木曾の上田小学校（福島から一里）へ転任したとよってくる。東京市淀橋区角筈一ノ八七九 花井一郎方 井口鑑六郎。（日）

5・20 伊藤今朝十来る、ネズミ穴西の山の話。（日）

5・30 相馬愛蔵君長野にて信濃教育会（出席者百五十人）四時間ばかりこうろんの帰り路、昼頃よってくる。例の物と田舎ようかんとカ

ステラを貰ふ。きくのは十円末野は五円もらふ。茶を一杯のんで自転車で、白金へ行ったが今日のうちに東京へ帰ると云ふ。（日）

6・2 柏原の操子来る、たまごやきといちごを貰ふ。（日）

6・3 手塚縫蔵君（新橋あめ）、穂高小学校校長山崎君来たる、三十分ばかりにて帰る。（日）

6・6 島地むらじさん久し振にて来て、お祈をしてくれる。最中を一袋貰ふ。（日）

6・12 礼子帰る、満喜子も。（日）

7・21 午後十一時三〇分本籍地において死亡する。（戸）

○昭和一五年

7・24 六男鑑六郎小山田新次三女りゑと結婚する。（戸）

○昭和一七年

3・18 井口きくの本籍地において死亡する。（戸）